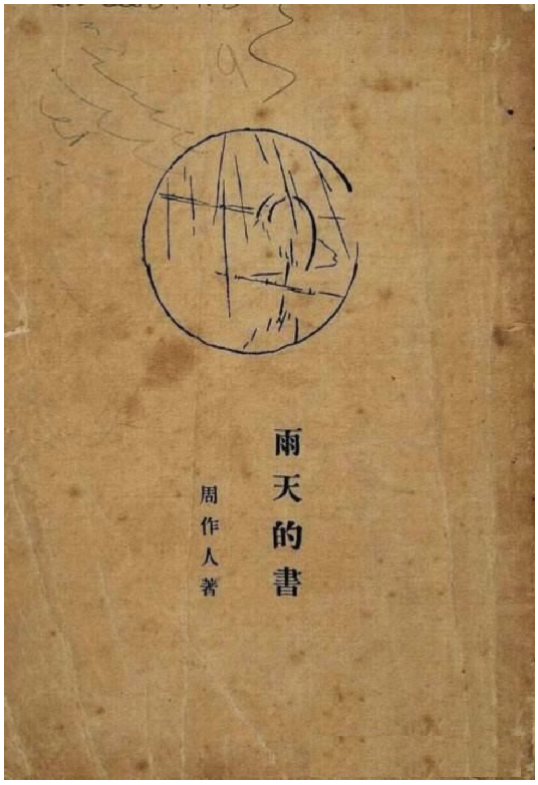
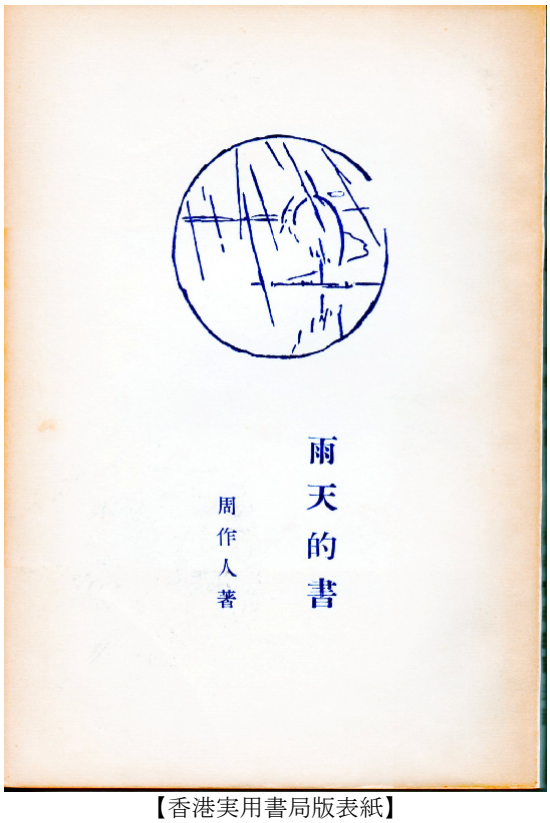
『雨の日の書』（雨天的書）

周作人著　　中島長文訳

【人民文学出版社版掲載の新潮社版表紙】



出典元：每日頭條
https://kknews.cc/culture/xmbjx39.html
【北新書局版表紙】



【香港実用書局版表紙】

周作人文集翻訳叢刊序

周作人が書いた書物に関する文章は、先に出した『周作人読書雑記』全 5 巻（平凡社東洋文庫）にだいたいは訳したが、彼の著作は翻訳の他は大抵が書物に関わらないものはないので、漏れたものも多い。これはそれを補おうというのではないが、補う分も含めて周作人が出版した最初の形にして日本の読者に読んでもらおうとしたものである。というのはやはり書物という視点からだけでは、彼が民国期の文化において果たした役割というか、彼の全体像が見えにくい。その全体をつかむためには、やはり彼の著作をそのまま提示するのが一番だろう。周作人の著作は 1980 年代の半ばに解禁され、1998 年にはテーマ別編集の『周作人文類編』（湖南文芸出版社・全 10 冊）が編まれ、2009 年 4 月には編年体の、索引も含めた『周作人散文全集』全 15 巻が広西師範大学出版社から出て、日記や手紙を除いた現存するほとんどの文章が読めるようになった。そういうわけで読書環境が整備され、中国では一時に爆発的なブームを引き起こし、今では少し落ち着いているようだが、近代作家としての認知は回復したように見える。極めて優秀な才能と文学的感覚を持ちながらほとんど日本の中国侵略によって潰されたと言ってよいこの作家の作品を、少しでも日本人に読んでもらいたいと思う。中国での動向に促されてか、日本でも次第に周作人に興味を持つ人は増えてきている。しかし研究者など原文が読める人はよいが、読めない人にとっては依然蚊帳の外である。この翻訳は自分で周作人を読むと同時に、元々そうした人々に読んでもらえば、周作人という民国時期の文人がその時代にどういうことを言っていたのかを知り、読者自身が自分で論を立てるにしろ、彼をめぐる議論に参加するにしろ、一応基礎的な資料としての役割を果たせるのではないかと思ったのである。もっとも専門家の議論にしたところで、この人本当に読めているのかというようなところはなきにしもあらずで、難しいところはある。しかしそんなところはよくわからないと言えば済むことで、それよりももっと難しいのは、小品文の名手と言われた彼の文章の文学的香気とも言うべきものを訳出できているかである。それはこの際あっさりと目を瞑ってもらい、のちの文才ある人の翻訳を待ってもらうしかない。ただ散文は詩とちがって意味の繋がりがまだ比較的取りやすい。それを頼りにだいたいのところが掴めるようにと心がけた。

翻訳に際してのもう一つの難題は、彼の文中に引用せられた外国語の文章をどうするかという問題である。抄文公、つまり引用魔とでも言おうか、と称せられた周作人の文章には、様々な書物からの引用が山盛りである。ただ日本の読者ということを考えれば、ギリシア語や英語からの引用は、周作人の翻訳をそのまま重訳するしかない。問題は引用されたのが日本文の場合である。たとえば『徒然草』や芭蕉の紀行文など、日本人によく知られた文の引用を、周作人がいくらうまく中国語に置き換えていたにしろ、そこからの重訳では気が抜けてしまい、日本の読者にはかえって奇異な感じを与えるだろう。特に原文が詩歌になるとそれが突出してくる。わたしが試みた中国語訳された俳句や川柳からの復元では、たった一句「蝙蝠や人買船の岸による」がまぐれ当たりで戻っただけで、川柳の「お前たち何を笑うか爺様の屁」は残念ながら「爺様」は原文では「隠居」であった。短詩は言葉がイメージだけで繋がるのでまだまぐれもあり得るのだ

が、短歌になるともうダメである。それで日本の読者には引用の原文をできるだけ持ってくる方が、その文章を周作人がどういう文脈の中でどのように引いているのかが分かりやすいだろう。そう考えて先に出した『周作人読書雑記』では努めてそうした。しかし周作人が前にした原文の光景がどういうものであったかはそれでよく分かるが、彼がそれをどのように取ったか、どのように理解したか、どのように解釈したかは、また別問題で、それを見るためには引用部分の翻訳（中国語）を文章全体の文脈と主旨との関連からできるだけ正確に重訳して、必要なときには注釈をつけるより他に手はない。本来的には翻訳である以上そうするのが真っ当であるとは思う。ただここに訳した文章では、あるものは原文を引いたり、あるものは重訳したりして、二つの間を揺れ動いていて一定していない。どちらかに決めた方がよいのか、それもまだ決めかねているのである。この問題は他の外国語の場合でもたぶん同じことだろう。それぞれの言語に堪能な人が詳しい注釈をつけてくれることを待っている。

なお読んでもらえばわかることだが、文集ごとの翻訳とは言い条、『読書雑記』に所収のものは巻数を指示してあるのでそちらをご覧いただきたい。また戦後の翻訳では、周作人の日本関係の文章を集めた木山英雄さんの『日本談義集』（平凡社・東洋文庫 2002 年 3 月）が拙訳よりはるかに優れているので、そこに収録された文章は凡て木山さんの訳におんぶすることにして、目次にその旨を示した。

以上はいわゆる能書きをまとめた前口上である。実のところ『飁風』の広告にも載せたように、教師をしていた頃から教室で読んだりして、訳し貯めたものがまずまずの分量になっているので、ゆっくり注をつけて訳文も吟味してそのうち公表できるようにしておこうと考えていた。ところが気がついてみると、自分にはそれだけの時間が残っているのかどうかさえ怪しくなってきた。そこで老後の仕事はとりあえず放っておいて、今ある分を『飁風』の資料庫に入れてもらって、興味のある人に読んでもらうことにした、というのがほんとうである。その作業の最中、戦後初めて周作人の民俗学的な方面の仕事に本格的なメスを入れられ、中国民話学とでもいうべき分野を開拓された飯倉照平さんの訃報が伝えられた。はるかに敬意を払っていた飯倉さんはわたしより先輩だが、そのことでもいよいよ自分の持ち時間を意識することになった。

むかし人の文章を読んで、これはなんだろうと思うところに注が振ってあって、さてどうだと注を見れば「未詳」とくる、それを見てもどかしい思いをしたものだが、注をつける立場に立って見て、ああこれはこういうことなのだろうと思うようになった。つまり論者や訳者にも解らないから、このことについては知識や見聞もなく解りませんので、ご存知の方がありましたらどうぞお教えを賜りますようにという信号なのではないか、と。これらの翻訳にはそういうつもりで「未詳」をつけたので、一体どれだけの「未詳」がつくのか数えたことはないので分からないが、お気付きの方がおいででしたらどうかご教示を吝しまれませんように。そして「未詳」のみならず、本訳文の誤訳や欠陥などのご指摘もお願いしたい。

予告には夏休みまでに追い追い公開したいと書いたが、読み返しに思いの外時間がかかって、夏休みはとっくに終わってしまった。今後もこの調子でいくとかなり時間がかかりそうだ。食言をお詫びするとともに、そのことも予め白状しておく。

　なお表紙の写真については主に佐原陽子さんの助力を得、オンライン上の様式・構成の作成は高井美香さんに依頼した。お二人の協力に感謝する。
2019 年 9 月 15 日、五四運動百周年に際してかろうじてその糸を繋いだ香港の抗議運動の行く末を案じて。

周作人文集翻訳叢刊凡例

一、翻訳の底本は原刊本ないしその影印本とした。正確には初出誌から直接訳したものもあるが、整理の過程で一通りは原刊本と対校した。
他に岳麓書社版周作人各文集・河北教育出版社版『周作人自編文集』・『周作人文類編』・『周作人散文全集』等を適宜参照した。

二、各文章の末尾にその初出誌を示した。

三、『周作人読書雑記』（平凡社・東洋文庫）全5冊に既収の文章は収録せず、目次にその巻号を示した。木山英雄氏訳『日本談義集』（平凡社・東洋文庫）所収の文章は収録せず、同様にそのことを示した。

〇〇→『読書雑記』第〇巻
〇〇→『日本談義集』

四、先行する文集にすでに収録済みであるものは、上記と同様に当該の文集には収録せず、先行する文集名を示した。例えば、『談龍集』所載の「日本の諷刺詩」はすでに『自分の畑』に収録されているので、次のように示した。

「日本の諷刺詩」→『自分の畑』

五、注釈は精粗一定しない。本文中〔〕の中は訳者の注である。

六、注釈に用いた写真版はほとんどがInternet Archiveからの借用である。これには大いに感謝の意を表する。

『雨の日の書』（雨天的書）版本及び目次

新潮社　民國 14 年 12 月初版
香港實用書局 1967 年 11 月影印本云此書據民國 22 年北新書局版影印、但闕「若子的死」一文、因而此書肯定據 1929 年（民国 20 年）以前的新潮社版或北新書局版影印。未知北新初版的出版年月日期。
河北教育出版社版　2002 年 1 月據新潮社 1925 年 12 月排版　止庵校訂　周作人自編文集。
人民文學出版社版　1988 年 4 月北京初版排印　中国現代文学作品原本選印之一、與『自己的園地』合訂。

岳麓書社 1987 年 7 月據民國 25 年北新書局版排印

目次中、文章のタイトルの日本語訳の後に括弧に入れたのは原文の篇題で、日本語訳と同じになるものは省いた。

序　(11)
自序二　(12)
雨に苦しむ（苦雨）　(14)
鳥の声（鳥聲）　(17)
日記と尺牘（日記與尺牘）　→『読書雑記』第四巻
死の黙想（死之默想）　(19)
弔辞（唁辭）　(21)
若子の病気（若子的病）　(23)
体操（體操）　(25)
懐旧（懷舊）　→旧版『自己的園地』
学校生活の一葉（學校生活之一葉）　→旧版『自己的園地』
初恋（初戀）　→旧版『自己的園地』「夏夜夢」之内
娯園（娛園）　→旧版『自己的園地』
故郷の野草（故鄉的野菜）　(26)
北京の茶菓子（北京的茶食）　(28)
茶を飲む（喝茶）　(29)
蝿（蒼蠅）　(32)
“破脚骨”（破脚骨）　(34)
日本の海賊（日本的海賊）　→木山英雄氏『日本談義集』（平凡社東洋文庫）
われわれの敵（我們的敵人）　(36)

十字街頭の塔（十字街頭的塔）　(38)
上下身　(41)
黒いチョッキ（黑背心）　→『読書雑記』第一巻
トルストイの事（託爾斯泰的事情）　(43)
“大人の危害”およびその他（大人之危害及其他）　(47)
エリスの話（藹理斯的話）　(49)
生活の芸術（生活之藝術）　(51)
笠翁と兼好法師（笠翁與兼好法師）　(53)
犬は絨毯を引掻く（狗抓地毯）　(55)
清浄に見ること（浄觀）　(57)
友人に与えて性道徳を論ずる書（與友人論性道德書）　(59)
友人に与えて懐郷を論ずる書（與友人論懷鄉書）　(62)
友人に与えて国民文学を論ずる書（與友人論國民文學書）　(64)
教訓の無用（教訓之無用）　(66)
いわれなき感慨（無謂的感慨）　(68)
日本の人情美（日本的人情美）　→木山英雄氏訳『日本談義集』（平凡社東洋文庫）
わたしの復古の経験（我的復古經驗）　(70)
一年の進歩（一年的長進）　(72)
元旦の試筆（元旦試筆）　(74)
沈黙（沈默）　(76)
山中雑信（山中雜信）　→旧版『自己的園地』
済南道中（濟南道中）　(78)
済南道中の二（濟南道中之二）　(80)
済南道中の三（濟南道中之三）　(83)
文法の趣味（文法之趣味）　→『読書雑記』第一巻
神話の弁護（神話的辯護）　→『読書雑記』第一巻
続神話の弁護（續神話的辯護）　→『読書雑記』第一巻
神話の典故（神話的典故）　→『読書雑記』第一巻
サイレンの物語（舍倫的故事）　(85)
科学小説（科學小說）　→『読書雑記』第三巻
『紡ぎ車の物語』を読む（讀『紡輪的故事』）　→『読書雑記』第三巻
『欲海回狂』を読む（讀『欲海回狂』）　→『読書雑記』第三巻
『京華碧血録』を読む（讀『京華碧血録』）　→『読書雑記』第一巻
『二本足』序（『兩條腿』序）　(88)
【附録】十五年前の回憶（十五年前的回憶）（汪仲賢）　(91)

北新書局版増補

若子の死（若子的死）　(93)

『雨の日の書』序

今年の冬は特に雨が多い。冬だから、やはり盆を傾けたように降るのは具合が悪いのだろう。ただ蜘蛛の糸のようにしとしとと落ちてくる。雨は何も見えないくらい細かいけれども、空の色はとても陰鬱で、まったく気を腐らせる。こんなときにはいつもある空想を引き起こす。もし江村の小さな家で、ガラス窓に寄り、白炭の火鉢にあたって、清茶をすすりながら、友人と閑談するなら、ずいぶん愉快な事だろうと思う。だがこうした空想は当然のこと実現の見込みはなく、また空を見ると、やはりいよいよ陰鬱になる。 少しは真面目な仕事をしようとしても、気持ちが散漫で、まるで気の抜けた焼酎のようで、少しも味がしない。仕方なく手に任せて一二行書くが、特に別に考えが出るわけではなく、いささかこの雨の日の気鬱な時間を相手にしようというまでである。

冬の雨はいつも降るものではない。日没後晴れなければ雪か霰になる。しかし晴れて雪が明るいときにも、人々の心にはやはり雨の日があって、しかも陰鬱な期間がもっと長くなるかもしれない。したがってわたしのこの雨の日の随筆も続けて書かれる機会があるだろう。一九二三年十一月五日、北京にて。

※初出：1923 年 11 月 10 日『晨報副刊』

自序　二

一昨年の冬『自分の畑』の出版以後、『雨の日の書』を書き始めたが、半年のうちに六篇書いただけで、中止してしまった。だがこの題目は気に入っているので、いま相変わらずこの小さな書物の名前に持ってきた。

この集には全部で五十篇の小文があり、十分の八はここ二年来の文で、「初恋」など五篇は『自分の畑』から選んだ。 これらは大抵が雑感随筆の類で、批評とか論文といったものではない。話では天下の人は最近もうこうした小品文は読み飽きたそうだが、わたしは長篇の大文は書けないから、それも仕方がない。わたしの考えはもともとただ自分が言わねばならぬことを言いたいだけで、そうした話は面白くないし、言ってもうまく言えず、長くもないのは、もともとわたし自身の欠点である。欠点も一つの特徴であるのだけれども。こうしたものを発表しても、見飽きた人は自ずと見ないだろうから、他になんの面倒もない。ただ出版した書店がいささか損失を被るだけだろう。なんとか、わたしはそう願うのだが、その損失があまり大きくならないように。

わたしはこの小書を編み終わって、よくよく考えてみたが、いささか驚きを禁じ得ない。というのは意外にも二つのことを発見したからである。一つは、わたしがなんと道徳家であったことだ。わたしは極力あらゆる家のうちから脱却しようとしたのだけれども、たとえば文学家とか批評家とか、むろん道徳家は言うまでもない。 わたしが普段から最も嫌いなのは道学者である。（あるいは新式に倣えばパリサイ人である）それがなんとまさに自分が一人の道徳家であったせいだとは。わたしは彼らの偽道徳、不道徳な道徳を打破しようとした。しかし同時に無意識的に自分が信じる新しい道徳を打ち立てようとしていたのだ。自分の一篇一篇の文章を読んだ。中にはいずれにも道徳の色彩と光芒が含まれていた。外面はゴロツキのような土匪のようなことを言ってはいるけれども。わたしは道徳のための文学に反対していたが、自分ではどうしても文章のための文章を一篇として書けていない。結果は何巻かの説教集を編集しただけだ。これはなんという滑稽な矛盾であろう。仕方がない、どうせ文苑伝には入りたくないから、（むろん儒林伝にも入りたくない、）そうしたことは構う必要はなく、やはり“吾が好むところに従って”、ずっとそのままやって行こう。

二つは、わたしの浙東人気質が結局抜け切れていないことである。わたしたち一族は紹興にただ十四世いただけで、その先はどこの人か判らない。普通は湖南道州だと称するけれども、もっと遡れば自ずと魯の国である。この四百年の間の越中の風土の影響はたぶんとても深く、それがわたしの抜きがたい浙東性をつくりあげたのだろう。これがつまり世人の言う「師爺の気」である。 もともと師爺と質屋の番頭は紹興の出す悪い物で、民国以来すでに次第に減少してはいるが、その法家の過酷な態度は、決して職業だけに限らず、田舎にまで瀰漫して、まるで一種の潮流になった。清朝の章実斎、李越縵はすなわちこの派の代表であって、彼らはいずれも人を罵るのが好きという癖がある。わたしは小さいころから“病は口から入り禍は口から出る”という古訓を知っていた。後で又紳士淑女の中に跡を晦まそうとして、さらに努力して何事にも慎重たら

んと学んだが、旧性移し難きをいかんせん、燕尾の服は終に羊の脚を隠すことはできなかった。旧作を調べて見るに、どうもでたらめばかりで、殊に敦厚温和の気が少ない。ああ、我それ終に“師爺派”となるか。しかれどもこれまた仕方がないに属し、わたしは自分が越人であるからといってわざとそうする必要もないし、またそれを学士大夫が喜ばないからといってわざとそうしない必要もない。わたしには京兆の人たるの志があるが、自然はわたしが浙の人でないとも認めない。ならばわたしも勝手にやるしかない。

近ごろ文章を書くに平淡自然な境地がとても羨ましい。しかし古代あるいは外国の文学を読んで始めてそういう作品に行き当たり、自分では夢にもそうしたものが書ける日が来るとは思わない。なぜならこれには気質・境地と年齢の関係があって、無理をすることはできない。わたしのような性急な癖のある人間が、中国のこの時代に生まれて、従容として静かに平和で角のない文章を書けるなどと望むのは実に難しい。わたしはただ希望し、祈る。わたしの心境がこれ以上ざらつき、荒れ果てないようにと。それこそがわたしの大願望である。最近三、四カ月の文章を調べると、多くが例によって道学者を罵るものだが、事柄が無聊な上に、人もまた無聊で、文章も無聊である。つまりこのような本にさえ入れるに値しない。わたしの心は本当にすでにあまりにも荒んでいる。田園詩の境界は以前偶然の避難所であった。だがこれとも近ごろはいささか疎遠になった。今後はどうすればよいか、よくよく考えねばならない。――ただ残念ながら今の中国では考える余暇すらない。

民国十四年十一月十三日、病中枕によりて書く。

イギリスの十八世紀にジョン・トーマス・スミス（John Thomas Smith）がいて一冊書物を著した。それも『雨の日の書』（Book for Rainy Day）と訳せるが、彼のは雨の日に読む本ということで、わたしの考えとは違う。その本をわたしは見たことがなく、ただ詩人ブレイク（William Blake）を述べた本のなかで引用された一節を読んだだけである。なぜなら彼はブレイクの良い友人であるから。　　十五日また記す。

※初出：1925 年 11 月 30 日『語絲』第 55 期

雨に苦しむ[i]

伏園兄：

　北京はこのところ雨が多く、君は長安道上でも雨に遇っているかどうか知りませんが、思うにきっと旅の趣を増していることでしょう。雨中の旅は必ずしも愉快だとは限りません。わたしは以前杭州・上海間の列車でよく雨に遇い、いつも困難を感じました。だから汽車での雨には何の興味も感じません。だが黒篷船に横になって静かに篷を打つ雨音を、それに加えてぎぃーぎぃーと鳴る櫓の音、さらに「岸によるぞー、よってーよってー」という掛け声を聴くのは、一種夢にも似た詩境であります。もしもう少し大胆になれば、足こぎ船に仰向けに寝て、雨を冒して夜行すれば、もっと水郷の住民の風趣というものが明らかになります。ちょっと危険で、不注意に、寝返りを打ったりすると、たちまち船底を天に向けることになりますけれども。二十年余り前東浦に先父の保母の葬儀に行ったことがありますが、帰りに暴風雨に遭い、一葉の扁舟は白い鷲鳥のような波浪の中を大樹港に滑り込みましたが、危険極まりなく愉快も極まりなかった。わたしにはたぶんまだ相当「魚であった」時の――少なくとも断髪文身の頃の癖があるのでしょう。水に対してすこぶる親近感を持っています。でも北京の泥の池のような多くの「海」には実に不満であります。このような水はなくても何の惜しいことがありましょう。君は「陝半天」[ii]に行くには二日ばかり準砂漠の道を歩かねばならないようですが、その時もし風雨に遇ったら、多分とても気持ちがいいでしょう。遥かに思うに君は騾馬が曳く車にあぐらをかいて、砂漠を、大雨の中を、四ダースの内のサイダーを飲みつつ悠然と進むのは、「亦快ならずや」の一つということになるでしょう。 だがこれはわたしの空想でしかなく、詩人の理想と同じく当てにはなりません。あるいは君は騾馬の車で雨に遇い、とても困惑して、ちょうど毎日悲鳴を上げているところかもしれません。これは君が北京に帰ってきてから訊くことにしましょう。

　わたしは北京で、この何日かの雨に遇い、ずいぶん難儀をしました。北京はもともと雨が少ないので、雨具が完全でないばかりか、家屋の構造にしても、雨を防ぐには周到さが欠けています。 ほんとうの金持ち以外は、煉瓦塀は滅多になく、大抵は泥壁に漆喰を塗ってそれでお終いです。近頃は天気がよく変わり、南方では酷寒、北方では長雨、そのため両方で建築上の欠陥が露わです。一週間前の雨では裏庭の西の壁が崩れ、二日目には「梁上の君子」が北の部屋の金網の窓を伺いにお出まし、次の日から急いで七、八人の職人を呼んで、二日がかりで、始めっから作り直し、十中の八九は完成して、なんとか高枕で寝られると思ったら、前夜の雨で又門口の南の壁が二三丈にわたって崩されました。今回びくついたのはわたしではありません。川島君「あの人たち」二人です。というのは「梁上の君子」がまたも御光臨遊ばして、きっと「あの人たち」の窓の下に隠れて盗み聞きをしたのでしょう。「あの人たち」の不安を解消するために、晴れるのを待って、急いで大挙して修築しなければなりませんが、あまり長くならないよう願っています。ここしばらくは川島君の弟さんに頼んで御苦労ながら警護役をやってもらうしかありません。

　一昨日は一晩たっぷりの雨が降り、夜中に何度目が覚めたかしれません。北京は時たま誰かが

ご機嫌で爆竹をいくつかぶっ放す以外は、夜は総じてまだ安静なのですが、ああしたバラバラという雨音だけはわたしの耳はあまり聞きなれず、だからしょっちゅう目が覚めるのです。眠っていてもまるで耳に麺のようなものが粘りついている感じで、寝ていてとても不愉快です。もう一つ、一昨日の晩には子供たちの報告によると、表の庭の溜り水がすでに階段から一寸も離れていないということでしたので、夜中に雨音を聞きながら、心では何がなし水はもう階段まで来て、西側の書斎にまで入ったのではないかと思ってしまうのです。やっとの事で朝の五時になって、裸足で傘をさし、西の部屋に駆けつけたところ、果たして思っていた通り、部屋中水浸し、一寸ほどの深さがありました。これで何とか一息嘆息をつくやら、安心するやらでした。もしこんなにいそいそと駆けつけたのに、水がなかったら、恐らくその時は却って失望し、今のこのような満足はなかったかもしれません。幸い書物は全て濡れませんでした。何も値打ちのあるものはありませんが、湿って一つ一つ紙の餅になると、やはりとても不愉快です。今では水はすでに引きましたが、まだ大水が来た後のよくある臭気が残っていて、もちろんお客と座談はできず、自分でもそこで物を書くことはできません。だからこの手紙は裏のオンドルの上の小机で書いています。

今度の大雨では、二種の人間が喜んだだけです。第一は子どもたちです。彼らは水が好きですが、なかなかお目にかかれません。いま庭中が川になったのを見て、群れをなして「川流れ」をやりました。裸足で水の中に入るのは、実はかなり冷たいのですが、彼らは恐れず、水に入ったままなかなか上がろうとしません。大人は子どもたちが面白そうに遊ぶのを見て、一人二人と加わりましたが、成績はあまり芳しからず、その日のうちに滑って転んだのが三人、そのうち二人が大人でした。――その一人はわたしの弟で、一人は川島君でした。第二に雨降りを喜ぶのはカエルです。以前子どもたちと高亮橋まで魚釣りに行って釣れなくて、かなりのカエルを捕まえただけですが、緑のやつ、縞模様のあるやつなど、持って帰って皆庭に放しました。ふだんは偶に何声か鳴くだけですが、ここ数日は一日中鳴きわめいています。ことによると不作の兆かもしれませんが、とても田園の風味があります。耳たぶの皮が柔らかい人は多くは、とても喧騒を憎み、雀、カエルやセミの鳴き声など、およそ彼らのうまいを妨害するに足るものは、なんでも痛烈に憎悪して関係を断ち、大いにこれを滅して昼寝せんという意気込みがありますが、わたしはそこまでしなくともよいように思います。ありのままに聴けば皆とても面白く、これらは長らく詩の材料となってきただけでなく、すべての鳴き声は実際聴くに耐えるものです。カエルは田んぼで群れをなして鳴き、深夜に静聴すると、往々にして一種の金属音になるのは、とても特別です。また時にはまるで犬の鳴き声です。古人がよくカエルやハマグリを吠えると言ったのは、たぶん実際の経験から来たのでしょう。わたしたちの庭のカエルは今はただ縞模様のある一種しか見えません。その鳴き声はむろん美しくはなく、ただがががという鳴き方で、革〔ge〕の音と言えます。ふだんは一声から三声で、それ以上はありませんが、ただ雨が降った朝には、一気に十二、三まで鳴き、実にどんなに喜んでいるかが分かるというものです。

この大雨は恐らく田舎の貧乏な友人には大きな不幸でしょうが、わたしは今までこの目で見たことがありません。単に想像によるだけでは役に立ちませんから、身につまされないのに代って

悲嘆することはしません。もし誰かがここに記されたのは個人の事であって、人生にとって無益だと言う人があれば、わたしも認めます。わたしはもともと個人の私事を言いたいだけで、そのほかに別に考えはありません。今日はお日様も出てきましたし、夕方には外に遊びに行けるでしょう。この手紙もこれでお終いです。

　わたしはもともとあなたの秦遊記を待っていたのですが、いま自分の方から先にあなたに書き送りました。これも「意表の外」の事になるでしょう。民国十三年七月十七日、京城にて書す。

※初出：1924 年 7 月 22 日『晨報副刊』

---

[i] この一文が周作人の室号の一つ「苦雨斎」の由来となった。

[ii] 「陝半天」　松枝茂夫氏訳『周作人随筆集』の注に「“陝半天”　“陝西は遠い”といふ意味の俗語」とある。天空の半分もの遠さということか。

鳥の声

古人に言あり、“鳥を以って春に鳴く”と*。今はもう春分を過ぎ、まさに鳥の声の季節となった。だがわたしはあまり聞こえないように思う。京城の西北隅はすでに農村に近いのだけれども。このいわゆる鳥とは当然あの悲鳴自在のものを指し、鶏がコーコーと鳴くのや家鴨がガアガアと鳴くなど家畜は言うまでもなく、よく馴れた鳩の類も数には入らない。というのは彼らはみな四時八節を忘れてしまっているからである。わたしが聞く鳥の声はただ軒端の雀のちゅうちゅういうのや、それに槐の木の上に毎日朝から来るキツツキの乾いた笑い、――これらはいずれも春の知らせにはならないようだ。雀はあまりに細々しすぎるし、キツツキは又ちょっと乾いた気味が多いようだ。

イギリスの詩人ナッシュ（Nash）に詩が一首あり、いわゆる『名詩選』（Golden Treasury）の巻首に採られている。彼は言う、春が来た、花々は咲き、娘たちは踊る、天気は温和、鳥たちも皆歌い出す、と。彼は四種の鳥の声を列挙している。

Cuckco, jug-jug, pee-wee, to-witta-woo!

この九行の詩は実に面白いが、わたしは敢えて訳さない。というのは一に下手な訳が怖い、二に誤訳が怖いからである。今一行だけ書き写し、四種がどんな鳥か見てみよう。第一は鈴懸バトで、書名は鴪鴣で、彼は自分でその名を呼ぶことは、疑いない。第二はナイチンゲール、つまりかの林間の“痴れ鳥”で、古代ギリシアの女詩人はそれを“春の使者、美しい音の夜の鶯”と称した。彼の名貴や想うべしである。ただわたしはそれが一体どんなものか知らない。わたしたちの田舎の黄鶯も“宙返り鳴き”をすることができ、捕まった後はいつも妻子を想って急死するのは、西方の従兄弟たちと同じだが、彼は小鳥を食うのである。そして又痴れたように一夜を鳴き明かして血を吐くことはない。第四は怪しげなようだがふくろうである。第三はあまりはっきりしない。蚊食い鳥と言う人もあるし、田鳧と言う人もあるが、スミスの『鳥の生活と物語』第一章に言うところによれば小ふくろうである。もし本当なら、四種の好い鳥のうちふくろう一家がその二をも占めることになる。スミスはこの二つはともに褐色のふくろうで、ほかの怪声怪相のとは違うと言う。彼の書物には図像があるのだけれども、わたしにはそれが鴟なのか鴞なのかそれとも流離の子なのか見分けがつかない。だが要するにふくろうの類なのだろう。子どものころ彼らの鳴き声を聞いて、あるものは雑貨売りの振り太鼓のような声、あるものはまるで“掘窪”（dzhuehuoang）〔穴掘れ〕を連呼しているようで、俗に不祥、主に死喪ありと云うので、聞いた者は多くがとても気に病む。おそらくこの風習は昔からあったものだろう。 観頴（かんかい） 道人の『小演雅』を調べると、記録した古今の禽言の中にはふくろうの話は見えない。しかしながら仔細に回想すると、そうした鳴き声は実際は決して間違っておらず、どんな風の音、笛の音、鳥の声よりも面白いのは、詩人シェリー（Shelley）の言う通りである。

いま、北京について言えば、こうしたいくつかの鳴き声はどれもなく、あるのはやっぱり雀とキツツキだけである。烏は、いなかでは老鴉と称し、北京では毎日聞くことができるが、少しの風雅の気もない。しかも年がら年中喧しく、いったいどの季節の鳥かわからない。雀とキツツ

キはよい歌は歌えないけれども、その細々したそして枯れたなかにも結局は少し春の気を含んでいる。ああ〜あ、あの可愛気のない烏の声は聞き飽きた。しばらくこれらの春を鳴く小鳥を歓迎し、彼らの談笑に耳を傾けようではないか。

“ちゅう、ちゅう！”

“かっかっ！”

（民国十四年四月）

※初出：1925 年 4 月 6 日『語絲』第 21 期

---

*韓愈「孟東野を送る序」　鳥を以って春に鳴き、雷を以って夏に鳴き、虫を以って秋に鳴き、風を以って冬に鳴く。

死の黙想

四世紀のギリシアの厭世詩人パラダスの小詩に次のようなのがある。（Polla laleis, anthrope――Palladas）

「君はあまりに饒舌だ、人よ、まもなく地下に眠らんとするに。
口を閉じよ、君は生きている時にこそかの死を考えよ。」

これはとても面白い話である。死に関する問題は、わたしも何もする事がない時に黙想したことがある。（樹下ではなく、大抵は車の上で、）しかし何も考え出せなかった。――これはわたしが「楽天的詩人」であるせいかもしれない。しかし実際わたしは、曹慕管君のように、死を崇拝などしたことがあろうか。だがわたしはあまり死の神秘を感ずることができない。だから十日十夜も思索する必要を感じないし、形而上の面でも饒舌に語るものを持つことなどできないのである。

窃に世人が死を恐れる理由を察するに、自ずと様々な違いがあるが、「愚を以て之を観るに」三項に決めることができる。その一は死ぬ時の苦痛を恐れる、その二は人の世の快楽を捨てがたい、その三は家族を顧慮することである。苦痛は死よりもまだ怖い。これは実際の事である。十年余り前遠い親戚の伯母がいて、とても困窮して、十二月の末に川に身を投げて死のうとした（われわれの田舎では川は冬中凍らない）、しかし彼女は身を投げたが、すぐに這い上がってきた。水があまりにも冷たかったからと言うのだ。彼女のことをバカだと笑った人があるかもしれないが、だがこれは却って本当の人間的感情である。もし誰かが、某生物学者の言うように、猛獣に食われて死ぬのは痒いところを掻くようにとても愉快だということを確実に保証できるなら、きっと多くの人が食糧を包んで山に入り餓えた虎に身を投げ与えるだろうと思う。残念ながらこの点は担保できないから、他の事ではもうなんの未練もない人でも、このためにいささか躊躇せざるを得ないのである。

家族を顧慮するのは、恐らく死を恐れる理由の中でも比較的小さいものだろう。というのはこれにはまだ救う方法があるからである。将来いつの日か、社会制度が少しく改良され、優生的節制が行われるほかには、みんな老幼を問わずそれぞれができるところを尽くし、それぞれが必要とするところを取ることができ、およそ普段の衣食住、医薬・教育がみな公によって供給され、それ以上のもっとよい享受は個人自身の努力によって獲得されるならば、そうした顧慮はなくてもよく、夜の夢さえもきっとずっと平安になるだろう。だがわたしの言うのはもともと空想で、実現は幾十百年の後か分からない。しかも結局のところ必ずしも実現するのかどうかも分からない。それではこれも終には遠水は近火を救えずで、何の役にも立たない。比較的確実な方法はやはりなんとか金を儲けることで、そうした憂慮を救うことができる。安閑とした死を得るために金儲けをするのは、とても高雅な俗事である。ただ金儲けはとても容易ではなく、われわれ誰もがやれる事ではない。まして天下の金持ちは銭を持つとかえって死なないから、この方法もすこぶる危険である。

人の世の快楽は自ずととても執着しやすいものであるが、これはただ青年男女にして深切に感

ぜられるようで、われわれのような「不惑」に近い人間は、凡人の苦楽を嘗めたことがあるが、このほかに別に皇帝になろうなどという野心はないから、まだ捨てがたい快楽があろうなどとは思わない。わたしの今の快楽はただ暇な時に一杯の清茶を飲み、新しい書物を読む、（近頃政府がわれわれに替わって貯蓄をするので、手元には茶を買う金しかないけれども、）それが虫や鳥の歌唱を述べたものであれ、あるいは賢者哲人の思想を記したものであれ、古今の雕刻絵画であれ、いずれもわたしが人生の幸せを感ずるには十分である。しかしながら友人がやってきてよもやま話をする時には、書物は置く。まして「無私の神女」（Atropos）の命令とあらばこそである。われわれは路上にたくさんの乞食が、皆すでに生きた人間の楽しみもないのに、苦しみながら生きようとするのを見れば、快楽が必ずしも死を恐れる重大な理由ではないことがわかる。あるいは捨てがたい人の世の苦しみも人をこの塵の世に恋々とさせるに十分なのかもしれない。
彼ら乞食のこととなると、実はすでになんの心残りもなく、大いに「来るも去るも自由」なのだが、実際にはそうもいかない。もし上に述べた理由のためではないとすれば、きっと川の水が骨に徹する北風よりももっと冷たいのを恐れるためだろうか。

「不死」の問題については、どんな意見があるだろうか。少年の頃五六年水兵をやって、頭に多少とも唯物論の影響を受けたので、「不死」という観念は起きなかったように思う。わたしはとても荒唐無稽の神話を聞くのが好きなのだけれども。たとい神話の物語が述べるようだとしても、ああした不老長生の生活は少しも好きではない。冷え冷えとした金門玉階の建物に住んで、五香牛肉のような麒麟の肝や鳳凰の干し肉を食べながら、毎日ぶらぶらする事もなく、松の木の下で碁を打つのでなければ、金童玉女とふざけ合うなどとしたら、なんの趣味もない。 まして永遠にそうだとすると単調かつくたびれてしまうだろう。また人の話では、仙人の時間は凡人のそれとは違うということだ。詩に「山中まさに七日、世上已に千年」と云うから、爛柯山下の六十年は碁局のそばではたったの一時間でしかない。 どうして日永の感があろうか。しかしわたしから見れば、仙人が二百万年生きたとしても人間世界の四十の春秋にしか当たらない。このように時間を浪費するばかりで実際に無益な生活は、まったく心根すり減らして求めるには値しない。もし二百万年後に劫波（カルパ）がやってきて、そこで忽ちお終いとなるのであれば、五十歳の凡夫に笑われるだろう。少しいいのはやはり西方の鳳鳥（Phoenix）のやり方で、五百年生きると、蛻化して、幼鳥となる。このような輪廻はとても面白い。――残念なことに彼らはこの一家だけで、他人は真似できない。たぶんわれわれはやはりこの許された時間の中で、この平凡な境地にあって、いささかの安閑と悦楽を求めることができさえすれば、それが無上の幸福なのであろう。「死後は、いかん？」という問題に至っては、それは神秘派の詩人の領分であって、われわれ平凡人が仙人になったり亡魂になったりすることにいずれも関心がないように、それについては自ずとなんの興趣もない。（民国十三年十二月）

※初出：1924 年 12 月 22 日『語絲』第 6 期

弔辞

昨日の夕方、妻が孔徳学校の陶先生からの電話を受けた。ただ一言、「斉可が亡くなった――」と言うのだ。斉可はそこの十年生で、胆石症（？）を患っていたので協和病院へ治療に行ったのだが、あとで待遇が不親切だというので、ドイツ病院に入り直し、昨日手術をしたが、ついに覚めなかったのだそうだ。彼女は学校では高学年生であったし、又天性豪爽で親切だったので、我が家の三人の子どもが初めて学校に上がったころ、みな彼女の世話を受け、まるで大きい姉さんの様であった。今度の突然の死別に、子どもたちは驚いたけれども、まだ彼らの親友を失った悲哀は理解できない。しかし妻はいつも学校へ行って彼女とは馴染みであったので、昨日知らせを聞いた後は長らく呆然として、一晩眠れなかったのは、実に怪しむに足りない。

死は総て悲しむべき事であるが、特に青年男女の死は。死の悲しみは死者に属さず生きている人間のものであるけれども。常識からいうと、死は自然の負債を還すことであって、誕生と同様厳粛にして平凡である。われわれが死者に対して示すべきは一種の敬意である。それはわれわれがゴールの下まで走った競走者に対するがごときものである。彼が一着であれ、あるいは途中で何度か躓いて最後に走りついたのであれ。中国の今のような情況のもとでは、「死の賛美者」（Peisithanatos）という言葉は必ずしも全く無意味ではない。ならば「歳は短いけれども憂も亦少ない」のはよい事だとも言える。たとい未だ日光を見ない者の幸福には及ばないとしても。しかしながら死者にとってたとい本当に安楽であっても、生きている人間にはどうしても悲しい。われわれが死者を哀悼するのは、必ずしもその滅亡の悲哀を了解することにあるのではない。実は多くが追懐の念を引き起こし、痛切に今昔存没の感を生ずるからである。どのように無神を信じようと、あるいは厭世であろうと、こうした感傷は結局払いがたい。日本の詩人小林一茶は『おらが春』に彼の娘聡女の死を記して、次のように言う。

「……彼女はついに六月二十一日木槿の花とともにこの世を謝した。母は死児の顔を抱いて、おうおうと大泣きをしたが、これも怪しむに足りない。今になって明らかに、逝く水の帰らざる、散る花の枝に戻らざるを知ったけれども、どのように達観しようが、終に想いを断ちがたいのは、まさにこの恩愛の絆なのだろう。〔詩以て哀を志す〕

露の世や。
露の世ではあるけれども、
そうではあるけれども。」*

露の世ではあるけれども、しかしながら自ずと露の世の記憶はある、だからこそ相変わらず哀感が多いのである。メーテルリンクは『青い鳥』のなかで一句平凡な警句を吐いている。「死者は生きている人間の記憶に生きている。」斉さんは世にあること十九年、家庭・学校・親族・友人の間に、当然多くの磨り減ることのない印象を残している。したがって悲哀を引き起こすには十分である。われわれはそれらの人々の心情を思いやると、実に同情にたえない。別にかけるほどの慰めの言葉はないけれども。死にはもともと善悪はない。しかしそれが生きている人間に加える害は浅くはないから、やはりそれは悪だと言わざるをえない。

わたしは人間に霊魂があるのかどうか知らないし、おそらく今後も永遠に知らないだろう。だが死後の生活を希う心情についてはとてもよく理解できると思う。人が死後にももし生前と同じようになお霊魂をもつ存在であるならば、解決が容易でない困難が生じるだろうことは推測できるけれども、そのために滅亡の恐怖を消すことができるばかりか、いわゆる恩愛の絆もそれにふさわしい慰めを得ることができるだろう。人間は何か満足できない願望があれば、無意識のうちに儀式や神話に投影する。ちょうど夢の中に現れるのと同じように。伝説の李夫人や楊貴妃の物語、民俗での童男童女が死後召されて天帝の使者になるという信仰、いずれも無聊の極みの考えであるが、また本当の人情の美しさの表現でもある。われわれはそれが迷信だとは知っているが、わたしはこのような虚しい幻想の迷信の中にも自ずとその美と善の分子が存在することを確信する。これは死者の家族親友にとってどんなによい慰めになることか。もし彼らが信ずるならば――信じることができさえすれば、百歳の後、あるいは夢の中夜の内に、すでに死んだ親愛する者と相集まり、相見えることができるのだ。しかしながら、残念なことにわれわれはそれには不相応に科学の洗礼を受けてしまって、先人たちの祝福すべき愚蒙を失っている上に、さらに画廊派の哲人（Stoics）の超絶的な忍耐強さも養成していない。その結果はあたかも歯根に露出した神経のように、冷風熱気に従っていつでも痛さを増すばかりである。幻滅した現代人が不幸に遭遇することに対して、われわれはここに特に同情の意を表さざるをえない。

われわれの娘若子が病気になった時、斉さんはとても彼女に気を遣ってくれた。いま若子はもうよくなったが、まだ学校に行って親友とは顔を合わせていないのに、その人自身がいなくなった。いつか若子が思い返した時、やはり永遠の遺恨となるであろう。　民国十四年五月二十六日夜。

---

* 小林一茶『おらが春』（岩波版日本古典文学大系 58）「終に六月廿一日の葬の花と共に、此世をしぼみぬ。母は死児にすがりて、よゝよゝと泣くもむべなるかな。この期に及んでは、行水のふたたびは帰らず、散花の梢にもどらぬくひごとなどゝ、あきらめ兒しても、思ひ切りがたきは恩愛のきずな也けり。　露の世は露の世ながらさりながら　　一茶」

若子の病気

『北京孔徳学校旬刊』の第二期は四月十一日に発行され、児童の作品が二篇載っていて、そのうちの一つはわたしの娘が書いたものだ。

「夕方のお月さん」　周若子

夕方のお月さんは、大きくて明るい。わたしの二人の弟は言った。「お月さんに降りて来てもらい、ぼくらを抱っこして天まで遊びに連れてってもらお。お月さんが贈物くれたら、とてもうれしい。家に持って帰ってお母さんにあげよ、お母さんもきっとうれしかろ。」

しかしこの旬刊が郵便局から配達された時、若子はもう死なんばかりの状態にあった。その母は畳の上に拡げられた雑誌を眺め又昏睡の病人を見て、もう言うべき言葉もなく、わたしにしまわせただけだった、——これからも決して眼にすることのない記念品として。わたしはこの小文を読んで、思わずふと六歳の時に死んだ四番目の弟椿寿のことを思い出した。彼は急性肺炎になる二三日前、やはりしきりに女中に天上のことを訊いていた。わたし自身はそれはすべて迷信だということを知っているが、背筋に冷たいものが走るのを禁じえなかった。

十一日の夜中、彼女は熱を出し、それに続いてひどく吐いた。あいにく小児用の摂氏の体温計は小波波（わたしの兄弟の子ども）に壊されていたので、土歩君がちょうど二度目の種痘していて、華氏の体温計を応用したのだが、われわれの部屋には体温換算表がなく、熱を測ることができなかった。夜明け方になって隣の部屋から表を持って来て測ってみると、四十度三分もあった。八時ごろ痙攣（ひきつけ）を起し、妻は彼女を抱いて、“お玉が変だ、お玉が変だ！”と叫ぶばかり。弟の妻（つまり妻の三番目の妹）が外へ行ってその弟をたたき起し、“お玉が死んだ！”と言ったものだから、彼はびっくりして思わずベッドから落ちた。その時にはもう医者が来ていて、診察の結果は“流行性脳脊髄膜炎”が疑われる、症状は全部揃っているわけではないけれども、要するに脳の故障で、とても危険であるということだった。十二時又ひきつけ、今度は脳の方はまだその次で、心臓が黴菌の毒に中って非常に衰弱していて、血行不良を来たし、皮膚に黒ずみが現われ、腕を押すと、へこんだ白色痕がなかなか回復しない。その日一日、院長の山本博士、助手の蒲君、看護婦の永井君、白君が先後してやって来、山本先生は自分から四度も来、永井君はわが家に泊り込み、看病を助けた。最初の日は混乱のうちに過ぎ、次の日病人は悪くはならなかったけれど、一昼夜以来二時間に一度の樟脳注射が少しの効き目もなく、心臓はまだ衰弱していた。熱はすでに三八度から三九度のあいだまでになっていたけれども。その日の午後、病人がココア飴を食べたいと言うので、わたしは哈達門〔前門〕まで買いに走り、途中しょっちゅう不吉な幻想に襲われ、まっすぐ家に帰って何の動静もないのを見てほっとしたのであった。三日目は火曜日で、無理して学校に行ったが、午後三時半ちょうど授業に出ようとした時、家から電話があり呼んでいるというので、急いで休みにして帰って来た。幸い今度は囈言だけで、別に何の変化もなかった。夜中の十二時に山本先生は診察後、はじめて生命に別条はないと宣言された。十二日以来、二度の食塩注射、三十度以上の樟脳注射を経、身体は大小七つの氷嚢を抱いて、七十二時間の末、なんとか死の国を離れたのは、ほんとうにとび切りの幸いであった。

山本先生は後で川島君に、あの日曜日、彼はもうだめだと思ったと言われた。たぶん二日目か、永井君も弟の妻の部屋で涙を流していたが、彼女もこの小さな友だちがなぜだかこの家庭を去ろうとしていると思ったのだろう。しかしこの病人がついに万死の中から逃れて一生を得たのは、どこから来た力かわからない。医療か、薬か、彼女自身のあるいは別の不可知の力か。だがわたしは知っている。もし医薬とみんなの助けがなかったならば、彼女はとっくにいなくなっていたろうことを。わたしがもし何かの宗派の信徒であれば、わたしの感謝には往く所があり、そして当初の恐怖はあるいは減らすことができたかもしれない。だがわたしはそうすることはできなかった。わたしは未知の力に対して時には驚異を感じながら、それでもまだ感謝を捧げようという深密な接触はなかった。わたしはいま感謝を捧げたいのは人にあって自然ではない。わたしは山本先生と永井君の熱心な助けにとても感謝している。わたしも四年前肋膜炎を治してくれた苦労を忘れたことはないけれども。川島・斐君二君の毎日の心のこもった見舞にも、当然感謝しなければならない。

まるまる一週間眠って、脳はすでに次第によくなり、移動できるようになったので、それで十九日の午前中に病院に入院した。母と“姉さん”に付添われて。というのは心臓はまだ治療が必要で、病院に居れば何かと便利で、医者の朝晩二度の往診の手間が省けたから。 いま体温は元に戻り、脈搏も次第に恢復し、彼女はかつてわたしが二ヵ月にわたって住んだ病室のベッドに臥し、ただ一つの氷枕によりかかり、一つの小さな氷嚢を胸に置いて、両手を伸ばし、そこで歌をうたっている。妻はわたしと相談して、若子の兄妹が十歳の時には、 ともに十円ばかりを使って、使用人たちに分け与えそして何か物を食べて記念としたが、去年はそれだけのお金を出せなかったので、そうしなかったが、今回は病気がよくなったら、何とかしてそのようにして併せて快気祝いをしなければと言った。彼女はその会話の意味を聴き取って、反対した。“そんなのよくないわ。もし今年十歳なら、来年はまだ十一歳じゃないの！”と。わたしたちはそれを聞いて思わず破顔一笑した。ああ、このちょっとした情景を、一週間前には夢にも想像できたろうか。

緊張しきった心は一時にはなかなかゆるまない。今日はすでに若子の病後の十一日目で、午後少し頭痛がするので休みの届けを出し家に居て、庭を散歩すると、白や赤の丁子の花はすでに真盛り、山桃は盛りをすぎて憔悴しはじめており、東側の道傍にエロシェンコ君がロシアに帰る前に記念に植えた一株の杏の花はすでに散り尽していて、ただたくさんの緑の蒂が若葉の影に隠れているだけだった。春は去った。わたしたちがおびえおののいていた何日かのうちに、まるでいいかげんに人を遇らうかのように北京の短い春はとっくにこっそりと過ぎ去った。わたしたちは今年はついに桃や杏の花をよく見なかったが、これは残念なことかもしれない。しかし花は来年もまた咲くし、春は来年もまたやって来るから、来年になって見ればよい。わたしたちは今年幸いにも別の一たび去ると二度と来ない春光を留めることができたのだ。それだけでもう十分満足である。

今日わたし自身こうしたものを書くことができたのは、わたしの乱れに乱れた頭もようやく落着いたということだ。これも愉快な事である。　民国十四年四月二十二日雨の夜。

※初出：1925 年 5 月 4 日『語絲』第 25 期

体操

わたしには女の子が二人あり、小学校で勉強している。彼女らは他の教科については、どうということはないが、ただ体操がきらいなのだ。毎朝彼女らには母親か兄に時間割を見てもらうのだが、今日は体操があると聞くと、ほんとうに困ってしまうと言うのである。わたしは教育学には門外漢で、何の批評もできないが、自分の経験を考えてみると、子どもたちに同情を禁じえないのである。

わたしは小学校には入っていない。なぜなら当地に小学校が建てられた時には、わたしはとっくに学齢を過ぎていたから、入れなかったのである。だからわたしが入った学校は、海軍の学校であった。つまり多数の親類が兵隊になると言ってわれわれを軽蔑した所である。この“兵隊”の生活では、体操と操練は毎日ある。幸いそのころ体操を教えた――いまは海軍省で役人になっている――L先生は人柄が穏やかだったので、われわれには何の不服もなかった。われわれ武技がやれないものは、アレイを認定されさえすればよく、彼が“ダンベル”とか何とかかんとかという号令を発するのを聞いて、隊長の“ミスター高”についてやればよかったのだ。ミスター高は北に向って独り立ち、彼の特別に大きくて重い真鍮のアレイを振りまわす。しかし重いので、彼もあまり振りまわせない。そこでわれわれももっと勝手に、いいかげんにしてお終いなのだ。何年か経って、学堂の総監督がたて直そうとして、軍人出身のM先生を呼んで来た。彼自身の武技は確かに立派だったが、われわれは“ほんとうに困ってしまった”。彼はすべての人間に一律に習練するよう命令した。そこで何人か不幸な学友は横に掛け渡した雲梯の上で、進退ままならず、ある者は木馬の上でとんぼを切ったのに、下に転げ落ちた。アレイ隊は分散して、習練がうまく行ったのも多かったが、相変らずもたついているのも多く、一部分は反抗的逃避をした。初めはしばらく休みを申請するだけだったが、後になると結局本格的な長期休学となった。われわれのグループは、当然校内の注意人物となり、分に安じないと思われた。だがわたしは今思っても決してなんの間違いもしなかったように思う。M先生個人については、わたしはまだ好意を持っていた方だが、彼のその無理解にして厳格な統一的訓練法については、結局は嫌いだった。

先月、ある友人がわたしとシェイクスピアの演劇について談じ、彼はシェイクスピアは世界的に有名だけれど、彼の重要な作品を読んでも、結局どこがよいのか解らないと言った。これにはわたしもとても同感であった、というのはわたしもシェイクスピアが解らないからである。太陽の光熱は誰も受取るものがなくてもその価値を失わない。だが受け取らなかった人間にとっては効用がなかったと言わざるを得ない。学校の体操は教育者の承認を経て取入れた以上は、たぶんシェイクスピアの演劇と同じように、自ずと重大な価値があるのだろう。だが実際にどのようにすれば受け取られて効用があるようにできるかは、実に重要な問題である。　　（民国十年十一月）

※初出：1921 年 11 月 27 日『晨報副刊』

故郷の野草

わたしの故郷は一ヵ所に止まらない。自分が住んだことのある所は皆故郷である。故郷はわたしにとって何か特別のよしみがあるわけではない。ただそこで釣りをしそこで遊んだという関係で、朝な夕な顔を合せ、そうして知合いになったというだけで、ちょうど村の中の隣のようなもので、親族ではないけれども、別れて時が経っても懐かしく思うのである。わたしは浙東で十何年か過ごし、南京・東京でも六年過ごしたから、これらはいずれもわたしの故郷である。いまは北京に住んでいて、それで北京がわたしの故郷ということになった。

数日前妻が西単市場へ行って野菜を買って帰り、ナズナを売っていたと言ったので、わたしは浙東のことを思い出した。ナズナは浙東人が春によく食べる野草である。田舎では言うまでもなく、街中でも裏庭のある家なら好きな時に採って食べる。婦人子どもはそれぞれハサミを一丁と「苗籠」一つを持って、地面に蹲って探す。面白い遊びの仕事である。 その時子どもたちは、「ナズナに馬蘭頭（まあらんとう）〔紺菊の若芽〕、姉ちゃん裏に嫁に行った」と歌う。後になると馬蘭頭は田舎の人が街に売りにくるようになった。しかしナズナはやはり野草であって、自分で取りに行かねばならない。ナズナについては昔からすこぶる風雅な伝説があるが、これはどうやら呉の地方を主とするらしい。『西湖遊覧志』に、「三月三日男女皆ナズナの花を戴く。ことわざに、三春ナズナの花を戴けば、桃李も繁華を羞ず、と。」顧禄の『清嘉録』にも亦云う。「ナズナの花は俗に野菜花と呼ぶ、ことわざに三月三蟻が竈の山に上ると言うのがあるので、三日に家々では野菜花を竈の釜置きに置いて、虫を祓う。明け方には村童の呼売りが絶えない。あるいは婦人が髷に挿してよく目が見えるよう祈るので、俗に目の明るくなる花と云う。」だが浙東人はこうした事をあまり理解しないので、ただ採ってきてお菜にしたり餅（ビン）と炒めて食べるだけである。

黄花麦果は通称鼠麹草で、キク科の植物、葉は小さく少し丸く互生し、表面に白毛があり、花は黄色、茎の先に群生する。春に若葉を採って、クタクタに搗いて汁を去り、メリケン粉と和えて餅（ビン）にし、黄花麦果糕と云う。子どもたちにはそれを褒める歌がある。

「黄花麦果はもちもち旨い、
　表門閉めて自分で食べよ。
　半分だってやるものか、一つ全部を自分で食べよ。」

清明節前後の墓参りの時、いくつかの家――たぶん古風を保存している家では――黄花麦果をお供えにする、だが餅状にはしないで、指先ほどの小粒にしたり、あるいは小指ほどの細ヒモにし、五、六個を一纏めにして、なづけて繭果と言うが、どういう意味か分からない。あるいは蚕がまぶしに上る時の祭りに、こうした食品を使うので、その名があるのか、それも分からない。十二、三の歳に外地に出て外祖の家の墓参りに参加しなくなって以後、繭果を見たことがなく、最近は北京に住んでいてやはり、もう黄花麦果の影も見なくなった。 日本では「御形」と言って、ナズナとともに春の七草の一つで、やはり採ってお菓子に作る。形は艾餃子のようで、名を「草餅」と言い、春分前後に多くこれを食べる。北京にもあるが、食べてみるとやはり日本風味で、もう子どもの頃の黄花麦果糕ではない。

墓参りの時よく食べるものにもう一つ野草がある。俗に草紫（れんげ）、通称紫雲英である。農民は収穫後に、田んぼにタネを蒔き、肥料とする、蔑視された植物であるが、柔らかい茎を採って茹でて食べると、味はすこぶる新鮮で美味しく、豌豆の豆苗に似ている。花は紫紅色、数十畝が続いて途切れず、一面の錦繍は、まるで華美な絨毯を敷いたようで、とても美しい。しかも花びらは蝶のよう、あるいはひよこのようで、特に子どもが喜ぶ。時に白色の花があり、疫痢に聞くと伝えられ、とても珍重されるが、なかなか手に入らない。日本の『俳句大辞典』に、「この草もまた蒲公英と共に、頗ぶるフワムリアーなもので子供の時分から親しまれるものである。恐らく女にして紫雲英を摘んだことのないものは有るまい。」*と云う。中国には古来花環はなかったが、紫雲英の花鞠は子どものよく遊ぶもので、この点はわたしが子どもらに替わって喜ぶところである。浙東の墓参りには鼓吹楽を使うから、少年はいつも楽の音について「墓参りの船に別嬪さん」を見に行くのである。金のない家には鼓吹はないけれども、船の上や篷の窓下にはいつも紫雲英と山躑躅の花束が出してある。これも墓参りの船であることの確実な証拠なのである。（民国十三年二月）

※初出：1924 年 4 月 5 日『晨報副刊』

---

*『新式解説俳句大辞典』鴻巣槇雨・坂本雪鳥・西村酔夢編　博文館明治四十四年十二月初版。

北京の茶菓子

東安市場の古本屋で一冊日本の文章家五十嵐力の『我が書翰』*を買った。中に東京の茶菓子屋のお菓子はどれも美味くなくなった、ただ何軒かたとえば上野山下の空也など、まだいい菓子で、食べると餡と砂糖それに果実が渾然と融和し、舌先ではそれぞれの味を見分けることができないと書いてある。徳川時代江戸二百五十年の繁華を考えると、こうした享楽の流風余韻が今日まで留伝しているのは当然である。京都と比べると無論いささか及ばないけれども。北京は建都してすでに五百余年の久しきにわたる。理屈から言えば衣食住の方面に幾らかなりとも精緻な成績があるべきである。だが実際には決してそうではない。例えば茶菓子について言えば、何か特別な滋味のあるものを知らない。もちろんわれわれは北京の情況についてそれほど知り尽くしているわけではない。ただ行き当たりばったりに入った菓子屋で少し買って食べるに過ぎない。しかし飛び込んだ経験からすれば、要するに美味しいお菓子に出会ったためしがない。まさか北京によい茶菓子がないわけはないだろう。それともあってもわれわれが知らないのか。これも必ずしもすべてが口腹の慾を貪らんがためではない、古い都の中に住んでいて歴史の精錬あるいは頽廃を含むお菓子の一つも食べられないなどとはとても大きな欠陥だと思う。北京の友人たちよ、わたしに二三軒上等のお菓子を作る店を教えてくれないか。

わたしは二十世紀の中国産品について、それほど好きではない。粗悪な模造品が、その名を飾って国産と言い、外国製品よりずっと高く売ろうとする。新しい建物で売る物は、どれも皆どうも疑わしい。そう言うと遺老の口吻のようであるけれども、総じて風流享楽の事については、わたしはすこぶる伝統を盲信しているのである。西四牌楼の南を歩いていて、異馥斎の一丈ばかりの一枚板の看板を眺めながら、思わずふらっとなった。それが義和団以前の老舗であることを表しているだけでなく、その消えかかって薄暗い文字の跡が又わたしに香を焚き静坐した安閑として豊かな生活の幻想を呼び覚ましたからである。わたしは香など焚いたことはないが、こうした事にはとても興味がある。しかしながら結局は香屋に入る勇気がない。というのは彼らが香合の上にすでにオーデコロンやサボンを置いているかもしれないから。われわれは日用に必需なもの以外に、もうすこし無用の遊びと享楽があってこそ、生活が面白いのである。夕陽を見、天の川を見、花を見、雨を聴き、香をかぎ、渇きを解くのではない酒を飲み、腹を満たすのではないお菓子を食べることは、いずれも生活に必要なのである――無用の飾りではあるけれども、精錬されていればいるほどよい。可哀想に今の中国の生活は、極端に乾燥粗野である。他のことは言うまい、わたしは北京を彷徨すること十年、ついに未だ美味しいお菓子を食べたことがない。（民国十三年二月）

※初出：1924 年 3 月 18 日『晨報副刊』

---

*『我が書翰』五十嵐力著（至文堂書店 1916）　「文展と空也」文意が少しく異なる。

茶を飲む

前回徐志摩先生が平民中学で「喫茶」について講じられた、――決して胡適之先生の言う「講茶を喫す」[i]ではない、――わたしは聞きに行く暇がなく、又あいにく彼の構成に苦心を込めた講演稿も見たことがないが、推測するに彼は日本の「茶道」（英語訳ではTeaism）について述べ、しかもきっとうまく話されたに違いない。茶道の意味は、平凡な言葉で言うと、「忙中に閑を偸み、苦中に楽を作す」と言えよう。不完全な現世に少しの美と和らぎとを享楽し、刹那の間に永久を体得するのが、日本の「象徴的な文化」を代表する芸術である。この事については、徐先生はきっとすでに透徹して巧みな解説をされたことだろうから、もう余計な口を挟む必要はない。わたしが今言いたいのは、ただわたし個人の普段の喫茶観でしかない。

お茶は緑茶を正統とする。紅茶はすでになんの意味もない。ましてさらに砂糖を加えるなどとは――そして牛乳？ギッシング（George Gissing）の『草堂随筆』（原名Private Papers of Henry Ryecroft）は確かにとても面白い書であるが、冬の巻に茶を飲むことに言及し、イギリスの家庭の午後の紅茶とバタパンは一日の最大の楽しみであって、支那の喫茶はすでに千年百年という歴史があるが、必ずしもこうした楽しみの趣味と実益の万分の一も理解できていないとするのは、わたしは特に同意できない。紅茶は「トースト」がなければ飲めないわけではないが、これはただご飯にあたり、お腹が空いた時に食べるものでしかない。わたしの言う喫茶とは、清茶を飲むことにあって、その色と香りと味わいを鑑賞することにあり、心は必ずしも渇きを止めることにはなく、むろん腹を満たすことにはない。中国でも昔は煎茶〔煮出し〕や抹茶を飲んだことはあるが、今のやり方はみな淹れるお茶であり、岡倉覚三は『茶の本』（Book of Tea,1919）で巧みにそれを「自然主義のお茶」と言っている。だからわたしが重んじるのはつまりこの自然の妙味にある。中国人は茶館に上がると、左に一碗右に一碗と半日かけて飲む。まるでたった今砂漠から帰ってきた様子なのは、すこぶるわたしの喫茶の意味と合致する。（福建・広東にはいわゆる工夫茶を喫す[ii]というのがあるそうだが自ずともっと道理に合う。）ただ残念なことに最近はあまりにも租界化して、本意を失い、その結果飯屋の類になってしまっている。だが農村にはまだ少しばかり古風が残っている。ただ建物・器具が全く簡単陋劣そのもので、あるいはただすこぶる喫茶の意はあると言えるものの、すでに喫茶の道を得たりとは言えないかもしれない。

喫茶は瓦葺きの障子窓の下で、清泉に緑茶、質素だが雅な陶器の茶具で、二三人と共に飲み、半日の閑を得れば、十年の塵夢を払うことができる。お茶を飲んだ後は、又それぞれの天職をやりに行く。名のためであろうが利のためであろうが、構ったことではないが、偶然のひと時の悠遊こそは断じて欠いてはならない。中国ではお茶を飲む時、多くは瓜の種を食べるが、わたしはあまり感心しない。お茶を飲む時に食べるものは軽く淡白な「茶受け」であるべきだ。中国の茶受けは「満漢餢飳（マンハンボボ）」[iii]に変わってしまい、その性質は「阿阿兜（アアドウ）」とほとんど変わりなく、茶を飲む時に食べるものではない。日本のお菓子は米豆の製品だけれども、その優雅な形色、素朴な味わいは、とても茶受けの資格にかなっており、様々な色の「羊羹」（上田恭輔氏の考証によれば、中国唐代の羊肝餅から出ると言う）には、特に特殊な風味がある。江南の茶館には「干糸（ガンス）」とい

うのがあって、豆腐干を細い糸のように切って、生姜醤油を加え、とろ火で煮込み、ごま油をかけて、客に出す。その利益は「ボーイ」の実入りとなる。豆腐干の中にもとは「茶干（チャアガン）」というのがあったが、今はそれが糸に変わったが、やはりなかなかお茶に相応しい。南京にいた時はいつもこれを食べたが、某寺の方丈が作るのが最もよいということであった。 試したことはあるのだけれども、もう忘れてしまった。憶えているのはただ下関の江天閣だけだ。学生たちの習慣では、ふだん「干糸」が出ても、大抵はすぐには食べない。ごま油が二度かけられ、白湯が重ねて換えられてのち、ようやく箸をつけるのが、最もやり方に合っている。来るとすぐなくなれば、次のが続いてきて、応酬に遑がなくなる。でなければ三度目のゴマ油がかけられると、直ぐに引いてしまい、怒りが顔に現れ、お客も興が削がれて散会ということになって、茶の意どころではなくなる。

わが故郷の昌安門外に三脚橋という所があり、（実は決して三脚あるのではなく、出口が三つなのである。一つの橋が三叉になった河の上を跨いでいるからである、）そこに周徳和という豆腐屋があり、茶干を作ることで最も有名であった。ふつうの豆腐干は方約一寸半、厚さ三分ばかりで、値段は二文だが、周徳和のは値は同じだが、小さくてしかも薄く、やっと半分で、薄黒くて堅く、紫檀の切れ端のようであった。我が家は三脚橋から歩いて二時間ほどだったから、なかなか手に入らず、油で揚げたのしか食べることができなかった。毎日担ぎのものが炉を設けて、街を呼売りする。その言葉に云う。

「辣醤（ラージアン）からい、
ゴマ油で揚げた、
紅醤（ホンジアン）付けて、辣醤塗った。
周徳和の五香ゴマ油揚げ豆腐干。」

その製法は上に述べたごとくで、竹串にその末端を刺して、一枚三文である。豆腐干の大きさは周徳和と同じぐらいだが、ずいぶん柔らかくて、多分普通の品なのだろう。ただこういう風に調理すると、茶受けの一つではないけれども、なかなかよい豆製品である。――豆腐は確かに極東の優れた食品であって、様々に変化できるが、西洋では理解されないのは、まさにお茶と同様である。

日本では茶漬けご飯があって、「お茶漬け」と言い、漬物および「沢庵」（つまり福建の黄土蘿蔔、日本の沢庵和尚が初めてこの製法を伝えが、多分中国から伝わったのだろう。）などを添えて、とてもあっさりしていて芳しい風味がある。中国人もそうして食べないことはないのだが、ただその理由が、困窮でなければ節約なので、わざとお茶漬けの中にその固有の味を探ろうなどとする者はほとんどいない。これが残念な所以である。（民国十三年十二月）

※初出：1924 年 12 月 29 日『語絲』第 7 期

---

[i] 講茶を喫す　　揉め事の和解に双方が茶館に入ってお茶を飲む。大抵仲介にやくざが絡んでいる。本書「破脚骨」に見えるチンピラのやり方。

[ii] 工夫は功夫とも書き、時間・手間のこと。手間・暇をかけてゆっくり淹れゆっくり味わうお茶

という意味だろう。茶器も様々種類があって、皆小ぶりで、茶碗など日本の猪口ほどの大きさが多い。ただし福建・広東が元のお茶だから当然発酵茶で、周作人の嫌いな紅茶が主流。

[iii] 「餑餑（ボーボー）」は、メリケン粉・米粉などを油や砂糖など調味料とともに練って焼いた菓子。元満州族の食べ物だったがそれが清朝になって北京に入り、北方の食べ物として普及した。後の「阿阿兜（アアドウ）」は未詳。一説に外国人を意味する言葉だから、ギッシングの言う「バタパン」を意味すると言う。

蝿

蝿は愛すべきものではない。だがわたしたちが子どもであった頃誰しも少しはそれを喜んだ。わたしと兄弟はいつも夏に大人が昼寝をしている隙に、庭の瓜の皮やなかごが捨ててあるところで蝿を捕まえた、――蝿は全部で三種あり、小蝿はあまりに小さ過ぎ、肉蝿には汚い蛆がいてあまりに汚く、ただ金蒼蝿だけが役に立った。金蒼蝿はすなわち青蝿である。子どものなぞなぞの中に「頭にゃ赤い飾りの帽子、体にゃ紫羅の長上着」というのがそれである。わたしたちはそれを捕まえてバラの葉を一枚摘んで、バラの棘でそれを背中に刺すと、緑の葉っぱがテーブルの上をもごもごと動き回る。東安市場には紙で作った様々な色の小虫を売っていて、名前を「蒼蝿のおもちゃ」と言ったが、つまり同じ趣向である。わたしたちは又その背中を細い竹ひごに挿して 、灯芯草の切れ端を脚の間に置くと上下にひっくり返して振り回すのである。名付けて「戯棍」と云う。またあるいは白い紙縒を腹につけて飛ばすと、空中には白い紙片がひらひらと乱舞するのだけが見えて、とても綺麗である。もし若くて力の強い蝿を捕まえたなら、ハサミでその頭を切り取っても、その体だけは相変わらず飛んでいってしまう。ギリシアのルキアノス（Lukianos）の「蝿の頌」には、「蝿は頭を切り去られた後も、かなりの時間生きることができる」とある。たぶん二千年前の子どもはすでにこうして遊んでいたのであろう。

わたしたちは今では科学の洗礼を受けたから、蝿が病原菌を伝染させるのを知っている。そのため連中にはとても悪感情を持っている。三年前病院に臥せっていたとき詩を一首作ったことがある。後半に云う。

「大小のすべての蝿たち、
美と生命の破壊者、
中国人の良き友である蝿たちよ、
わたしはお前の全滅を呪う、
人間の力以外の、
最も黒く最も黒い魔法の力でもって。」

しかし実際には最も憎むべきはやはりそいつの別の悪い癖、つまり喜んで人の顔や手足を這い回り舐め回すことである。古人はその名を美化して「美を吸う」と言ったけれども、吸われる者にとっては極めて不愉快な事である。ギリシアにその縁起を説明した伝説があるのは、すこぶる面白い。それによると蝿はもともと一人の処女であって、名をムヤ（Muia）と言い、とても綺麗だったが、あまりにおしゃべり好きであった。彼女も月の神の恋人エンデミオン（Endymion）を愛し、彼が眠っている間にも、彼女はやっぱり彼に話をしたり歌を歌ったりして、少しも休ませなかった。それで月の神は怒って、彼女を蝿に変えてしまった。以後も彼女はエンデミオンを思いつつ、人に安眠させようとせず、とりわけ若い人の邪魔をするのを好む。

蝿の執着と大胆さは、かなりの人の讃嘆を引き起こした。ホメロス（Homeros）は史詩のなかでかつて勇士を蝿に擬えたことがある。彼は言う。君は彼を追っ払ったけれども、彼はいつかな君から離れようとはせず、なんとしてでも一口喰らいつかねば措かなかった、と。またある詩人は

言う。彼の小蝿は極めて勇敢に人間の肢体の上を跳ね回り、渇えて血を飲まんとするが、戦士が敵の鋒刃を避けるのは、まことに恥ずべきことだ、と。わたしたちは幸いにしてあまり血に渇えた勇士に会わないが、勇敢にわたしたちの顔を舐めんものと攻撃して来るのにはしょっちゅうお目にかかる。ファーブル（Fabre）の『昆虫記』には一種の蝿は、土蜂が虫を背負って穴に入る隙に乗じて、虫の中に卵を産み付け、後になって蝿の卵が先に孵り、死んだ虫と蜂の卵を一緒に食べてしまうと述べる。彼はこうした蝿の行為はまるで紅巾黒衣の暴漢が林の中で旅人を襲うようなものだと言う。しかし彼の慄悍敏捷さは確かに佩服すべきで、もしギリシア人が知ったなら、あるいはそれでもってオディセウス（Odysseus）のような狡知に長けた英雄を形容するかもしれない。

中国は古来より蝿に対してはなんの反感も持たなかったようである。『詩経』に「営々たる青蝿、樊に止まる。豈弟の君子、讒言を信ずる無し。」〔「小雅」蒼蝿〕と言い、又「鶏に非ざるに則ち鳴く、蒼蝿の声。」〔「斉風」鶏鳴〕と言う。陸師農の説によれば、青蝿は色を乱すのがうまく、蒼蝿は声を乱すのがうまい、だからこのように言うのだと。伝説の中の蝿は、たとい特に良くはなくても、要するに決して他の昆虫よりももっと卑俗で悪いということはない。日本の俳諧の中では蝿は普通の詩の材料である。少し湿汚の気味を帯びてはいるけれども、とてもよく温暖で賑やかな境界を表現できている。小林一茶はさらに奇特で、彼は聖フランチェスコと同じように、一切の生物を兄弟朋友としたから、蝿も当然その一つであった。彼の俳句選集を見てみると、蝿を読んだものが二十首もある。いま二首をあげてその一斑を示そう。一つは、

「笠の蝿、我より先に飛び込めり」

この詩は「帰庵」という題がある。又一首には、

「やれうつな、蝿が手をすり足をする」

わたしはこの句を読むと、いつも自分の詩を思い出して恥ずかしくなる。だがわたしの心情はどうしてもその境地に達することができないから、やはり仕方がないのである。『埤雅』に、「蝿はその前足を交わすを好む、縄を絞るの象あり、……又その後ろ足を交わすを好む」と云う。この描写はまさに前句の注解とすることができる。又紹興の子どもの謎かけ歌に、「烏脰豆のように黒く、烏脰豆のように太く、座敷の真ん中で、坐って鬚を引っ張る」*と云うのも、この現象を指す。（“格”は「的」と云うようなもので、“坐得”はすなわち「坐著」と云う意味。）

ルキアノスによれば、古代にある女流詩人がいて、賢く美しく、名をムヤと言った、又もう一人名妓もこれを名とした、だから滑稽詩人の句に、「ムヤは彼を咬んでその心臓にまで達した」とあるそうである。 中国人は何時までたっても蝿とテーブルを同じくするけれども、蝿を名字にする人はいない。わたしの知るところではただ一人か二人渾名に使われたのがあるきりである。（民国十三年、七月。）

※初出：1924 年 7 月 13 日『晨報副刊』

---

* 烏脰豆　なぞなぞの原文は「像烏脰豆格烏、像烏脰豆格粗、堂前当中央、坐得拉胡鬚」。烏脰豆　未詳。字をなぞると、黒い首の豆ということになるが、実際にはどんな豆か。

“破脚骨”

“破脚骨”——Phacahkueh のように読む、はわれわれの田舎の方言で、つまり“無頼漢”である。王桐齢教授の『東遊雑感』の筆法によれば、次のように言うことができる。——破脚骨は官話では無頼と曰い、光棍と曰う、古語では溌皮と曰い、破落戸と曰い、上海では流氓と曰い、南京では流戸と曰い、青皮と曰い、日本ではゴロツキと曰い、イギリスではラグと曰う……。この名詞の本意はあまり明瞭ではなく、望文生義的に見ればたぶんいつも殴られて脚の骨を折るから、そういうふうに言うのだろう。彼等の職業は騙(かた)り、俗に敲竹杠(ゆすり)と称する。小破脚骨は通りをうろついて鴨を探し、だませる人間を見るとつっかかっていく。つっかかられた人が何か言うと、彼はたちまちどなりかけ、Tao-wan baangwaantatze？と言う。意味は、つっかかったらいかんのかということで、そこでからみついて放さない、グルになった人間が出て来て茶館に迎えて評定し、結果はぶつかられた方が間違っているということになり、みんなの勘定を持って一件落着となる。これはごくふつうのやり方で、この他にまだたくさんあるが、わたしもあまりよく知らない。大破脚骨となるともっぱら大口の商売をやる。たとえば娼婦の請負い、賭博の親や姦通者の捕縛やゆすりなどで、もうああした小さな悪事はやらない。彼らのやり口は少し“破靴党”に近く、ちがうのは連中が秀才ではないという点だけだ。

こういう連中は当然よい人間ではなく、定論をひっくり返す文章を書くのがすきな人でもなかなか連中をよく言えない。しかし、彼らにも取るべきところはある。彼らにも自分たちの道徳があり、義と勇を重んずる。たとい同じ仲間ではなくとも、酒楼や茶館で一二度顔を合せただけで、情が通じたということになり、もうだまし討ちはしないし、時にはかばいさえする。わたしが江南に往って水兵になる前に、弟と田舎でぶらぶら遊んでいた時は、大いに破脚骨にしけ込んだ気味があり、近隣の小破脚骨何人かと識合いになったが、遠縁の破靴党は仲間とはならなかった。われわれはそのため人からぶち当られたことがなかったし、一二度など確かに連中のおかげを蒙った。一度わたしはすでに家に居なかったが、弟（その時彼は十四五でしかなかった）が母と南街に芝居を見に行った。そのころはまだ芝居小屋などなく、ただ廟の舞台で神を敬う芝居を演じるのだったが、近場の人が両側に見物席を組んで人に貸出した。われわれも二人分の座席料を払って借りたのだが、後になって見物席の主人がなぜか急にお払いのおふれを出した。たぶん金持ちに貸そうとしたのだろう。見物客はたちまち大いに困った。うまい具合にわれわれの顔見識の小破脚骨がちょうどそこで芝居を見ていたので、彼をつかまえて来た。彼は見物席の主人に、「あんたはこの席を貸さないんだな。そんなら俺が貸出そう。」と言った。見物席の主人はおふれを撤回したほかに、彼に対して相当の心付けまで出して、ようやく事は収まった。彼のこの無理無体の詭弁には、実に少なからぬユーモアと愛嬌が含まれている。二十世紀以来二度と彼に会ったことはない。聞くところでは彼は後に目しひになって、何年かして世を去ったということだ——どうか永遠に安らかにお休み！

人が破脚骨になろうとするには、相当の訓練が要る。古代の武士の修業と同じように、とてもの事ではない。破脚骨の生活で最も重要な事は殴られることである。だから十分な忍苦忍辱の勇

気がなければ、一丁前の破脚骨には成れない。小破脚骨が人とけんかをすると、罵りながら着物を脱ぎ、右手でそれぞれ敵の弁髪を抜き左手でそれぞれその髪の根元を握る。そこで互に推しあい、路傍に押されて背中を壁に押しつけられたものが負けとなる。大破脚骨はそうではない。彼は合口を抜くが、決して人を刺さず、ただ手に持っているだけで、自らその股を指して、“刺してみろ！”と言う、相手が言う通り刺すと、又命じて“もう一度刺せ！”と言う。再三刺されても少しも痛いとは言わない。刺した者がひるんで同じように言いつけ通りにしなくなると、大敗ということになって、もう同類に顔向けできなくなる。殴打に耐えられることを、隠語で“路足を受ける”と言って、破脚骨の修養の最も重要な一である。この他役所の経験も重要で、彼らは往々にして茶館で大言壮語して、“尻も打たれたし、首枷もはめられた”と言うが、これも破脚骨の履歴の中では出色の項目なのだ。大家の子弟で落ちぶれて破脚骨になる者があるが、家柄の影響で、官刑の心配がないから、この二項の修練は必要がないかもしれないが、ただ殴られるのはもとより必要である。わたしに一人同族の長輩がいて、文に通じ、二尺四方の大字も書けたのが、破脚骨になり、ある年の春分の日に宗廟の中で彼がその戦功を自慢するのを聞いた。Tarngfan yir banchir, banchir yir tarngfan と言った、意味は打倒されると又はい起き、はい起きると又打倒されるということで、この二句は実際“破脚骨道”の精義を表わすに足る。いま人心は古ならざる時代に、破脚骨も堕落して、開港場のゆすりのゴロツキになり変った。昔日の郷間の破脚骨を回想すると、すでに書中の列仙高士のごとしで、流風は断絶して、はるか遠くまた追うべからざるなりである。

わたしは父方の伯父の戦功を黙想していて思わず「キホーテ先生」（Don Quixote――林琴南先生は当块克非替（ダンクワイクフェイティ）と訳し、陸祖鼎先生は唐克孝（タンクシャオ）と訳し、丁初我先生は二十年前に唐夸特（タンクワト）と訳された）、それにスペインの“悪漢小説”（Novelas de Picaros）を想い出した。中国にもこうした人物はいるのに、なぜ『水滸伝』の溌皮牛二以外に、誰も連中を細かく描こうとする人はいない。でなければほんとうに“ゴロツキ生活の文学”（Picaresque Liteature）が出来あがるのに。――この二つの英語を、陸先生は『学灯』で“盗賊文学”と訳された。ああ、軽い枷と杖の罪名がついにこうして大辟〔死刑〕に改定されてしまったのは、（治盗条例が現行している時期では）冤なるかな枉なりである。しかしながらこれも陸先生を責めることはできない。『英漢字典』には確かに“流氓”（Picaroon）という言葉を劫掠者、盗賊等々と解釈してあるからだ。　（民国十三年六月）

※初出：1924 年 6 月 18 日『晨報副刊』

われわれの敵

われわれの敵とは何か。生きた人間ではなく、野獣と亡霊であり、多くの生きた人間の体にくっついている野獣と亡霊である。

子どものころ、『聊斎志異』や『夜談随録』の物語を聞いて、闇夜はいつも狐の化物や僵尸の襲来が恐かった。いまになって、この恐怖はなくなったが、白昼にいつも狐の化物や僵尸の出現を見る。これはもっと恐しい。街を歩いていたり、路傍に立ったりして、道行く人の顔色をうかがい、彼らの声を聞いては、いつも妖気を発散する。 これはもちろん“画皮”ではないとは、誰も保証できない。われわれは自分の安全のために、連中に対して“防御戦”をやらざるを得ない。

“みんな、気をつけろ、こんなふうに神経過敏になって行くと、気狂いにならないか――あるいは君がこう言うのは、もうすでに少し気狂いの気味があるかもしれない”と言う人がある。大丈夫、わたしのような落着いた人間がどうして気狂いなんかになろう。ひとを見ればしっぽがありはしないかとか身体に白い毛が生えてやしないかと疑心暗鬼になるのは、確かに気狂いのやることらしいが、わたしはそうではない。わたしは新式の鏡で人間の群の中からそうした異物を見別けて駆除しようとするのだ。しかもこの方法は決して面倒ではない。 まったく何の神秘もなく、われわれはただそいつを見さえすればよい。もし人を見て眼を見張って歯をむき出し、口からよだれをたらし、 取って食おうかという気味があれば、必ず“そいつ”だ。社会で天地君親師、銀行家、ナンパ党、あるいは道学者などと称していようとも。

ダーウィン等の言うところでは、われわれと虎狼狐狸の類とは言えばもともと遠い親類関係があるそうで、われわれの祖先は一人として名前を過去帳に登記していないものはない。だからわれわれとさまざまな亡霊などとは多少とも代々のよしみがなくはない。 こうした話は当然まちがってはいない。だが遠い親類であろうが、代々のよしみであろうが、かれらは要するに芋蔓式に出て来てわれわれを煩わすべきではない。遠い親類の方々がもしよしみを言われるなら、山林で出会った時に限り、ヒゲでもしごき、あるいはしっぽを振りながら、われわれに挨拶してくれるべきで、髑髏を被ってわれわれの間でうろうろする必要はない。代々よしみのある方々も静かに草葉の陰に安らぐべきで、偶にわれわれの夢で会うのは、面白いが、もしいまのように“重来（うまれかわり）”（Revenants）に化けて、白日の下に姿を現すなら、それこそほんとうにひとの視聴を驚かすだろう。彼らがこんなでたらめをやって、われわれに害を与えようとする以上、われわれももう遠慮してはいられない、正義と人道、および平和等の名によって防御手段を取るほかない。

昔ヨーロッパの教会と政府は異端を救うために、なかなかよい方法を使ったそうだ。つまり彼らの肉体を焼いてしまって、その魂が地獄に落ちないようにしたというのだ。これは実に心の籠ったやり方だが、ただ残念なことにわれわれは採用できない。というのはわれわれの目的は正反対であるからである。われわれはそれが依附している肉体から依附している物を追い出そうとしている。だから正反対の方法を使わなければならない。われわれはせいぜい桃の枝に柳の枝、芦

の鞭や蒲の鞭をたくさん手に取って、力いっぱい顔に妖気の出ている人間の体をひっぱたき、化けた野獣が原形を現わすように、憑いた亡霊が患者から離れるよう、借用された体躯を残して、落し主をさがして受取ってもらうようにするのだ。こうして追い出したものは、われわれも“聚めて之を殲（ほろぼ）そ”うとは思わない。ひゅーと一声瓶の中に吸込んで丹書でちゃんと封をして蒸したり煮出したりするという方法はいまでは伝承が途絶えたようで、少くともわれわれは効果的な使い方が解らないし、しかも天下は広く、万牲百鬼は汗牛充棟していて、実にやってもやってもきりがないからだ。だからわれわれは上天の生を好む徳を尊重して、決してとことんまで追求せず、ただ獣には住処の穴に行き、亡霊には墓穴に帰ってもらい、それぞれが生業に安んじ、もう互の邪魔をしなければ、お仕舞にして、連中の行くにまかせればよいのだ。

　生きている人間については、誰もわれわれの敵ではない。必ずしも全部がわれわれの友人ではないけれども、――実際、生きている人間はもうあまりにも少くなっているのだ。少なすぎてけんかをしても何のおもしろ味もないほどなのだ。亡霊をやっつけた後になって、（もしそういう日が来れば、）もし興が乗れば、酒を一杯飲んで、腕をまくり、腕比べをするのもよかろう。（試合に勝てば、自ずと美人に好かれる等々の事があろうが、それも悪くはない。だがそれは『アイ・ヴァンホー』の情景であって、いまではまだ『西遊記』だろう。）　（民国十三年十二月）

※初出：1924 年 12 月 22 日『語絲』第 6 期

十字街頭の塔

厨川白村の著に二冊の論文集がある。一冊は『象牙の塔を出て』と言い、もう一冊は『十字街頭へ』と言い、彼が純粋な芸術を離れて社会の事に関わろうという態度を示している。わたしはいま彼に倣って、わたしは十字街頭の塔に居ると言おう。

わたしは小さなころから十字街頭の人であった。わたしの故里は華東の西朋坊口で、十字街頭の曲り角には四軒の店があり、一つは麻花の屋台、一つはチビでハゲでヒゲの開いた泰山堂薬店、一つは徳興酒屋、一つは果物屋で、われわれはみなその店の主人を華陀と呼んだ。というのは彼の果物は仙丹のように何とも高かったからである。以後わたしはこの街からあの街へと引っ越して、街頭の空気を吸い尽し、やらなかった事といえば、ただ相公殿〔若衆宿だが蔭間宿の意あり〕で夜を過すことだけであった。したがってわたしは本物の“街の子”というわけにはいかないが、要するに街とは縁があって、決して耳袋をつけなければ外出もできないような人物ではない。わたしが余計な事が好きで、紳士の態度に欠けるのは、たいていこのせいで、以前祖父もわたしを罵ってこれは下賤の相だと言った。話はこうだが、わたしは車を引いて水を売る連中の仲間だと自認している。だがあれこれ考えようとする性質で、時には腰掛けを引きよせてしばらく黙想したいと思うのだが、“提灯を見る”人々のように、長らく路傍に突立っているわけにはいかないので、わたしの卜居は十字街頭の塔の中ということにならざるを得ない。

塔と言えば、第一に思いつくのは故郷の怪山の上の応天塔である。瑯琊郡の東武山が、ある夕べ飛んで来て、人々がそれを怪しんだので、怪山と言い、後に又飛び去りはしないかと恐れて、天辺に塔を一つ建てたのだそうだ。主殿の窓から一望すると、東南角の塔の姿が真先に眼にとびこんで来る。中元前後には塔の上に、おばあさんたちの好意で寄進された地獄を照す提灯がいっぱいに点灯され、夜にそれを眺めると格別にきれいであった。しかし宣統年間に塔は結局それによって失火し、焼けてただ外側だけを剰すことになり、もうおばあさんが登って提灯を点けることができなくなってしまった。十年前わたしはある友人と塔下に行ってしばらく徘徊したことがあり、一つ磚の片らを拾った。磚の端には凸文で楷書の六字、“護国禅師月江”とあったが――結局この和尚がどんな人かは調べがつかなかった。

しかしわたしが言う塔は、決してあの“窣堵波（そとば）”や、あるいは“人の一命を救うは七級の浮図〔仏塔〕を造るに勝る”というような物ではなく、実は展望台・角楼の類、西洋の国では――大衆の歓迎し、習見する音義で訳すと――“塔圍（タワー）”と称するものがすなわちそれであり、異端でなければ、帝国主義の塔である。浮図の中は静坐黙想するのに本々とても向いているのだが、いまではそれに何でもが仏化しつつあり、塔に住むのもとてもハイカラなのだ。だがわたしの黙想は半分が口実で、実は喧噪の中に安全な地を得たいと思うのだ。たとえば前門の宝石店が鉄門を備えているように。廊房頭条のビルには別に厄払いの象徴物があるけれども。わたしは十字街頭で久しく暇潰しをしたが、結局彼らの仲間には入らず、市民の中に割りこむのは、いささか不快であり、またいささか危険でもあった。（連中にわたしの眼鏡をこわされやしないかと、）だから最もよいのは角楼に坐って、二斤の黄酒を飲み、大通りを眺めながら声をあげ、心中のうっとう

しさを吐す、不機嫌な時は楼の窓を閉めて、自分の「九成宮」を臨写する。なんと自由で気ままなことであろう。ここまで書いて来てふとヨーロッパ中世の民間伝説[i]を思い出した。木版画にはハットー主教が怨恨の亡霊が化けた鼠の化物から逃げ、荒れはてた島のまるで大きな煙突のような煉瓦造りの塔に身を隠すが、慌てたので神父の冠を被った上半身が露出していて、一大隊の鼠がみんな水を渡ってやって来、何匹かの大鼠はすでに塔の天辺まではい上った、――後でこの主教は結局鼠どもに食われてしまったということだ。ほれ、恐いでしょうが。こう言うと、そうした角楼もあまり当てにならないようだ。だが鼠は入れるが、人は入れないなら、どうせわたしは鼠とは仇敵にはならないから、何の心配もない。わたしはまた前門外の鉄柵の門の安全性を考えたが、わたしの塔でも十分対抗できる。もし雍涛先生の格言亭[ii]のよう建造するなら、むろんもっと堅牢である。

ひとが象牙の塔を離れて十字街頭に行くのに、わたしは十字街頭に塔を建てて住む、うまく立回ったようになってしまうだろうか。わたしはもともと何の芸術家でもなく、象牙や牛角の塔もないから、自然と街頭に立つことになる。しかしまたいささか疲れるし、人混みの押し合いへし合いが恐い、そこで通りに面した塔に住むしかない、これはとても自然な事である。ただいまの中国では、こういう態度は最も上乗でない。大衆が塔を見れば、これは知識階級だ（罪がある）と言うし、紳士商人が塔が路傍に在るのを見れば、こいつは党人だ（取締るべし）と言う。だがこれも何の妨害にもならない、やはり水竹村人〔徐世昌〕の言う“その自然に聴(まか)す”のように、かまわなければよいのだ。どうせこうした閑話はみな当にならないし、長つづきもしない。ほんとを言うと、この塔と街とは本来決して関係のないものではない、世事を避けて塔に縮こまるのはもともと街頭に対する反動であり、街頭に出て仕事を説く人もやはり彼らの塔を持っている。彼らは自ずと大衆と乖離した理想を持っているからである。要するに街頭の群衆といっしょに揉み合いへし合うつもりだけはあるが、自分の意見に依って一言二言でもものを言おうとしない人こそ、ほんとうに彼の塔を持たないのだ。だからわたしの塔もわたし一人だけのものではない、この名前はわたしがそれに付けてやっただけのことだ。　（民国十四年二月）

※初出：1925 年 2 月 23 日『語絲』第 15 期

[i] Bishop Hatto　Baring Gould の Curious Myths in the Middle Ages に見えるネズミの塔の話

CURIOUS MYTHS OF
THE MIDDLE AGES

S. BARING-GOULD, M.A

B. LIPPINCOTT & CO

[ii] 雍涛先生の格言亭　未詳。

上下身

ゴータムの三賢人、
お碗に乗って海を漂う。
彼らのお碗が丈夫なら、
わたしの話も長くなる。
——イギリスのわらべうた[i]

人間の肉体は明らかに一つの全体である、(ナイフでそれを切り割くこともできるけれども、)背後は頭部から尾閭まで一本の脊椎で、前は胸から“丹田”まで一枚の腹の皮、中間には開ける処がない。ところが吾が郷(他の所の市民は聞いても自分らのことかと疑うには及ばない)の賢人は必ず無理に分割して上下とする、——たぶん臍を境とするのだろう。上下はもともと方向であって、なんの悪いところもない。だが彼らはここで又大義名分の大道理を応用して、そうして上下は変って尊卑、正邪、浄不浄の別となる。上半身は体面ある紳士で、下半身は“懲らすべき”[ii]下流社会である。こうした言い方は聖道に合っている以上、当然間違っているはずがない。ただ実行するとなるといささか難しい。言うまでもないが胴斬をしたがる“関大爺の大刀”が上下に分けてしまうと、どうしても一命を台無しにしてしまうから、もちろん断乎不可である。たといやるべき範囲内に少々割裂を加えるとしても、最も端正な道学者でさえ決して承知しない。ふだん沐浴する時、(幸い賢人たちにはこれはそれほど多くない、)手拭い二本、洗面器二つ、水二桶を用意しなければならない。二つの階級を別けて洗うのであるが、少し不注意だと上に連なるのでなければ下を犯すことになって、尊卑の順序を乱し、深く徳化の妨げとなる。又高椅子に坐って居睡りをし、もんどり打ってころげ落ちるような場合は、さらに本末転倒で、大いに吉兆でないことになる。われわれ愚人から見ると、これは実に自分から面倒を起すわけで、一つの身体が起ち上ったり昏倒したり、あるいはとんぼを切ったりしても、要するに一つの身体であって、決して豚肉のようにヒレやバラ肉などの区別があって、貴賤不同の価値が決っているわけのものではない。わが郷の賢人がすることは、聖道に合っているとは言うけれども、それはやはり古代蛮風の遺留ではないか。

生活をバラバラの断片に分け、わずかにその中のいくつかだけを選び取り、気に入らない部分を捨て去ろうとする人たちがいる。こうしたやり方は刀を抽いて水を断ち、剣を揮って雲を斬ると言える。生活にはたいてい飲食、恋愛、出産、仕事、老死などいくつもの事が含まれるが、結びついて一つになっているものであって、そこから勝手に一二を選び取ることができるものではない。ある人は長生不死を希み、ある人は生存禁欲を主張し、ある人は専ら飲食のために仕事をし、ある人は仕事のために飲食する。これらはみないくらか臍できっちり引き切り、底板に釘付けして、上半身だけを残そうとするのに似ている。比較的ものが解っているのにまじめすぎる友人は全般を承認しながらその等級を分ける。たとえば道を行くのは上等だが睡眠は下等だとか、飯を食うのは上等だが飲酒喫茶は下等だとするのはそれである。わたしは決して人間は終日睡っ

たりあるいは茶や酒で飯の代りにできるなどとは思わない。けれども、睡眠あるいは飲酒喫茶が軽蔑してよい事ではないと思う。それらもやはり生活の一部分であるからだ。百年余り前、日本に茶道に精通している芸術家がいて、ある時旅に出た。宿場に着くたびに必ず茶道具を取り出して、悠然と茶を点てて自分で飲む。誰かが、旅に出てまでそんなにすることはないでしょうと諫めると、彼の答がよかった。“旅がまさか生活でないということはありますまい”と。このように考える人こそほんとうにその生活を尊重し楽しめるのである。ペイター（W. Pater）は、われわれの生活の目的は経験の結果ではなくて経験そのものであると言った。まじめな人々はただ一つの事だけをまじめな生活とし、そのほかのたとえば已むを得ない悪い癖ででもなければ、つまるところあってもなくてもよい附属（つけたし）の物としてしまう。程度のちがいこそあれ、これはわが郷の賢人がただ上半身（実は、細かく言う必要はないが、正に正反対なのだ、）のみを尊重するのとまさに同じ種類に属する。

ゴータム（Gotham）地方の物語はおそらく話せば長いのであろう。これはただその中の一二節にすぎない。　（民国十四年二月）

※初出：1925 年 2 月 2 日『語絲』第 12 期

---

[i] この歌はマザー・グースに収録される。

1826 年には James Kirke Paulding によって“The merry tales of the three wise men of Gotham”という小説も作られた。上の絵は 1839 年 Harper & Brothers 版の内扉絵である。

[ii] 周作人の松枝茂夫氏宛の手紙に「元教員の某、今は反動政府の役人が言った言葉で、〝懲らさなければならないもの〟との意だとある。小川利康編『周作人・松枝茂夫往来書簡・戦前篇 1』

トルストイの事

一、二ヵ月前中国の新聞は、トルストイの著作がロシア社会主義政府に禁止され、そして書籍を壊して紙を作り、改めてレーニンの著書を印刷するのだという記事を載せた。当初はみんな信じようとせず、けんめいに弁護する人まで出た。わたしもヨーロッパ、アメリカ帝国主義のデマだと思ったが、近ごろロシアの官界の消息では、禁止は確実だが、それで還魂紙〔再生紙〕を作ったかどうかは疑問であるということだ。同じような物を信奉して金科玉条とする大衆の中ではこうしたことは有りうることで、本来奇とするに足りず、トルストイの著作が壊されるのは何も今日にはじまったことではない。われわれが代って不平を言うことはない。わたしがこの事で思い出し、ちょっと話してみたいのは、もう一人別のトルストイの事である。

いわゆる別のトルストイとはアレクセイ・トルストイ(Alexei Tolstoi, 1817-1875)である。彼は詩人・劇作家で、又小説も書く。もっとも有名なのは『白銀侯爵』(Knaiz　Serebriannyi)、――十六七年前わたしが訳して古文にし、上海の書店に送ったが、彼らもすでに訳したので、返すという返事だった。後になって『不測の威』が現われ、この書だということだったが、わたしの訳本はひとに持って行かれ、その後失われてしまった。これは彼の著作が中国と関係したわずかな因縁である。この事の他にはわれわれは何も知らない。近ごろドイツのケーベル(Koëbel)博士の小品文集[i]を読んで、ようやくざっとトルストイの思想を知り、大きな敬意を払うことになった。一八七四年イタリアのグーベルナティス(Gubernatis)教授が列伝体の文人辞典を編もうとして、各人の自叙略伝を求めたところ、トルストイの返事の中に、“簡単に自分の好きなよう一言お答えしますと、わたしのロシア文学における位置を知らせてくれるのは、わたしは一部の人から迫害されていますが、又別の一部の人からは愛されているということです。この他にも奇怪な事があります。一方では政治上の逆行者と見なされ、もう一方、権威ある社会ではほとんどわたしを革命家と考えていることです。”[ii]彼は後で又説明して、“わたしの著作の中の倫理的な基調及び根本的な情調は、簡単に言うことができます。一方では専制政治に対する憎悪、別の一方では努力して劣悪なものを持ちあげ、優良なものを抑える偽の自由主義に対する憎悪を――表示していることにあります。この二重の憎悪はわたしに一切の圧政専断に対して、それがどんな境地にあれ、どんな形式と名義であれ、すべてに反対を表示させます。”[iii]われわれは文化の最高の場所に立つ精神上の貴族主義者のその主張が一切の圧政専断に対する憎悪と反抗に他ならないことを信ずる。ならばこのアレクセイ・トルストイは真に景仰すべき人であり、そしてわたしから見ればかの禁欲の弟よりももっと親しむべきように思える。

ダーウィンの『種の起源』がロシア語に訳された時、検査官はその出版を禁止しようとした。ダーウィンの言うことが聖書の土をこね人間を作ったというのとちがうからである。トルストイはその消息を聞いて、一通のユーモアに満ち又厳正でもある手紙を検査局長のロンギノフ(Mikhal Longinov)に送った。その文に云う。[iv]

“ミハエル兄、ダーウィンの学説があなたを非常に驚愕させ悩ませ、彼の翻訳の伝播を禁止しようとする所まで行っていると聞きましたが、それはほんとうでしょうか。どうか一言言わせて

下さい。ミハエル兄、よくよくお考え下さい。足下の後には一本のしっぽが生えているとは限りません。ならば大洪水以前には有ったかもしれない事について、なぜこのように急かれるのですか。人類というものは、それがやったことはただ種を撒いただけかもしれません。その種からできた果実については彼は責任を負わないのです。コペルニクスの説はすでにモーゼとはちがいます。足下には——古代ヘブライの伝説に対してわたしの乳母と同様畏敬の念を抱いておられる足下から見れば、ガリレオも検査局によって禁止されなければならないでしょう。しかしもし理性の呼びかけを聴き、一切の学問がいかなる禁制も忍受することができず、完全な自由の下でこそ繁栄できることを承認するならば、足下に何の権利があって禁止を宣告することができるのでしょう。創世の時あなたはその場においででしたか。なぜ人類は一定していてしだいに現在の形状に変わることができないのですか。足下は又造物主の仕事について彼にこれよりもっとよい方法を指示したいわけではないでしょう。神がどのように仕事をし、どのように創造し、なぜ創造するのかは、又まさしくあのように創造して他のようではないのか、これらの事はたとい検査局長でさえ到底知ることはできません。しかしわたしが知っている所、そして足下に一言したいのは、つまりダーウィンを異端として迫害を加えるのは、反って足下をして多少とも異端気味を持たせるのではないかというのがそれです。なぜでしょう。『創世記』に言う方法以外に人類を造ることができないと主張するのもまた異端であるからです。しかもダーウィンよりももっと悪性の異端です。これでは神の全知全能を制限することではありませんか。まるで神はこのようにし人類を造らざるを得なかった、しかも他の方法で造ることはできなかったと言っているようです。 友よ、この結論はとても明瞭です。検査官の足下にとってはさらに特別危険です。けだし足下はこれによって始めて神の主たる属性を信任しないという悪例を創ったことになり、且つこれによってすこぶる教会が罰するおそれが生じ、おそらく極辺の修道院で年限一ぱい服役しなければならないということになるでしょう。

“あるいは生れて人類となった足下の威厳がダーウィンのサル説によって侮辱を感じられたからでしょうか。わたし個人から見れば、土くれの祖先がサルより高貴には見えませんが。——

“しかしこれらについてはしばらく言いますまい。ダーウィンがそこででたらめを言っていることはあるいはあるかもしれません。ただそれによって彼を迫害するのは、実に百倍のでたらめでありかつにくむべきことです。又あるいはあなたは彼の学説から虚無主義の旗印を見出したのでしょうか。だとするとそれはほんとうに奇妙なことです！虚無主義とダーウィンにはどんな共通点があるのでしょう。この両者は相反するものではありませんか。ダーウィンはわれわれを動物状態から人間の境地に高めようとしていますが、虚無主義者は人間を動物の状態に押し下げようとしています。彼ら自身がサル説の生きた証拠です。彼らの性質と粗暴な動作の中に隔世遺伝の最も明瞭な兆候を見てとることができます。彼らは今でもすでに汚穢、愚蒙、無知、傲慢、粗忽で、人を咬もうとしています。もう一歩進めるなら、この動物状態への復帰の事業は成功するでしょう。——女人、牧師の妻と娘もみなダーウィンを研究するようになりましたが、この件で足下は少しも焦ることは有りません。それはただ王侯の衣装を着ていかめしそうに闊歩する連中と同じ種類のサルでしかないからです。この罪も決してダーウィンその人にあるのではありませ

ん。ミハエル兄、わたしの話を聞いて、腹を立てないで下さい、あの気の狂ったような牧師の娘たちのせいでダーウィンを迫害しないでください。

“良き友よ、もう一言あなたにお知らせしなければなりません。われわれロシア人は決して支那の万里の長城のようなものでわれわれを他の国民から隔離しようとはしません。だからあなたが門を閉しても、学問はやはり音も立てずわが国に進出して来ます。学問というものは、まことに大胆なもので、あなたの検査局の決議や禁止など顧慮せず、やはりその光明を散布します。だから良き友よ、あなたが彼を脅迫しようと、古ぼけたコルク栓でその潮流を塞ぎ止めようとしたところで、あなたは決して成功しないでしょう。”

後になってダーウィンの書は果して禁止にならなかったが、多くの人の推測では、この書簡と多少の関係があるということだ。われわれはもちろんトルストイの寛大な胸懐を景仰するが、ミハエル局長にも一点の知識があったことに佩服せざるをえない。

ロシア人は宗教的国民である。いまでは制度は変って、神、聖書は信じないということだが、これはかの旧いやり口がなくなったというにすぎない。新しいミハエル局長はまだ検査局で決議し禁止していて、今度はトルストイの弟(レフ・トルストイ)に番がまわってきたことを、われわれはやっと知ったのだ。依拠するものは何か。神、聖書は、当然そうだ。だがこれは当然新しいやり口である。これは少しも奇とするに足りない、しかも他人の家の事で、われわれと何の関係がある。われわれはやはり自分の事を述べよう。中国人は——非宗教的国民である。それが他国人とちがうのはただそれが信奉するのは護符であって神ではないという点だけである。それは宗教以前の魔法であり、宗教的熱狂に至っては必ずしももっと少いというわけではない。 それはロシアよりもよいか。わたしはたとい十分国を愛していても敢えて言わない。平和、寛容を愛する、これらはいずれも自己称賛の言葉であり、わたしは敢えて附和しない。わたしは中国人の大欠点は服従と圧政を喜ぶことにあると思う。最も欠けているのは一切の専制に対する憎悪である。ロシアにはミハエル局長がいるが、アレクセイ・トルストイもいる。中国は街中がミハエル局長(しかもあの一点の知識はない)だから、わたしはロシアの禁止事件に対して敢えてどんな批評もしない。やはりわれわれ自身はまだ一言二言言える時に乗じてしっかりこの機会を利用しよう。

アレクセイ・トルストイの手紙の虚無主義者とは当然クロポトキンの『自叙伝』に言うのとは同類ではなく、『父と子』から『蒼ざめた馬』の中で描かれた英雄は、たとい愛すべきでなくとも、やはりどうしても敬うべき人である。しかしながら天下の魚目は常に真珠よりも多いから、虚無主義はかくてほとんどサルの専売する所となった。トルストイの地位はちょうど庚子の年の聶士成[v]のようで、実に同情に値する。いまはかの弟でさえ禁止である。ならば彼の文集はあるいはとっくに更紙になってしまっているかもしれない。

民国十四年二月五日。

※初出：1925 年 2 月 16 日『語絲』第 14 期

---

i , ii , iii, iv ケーベル博士の小品文集　『ケーベル博士続々小品集』久保勉訳　岩波書店大正十三年九月初版　書中「文学に於ける驚嘆すべきものに就て」という文章はケーベルの「アレクセイ・トルストイ論」で、周作人の議論はほとんどこれ、特にその第二章第一節「アレクセイ・トルストイに就いて」に負っている。引用部分は順に該書の p. 207，p. 209～210，p. 223～229 である。

v 聶士成 (1836～1900)、字名は功亭、安徽合肥の人。清末の軍人。日清戦争での働きで、直隷総督となり、改編された清朝の軍隊武衛軍、中でも最も精鋭であったとされる第一軍を率いた。義和団を暴徒として鎮圧したが、清朝上層部の不興を買い、味方から足を引っ張られ、一方八国聯合軍とも対抗せねばならず、腹背に敵を受けることになり、結局天津郊外の黄村・廊房の戦いで戦没した。『清史稿』では八国聯合軍との戦闘でなくなったようにも読めるが、一説では義和団と内通した直隷練軍の兵変によって命を落としたとも言われる。周作人が聶士成についてどのような情報を得ていたのかは未詳。

“大人の危害”およびその他

今月十日タゴールの二回目の講演、題を The Rule of The Giant and The Giant-Killer と云う。『晨報』第六面によると、“意味を訳すと大人を管理する方法および大人の危害”ということだそうだ。わたしはタゴールについてまったく門外漢で、その日に聴きに行かなかったから、彼の講演の主旨はいったい何なのかは言うことができない。ただ常識からすれば、この題目は明らかに比喩であって、たぶん童話の中の典故を借りたのであろう。こういう“巨人”伝説はどこの国にもあって、最もよく知られたのはイギリスの三歳のこどもでもよく知っている『巨人を殺したジャック』(Jack the Giant-Killer)の物語である。新聞に摘録された講演の大意からすると、タゴールの考えはどうやら巨人を物質主義になぞらえて、巨人を征服したのは精神文明であるようだ。だからこの題目は“巨人の統治と巨人を殺す者”とすべきもののようだ。だがわたしは一人の素人で、子どもの“ほら話”で“詩聖”の題目を解釈するのは、当然いささか自信がないわけにはいかない。みなさんの指教をお願いする。

それから、タゴールに反対する問題についてはわたしにもちょっとした意見がある。重ねて言っているが、わたしはタゴールが解らない、(言えば笑われるだろうが、彼の本は何部か買ったのだけれども、)だから反対にも歓迎にも両方とも加わらなかった。迎える土地側の礼儀としての歓迎はすべきだとは思うが、もしかの老先生の看板を借りて玄学を売りこもうとするならそれは真当ではないし、科学を擁護する人が群起して反対するのは、その志は嘉みすべきだけれども、いささか神経過敏たるを免れない。看板を借りて玄学を売りこむのは真当でないと言うのは、手段が卑劣だと言っているに過ぎないのであって、それがほんとうに中国を玄化できるなどとは信じていない。思想の力は群衆に対しては可哀想なほど微弱である。これはわれわれあまり唯物史観が解らない人間でもそう思う。仏教がやってきて二千年、中国固有の拝物教崇拝に成り変ったほかには何の遺留もなく、ただ梁漱溟先生がまだ称賛している後向きの第三の路が残っただけである。しかしながら自身も孔家の生活を送ったので、残った仏化した小居士たちは、これ又“外道”であるバラモンを仏法の“母”と認めた。そのバラモンたるタゴール翁がどんなにすごいとしても、釈迦文仏に及ぶとは限らぬと思う。彼の講演が将来の中国の生活にどんな影響があるかを言おうとしても、わたしは実際附和できない、――その結果を推測するに、名前を一つ付けて、何篇かの文章を刊行し、先農壇や真光劇場で何度か賑やかしをやり、精進料理店や洋書店の商売がちょっとよくなったのがせいぜいで、後はみんなして車に載せてハイお終いで、デューイやラッセル(ドリスはあげるまでもない)が去ったのと同じであろう。しかしながら目下熱心な人々はいそいそどたばたと呼号奔走し、まるで大難に臨むかのよう、いったい何を恐れているのだろう。昔韓文公は大筆を揮って、「原道」を書き、仏骨を諫めたが、それが国のため民のための心であったことはもとより欽佩の至りだが、今日から見れば彼が感情によって事を行ない一騒ぎしたに過ぎず、実際には国民の生活、思想には何の利点もなかった。わたしの友人某君は、天下には白痴と頑固者以外に、誰も多少なりとも他人の影響を受けない者はいない、だがまた完全に他人に跟いて行く者もいないと言う。いま熱心な人は全国の人間がタゴール翁に跟いて

行くのではないかと恐れているようだが、これはあまりに理想的に過ぎるようだ。中国人は非常に自大であるが、また非常に自己卑下でもあり、自分はただ感情的で、少しの理知も意志もない、一たび外面の風浪に遭えば、立っていられず、波に随い流れを逐わずにはいられないと思っている。わたしは中国の国粋派ではないが、中国人がこんなにも耐え性がなく、これほどまで可哀想なくらい軟弱だとは信じないが、ただ反対に中国人は頑固すぎて、なかなか他人の影響を受けないと思っている。もしみんなが言うようなのを信ずるなら、中国はちょっとした異分子に遭えば“それが向上する機会を押え”ようとする、そうなればこの国民はそれだけで完全に独立の資格を失ない、ただ奴隷となるだけで、むろん他人を怨むことなどできない。中国人は結局どういう種族なのだろう。どうかみなさん自分で決められよ。

いまの思想界の趨勢は排外と復古である。これはわたしが三年前に予想したことで、“不幸にして吾が言中れり”、竺震旦先生*も又不幸にして適たま来華され、“駆象団”の白眼に遭われたのは、さらにまことに妄(いわれ)無き災であった。　(民国十二年五月)

※初出：1924 年 5 月 14 日『晨報副刊』

---

* 竺震旦先生　タゴールが来華の際に梁啓超が彼に贈った名前。竺は天竺、震旦は古代インドが中国を呼んだ語の中国語訳、それを合わせたのである。「駆象団」はおそらくタゴールの中国訪問に反対する左派を言うのであろうが、周作人の嫌味であろう。象はもちろんインドの比喩、つまりタゴールを言う。

生活の芸術

チェーホフ（Tshekhob）の書簡集に次のような一節がある、（その時彼は愛琿付近を旅行していた、）“わたしは一人の中国人を酒屋に請んで焼酒を飲んだ。彼は飲む前に杯を挙げてわたしと酒屋の主人及び店員たちに向って、“請（どうぞ）”と言った。これは中国の礼儀である。彼は決してわれわれのように一気に飲み干さず、一口一口と啜る、一口啜るたびに、ちょっと物を食べる。それからわたしに何枚か中国の銅銭をくれて、感謝の意を表わした。これはとんでもなく礼儀のある民族だ。……”

一口一口と啜るのは、確かに中国にしか存しない飲酒の芸術である。乾杯する者は酒の味を知ることができない。泥酔する者は微醺の味を知ることはできない。中国人は飲食ということではまだ少し享用の術を心得ている、だが一般の生活の芸術はとっくに伝を失している。中国の生活の方式はいまではただ両極端しかない、禁欲でなければ縦欲であり、酒ということばさえ口にするのを許さないのでなければ、身体を酒樽に浸けている。二者は互に反動であって、それぞれに益々増長し、その結果は同様な汚い糟である。動物の生活にはもともと自然の調節があるが、中国は千年以前に文化が発達し、一時はすこぶる霊肉一致の現象を呈するに至ったが、後になって禁欲思想が打ち勝って、現在のような生活に変ってしまった。自由もなければ、節制もなく、一切が礼教という仮面の下に圧迫と放恣を実行していて、実際いわゆる礼というものはとっくに消滅して存在しない。

生活はとても容易な事ではない。動物のように、自然に簡易に生活する、それは一法だが、生活を一種の芸術とみなして、微妙に美しく生活するのも、又一法である。二者の外に別に道はない。有るとすると則ち禽獣の下での乱調な生活である。生活の芸術はただ禁欲と縦欲との調和である。エリスはこの問題についてとても精密で周到な意見を持っていて、彼は宗教の禁欲主義を排斥する。だが禁欲もまた人間性の一面であって、歓楽と節制の二者は併存し、そして相反せずに実は相成るのだと考える。人間には禁欲の傾向があり、即ちそれが歓楽の過度を防ぎ、そして即ち歓楽の程度を増す所以だとする。彼は「聖フランチェスコとその他」という論文で述べたことがある。“この二者（即ち禁欲と耽溺）の一をその生活の唯一の目的とする人は、まだ生活をする前にすでに死んでいる。先ずその一（耽溺）を極端にまで推し進め、それから転じて他に向う人は、その人こそ真に人生とは何かを理解し、やがて模範的な高僧と記念されるだろう。しかし終始この二重の理想を尊重する者こそ、生活の方法を知る明智ある大師なのだ。……一切の生活は建設と破壊であり、取り込みと付与であり、永遠の構成作用と分解作用との循環である。真当な生活をしようとすれば、われわれは大自然の豪華と厳しさを模倣しなければならない。”彼はまた言ったことがある。“生活の芸術は、その方法はただ微妙に取得と放棄という二者を混和することにしかない、”とさらに簡明にその考えを説明している。*

生活の芸術という名詞は、中国固有のことばで言えばすなわちいわゆる礼である。スティル博士は『儀礼』の序で、“礼節は決して単に一組みの儀式で、後世が沿襲するような、空虚無用のものではない。これはそれによって自制と整頓された動作の習慣を養成するのであって、唯万物

を領解し一切を感受することができる心を持っている人間だけがこのような落着きのある態度を持つのである。”以前辜鴻銘先生が英文の『礼記』の訳名の妥当でないのを批評して、“礼”はRiteでなくてArtであるとするのを聞いて、当時はちょっとはずれているように思ったが、実はその方が正しい。だがこれは本来の礼を指すのであって、後来の礼儀礼教はいずれも堕落したもので、この称呼を当てるには足りない。中国の礼はとっくに失われ、ただ上文に言うように、茶酒の間に僅かに残っているにすぎない。去年西洋人が上海の娼婦禁止に反対し、妓院は中国文化の所在する所だとした。この言葉は確かにいささか出たらめなところがあるが、よく考えてみるとやはり若干の理由がないわけではない。われわれは唐代の官妓や、ギリシアの“女ともだち”(Hetaira)の風流事を引合いに出して弁護する必要はない。ただ某外人の警句、“中国で妓女を連れ歩くのは西洋の求婚のようなもので、中国で妻を娶るのは西洋での女郎買いのようなものだ”を思い出すか、あるいは『愛の術』(Ars Amatoria)はほんとうはただ草野の間にしか存在しないと感じないわけにはいかない。われわれは決して某西洋人のように妓院を保存しようとはしないが、ただ怪論の中にも、常に真実は存在するのだと思うだけである。

中国でいま切実に必要なのは新しい自由と新しい節制である。それでもって中国の新文明を建造し、つまり千年前の旧文明を復興し、またつまり西方文化の基礎であるギリシア文明と合一するのである。こうした話はあるいはあまりに大きすぎあまりに高すぎるかもしれない。だがわたしの考えではこれを置いて中国には別に救いを得る道はない。宋以来の道学者の禁欲主義は総じて無用のものとなった。なぜならそれはただ縦欲を助長するばかりで調節の役を果すことが出来ないからである。しかしこの生活の芸術は礼節を保ち中庸を重んずる中国にあっては本来何の新奇な事物でもない。たとえば『中庸』の初めに、“天命之を性と謂い、性に率(したが)う之を道と謂い、道を修める之を教と謂う”とある。わたしの解釈によればつまりそのことのとても明白な主張なのである。だが後代の人間はすべてただ章の意味、節の意味を講じるだけで、誰も実行したものがない。わたしは半分の『中庸』で世の中が救えると言うのではなく、ただ中国はこの思想を理解できるということを示しただけである。日本も宋学の影響を受けたけれども、生活の上では平安朝の系統を受け継いだと言え、まだ多く唐代の流風余韻を残している。したがって生活の芸術を理解するのもずっとたやすいのである。多くの風俗に日本が確かにこの芸術の色彩を保存しているのは、われわれ中国人の及ばぬ所である。だが道学者から見れば、それこそまさに彼らの欠点であるのかもしれない。　(民国十三年十一月)

※初出：1924年11月17日『語絲』第1期

---

* 周作人『自分の畑』「エリスの話」注参照。

笠翁と兼好法師

章実齋は学者である。しかしながら人生については多くの古臭く融通の利かぬ見解を抱いている。たとえば『婦学篇書後』に説くのがそれである。李笠翁は当然学者ではない。だが彼は生活の方法を心得た人間であって、決して樸学家の及ぶ所ではない、（かなり男尊女卑の言葉があってやはり同様に訓(おしえ)とするには足りないけれども）。『笠翁偶集』巻六に次のような一節がある。

“ある人が訊いた、‘あなたの意見を執れば、老子の欲すべきを見ざれば心を使(し)て乱れざらしめんという説はほとんど誤りではありませんか。’

予は言った。‘まさにこの説に従って参じ来たれば、ただ為に一転語を下さん。欲す可きを見ざれば心を使て乱れしめざらん、欲す可きを常に見るも亦た能く心を使て乱れしめざらん、と。 どうですか。人間は嗜欲を絶つことができ、声色貨利が目の前になかったならば、つまり我を誘う者至らざれば、我自ら人の誘うところと為らずです。――が、假りにも山に入り俗を逃れるのでなければ、どうしてこんなことができますか。もし一日中欲すべきを見ずして一旦これに遇えば、その心が乱れることも欲すべきを常に見ている人の十倍になります。日々に欲すべきものの中にあってそういう連中といっしょに居て、見慣れてしまいくだらぬ事で日をつぶしているほうがましです。心が乱れないのは欲すべきを見ないで突然欲すべきを見た人とは大いにちがうのではありませんか。老子の学は、世を避け何もしない学です。笠翁の学は、家居してやる事がある者の学です。’……”

これは実際性教育の精義だと言える。“老子の学”は結局ただ空想でしかなく、無理にやれば、結果は聖アントニウスがエジプトの荒野であれこれと思案して、夢にシバの女王と悪魔に会い、その心が常人の十倍も乱れたようなものである。余澹心は『偶集』の序で、“冥(ふかい)心を高く寄せ、千載相い関し、深く王莽王安石の人情に近からざるを悪み、而して独り陶元亮の閑情にして賦を作るを愛す”と言うのはまことに極めて正確な言葉である。

兼好法師は日本の和尚で、十四世紀前半に生まれ、ちょうど中国の元朝に当たり、著作に一部の随筆『徒然草』がある。その一章に云う。

“あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山の煙立ちさらでのみ住み果つるならひならば、いかに物のあはれもなからん。世はさだめなきこそいみじけれ。〔原注〕あだし野は墓地の名、鳥辺山は火葬場の所在地。

命ある物を見るに、人ばかり久しきはなし。かげらふの夕を待ち、夏の蝉の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらすほどだにも、こよなう長閑けしや。あかず惜しと思はば、千年を過すとも、一夜の夢の心こそせめ。住み果てぬ世に、醜き姿を待ちえて何かはせん。「命長ければ辱多し」、長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそめやすかるべけれ。

その程過ぎぬれば、貌を恥づる心もなく、人に出で交はらんことを思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなんあさましき。”

この老法師は仏・老の常談を説いているのだけれども、実は生活の法を理解しているのであ

る。曹慕管は上海の校長であるが、最近『時事新報』に呉佩孚を論じた文章を発表して、次のように言う。

“関羽が後人に欽仰されたのは、一死に在るのみ、……呉は大将の身分で、巡帥の位に居る、この度果して一死することができたなら、教育界中に賜教を拝受する者多からん。”

死は本来は衆生の自然に対する負債であり、忌避する必要などないし、また欽慕することもない。われわれは兼好法師の老いて死なざるはとても無聊の説に賛成するが、また別に四十まで生きれば必ず首を吊らねばならぬとも、そうしなければもののあはれがないなどと考えるとも思わない。曹校長はところが死を（おのずと寿終正寝(だいおうじょう)の類ではない）珍奇なものとみなして、まるでただ一人が“身を殺して仁を成す”ことを肯いさえすれば、どんな政治・教育等の事業もすべて問題にする必要なく、一筋の祥光が、立ちどころに人心を正に戻し、太平世界を現出できるかのようだ。こうした死の提唱は、実にとてつもなく奇妙である。野蛮人を調べると人を犠牲にして豊年や様々の福利を希求する風俗があるが、まさしく同一の意図である。しかし野蛮人ならよいが、堂々たる校長が呉大将を犠牲にして天に福利を教育界に降さんことを求めるとなると、“将に何を以てか一般の青年を訓練せんとするか、将に何を以てか一般の青年を訓練せんとするか！”だ。　（民国十三年十二月）

※初出：1924 年 12 月 15 日『語絲』第 5 期

犬は絨毯を引掻く

アメリカ人のムーア（J.H. Moore）*がある学校で倫理学の講義をした。初めの五講は動物と人間における“野蛮性の遺留”（Survival of Savage）を説いたものである。イギリスの唯理協会によって単行で出版された、とても面白く実益のある本である。彼は歴来の宗教者・道徳家が論争しても決まらなかった人間の罪悪の問題をすべて野蛮性の遺留ということに帰し、ただ犬が絨毯を引掻くことを知りさえすれば、すべてが理解できると考えた。わが家に絨毯はないが、已に物故した老犬 Ess は古稀の年齢で、引掻く気力もなかった。だが夏に寄寓した客分の犬 Bona と Petty はほんとうに毎日ゴリゴリと煉瓦を敷いた地面を引掻き、ある犬たちは寝る前に何度もぐるぐる回った。これはどういうわけだろう。ムーアによれば、犬は狼の変ったものだから、狼であったころには、絨毯などないばかりか、煉瓦敷の地面でさえ寝られず、終日食探しに奔走して、草臥れればそこで横になった。しかし山林の中はどこも雑草ばかりで、まずそれを引掻いたり踏みかためたりしなければ寝られなかった。いまでは、出来あいの場所があって高枕で、もうわざわざ気を遣うことはないのだが、むかしの癖がやはり出て来て、かのつまらぬ動作をする。人間でも多くの野蛮（あるいはまだ禽獣の）時代の習性が残っていて、もともとすでに無用かあるいは反って有害なものとなっているのだが、時によって相変わらず発動し、そこで罪悪、および別の様々なでたらめな迷信的悪習となる、ということだ。

この話は確かにまちがってはいない。ふつうの社会では自分に関係のない恋愛事件に対してすべて猛烈な憎悪を抱くが、これも正に野蛮性の遺留の一証であると思う。ここ何日か冬季の創造期で、ちょうど子どもたちの言う門外の“犬もけんかしている最中で”、わが家のチンコロはたいていしっぽを垂れて帰って来る、彼の背中はかなりの傷を負っているが、みな先輩たちの与えた懲罰なのだ。人々が失恋者に同情するのは、あるいは弱きを扶ける“義侠心”から出たものと言えるかもしれない。恋を成就した者への憎悪の動機に至ってはそのような正々堂々たるものはなく、実はただチンコロの背中を咬む変相にすぎず、禁欲、あるいは放縦な生活を実行している人間が特に“風化”に干渉しようとする、つまりそういうわけなのである。

もう一点、野蛮人はみな生殖崇拝の思想を持っている。これは本来は何のおかしいところもない。ただ彼らは性の現象をあまりに神奇に見すぎるので、多くの奇妙奇怪な風俗が生まれる。フレイザー博士の『金枝篇』（J. G. Frazer; The Golden Bough ――わたしが持っているのは一巻の節略本である。五六年前の『東方雑誌』によると、これは二千年前のギリシアの古書で、今ではすでに散逸したそうである）で、「栽培に於ける性の影響」を講じてとても詳しい。（その著書の Psyche's Task の中でも挙例がはなはだ多い。）野蛮人は植物の生育の手続きが人類と同じだと思うので、性行為の儀式が稲麦や果実の繁殖を促進できると信じたのである。こうした実例はとても多く、ジャワでもそうであるし、ヨーロッパでは現在では当然同じような習慣は見つからないが、遺跡はまだ存在する。たとえばドイツのある地方では秋の収穫のころ、麦刈りの男女がいっしょになって地面をころげまわらねばならないのなど、つまりその一例である。両性関係がこのように偉大な感応力を持っているからには、動植物の生長を促進することができるし、一

方ではやはり自然の進行を妨害あるいは阻止したりすることもできる。だから部落によってはその時期に特に禁欲を励行して、そうでなければさまざまな果実が稔らず、百草は成長しないと考えた。社会で他人の恋愛事件に反対するのは、つまりこうした思想の再現である。 われわれはその中に動物的な嫉妬が含まれることを見て取るけれども、やはり性に対する迷信を重要分子とし、彼らが無意識的に両性関係が天行を左右する神通力を持っていると信じており、常習的でない恋愛は必ず社会の災禍を引起し、全群に災難が及び、(現代語でこれを風化の損壊という、)事は生命にかかわるので、そのような猛烈な憎悪が生まれるのである。社会の常習的な結婚についての態度を調べてみれば、上文に言う所の誤りでないことをもっと明瞭にすることができる。ふつうの人間は性の問題に対してみな不潔という観念をいだいており、精進潔斎する人間はさらに新婚や出産の場所を避け、汚穢に触れるのを免れようとする。みんな知っているが、宗教上の汚穢は実は神聖の一面であり、エーゲ海の訳すことの出来ない術語“タブー”(Tabu)という言葉は、その中の消息を表わしている。それが神聖な魔力を含むために、受け容れることができない人や物を損害するに十分で、それで彼が帝王、法師、あるいは成年の女子であろうと彼を隔離し、そうして危険を免れるのである。ある場合はこれを汚穢と称するが、汚穢と神聖は実は一物であって、ある場合はひっくるめて危険な力と称してもよい。社会が好んで閑事に口出しをし、両性関係において最も厳しいが、これは何故だろうか。われわれは野蛮性の遺留ということに着眼すれば、一部分は動物の配偶を求める本能から、一部は野蛮人の性の危険力に対する迷信から出ていることが見て取れる。このご先祖の遺産は、われわれ各人が一分ずつ分有し、なかなか脱出せない。しかし科学の力を借りて、実際の情況を知り、理知をして随時自ら警戒することができるならば、当然いくらかは利点があるだろう。道徳の進歩は、決して迷信の増加にはよらず理性の清明さによるのである。われわれは中国の性道徳の整頓を希うが、教訓条項の増加は希わない。ただ知識の解放と趣味の修養を希むだけである。科学の光と芸術の空気は、何時になれば青年の心理に侵入し、新しい両性の観念を造りあげることができるのだろう。われわれはいわゆる西方文明国の大勢に鑑みて、もし本国のみが天分に恵まれていると確信しているのでなければ、一時には何の希望もないようだ。しかしながら言うだけでも姑くは言わざるを得ない。　(民国十三年十二月)

※初出：1924 年 12 月 1 日『語絲』第 3 期

---

* J.Haward Moore.Savage Survivals.Charles H.Kerr and Co.1916.pp.52-53.

清浄に見ること

日本の現代の奇人廃姓外骨（元の姓は宮武）はその著『猥褻と科学』（一九二五年出版、非売品）の附録「自著穢褻書目解題」の中の「猥褻廃語辞彙」の項に注して云う。

「大正六年発行の政治雑誌『民本主義』は、第一号を出したとたんに禁止され、罰金に処せられ、且つ以後の各号もすべて発行禁止にすると表明された。わたしは実に如何ともするすべなく、そこでこの書の編纂に着手し、自序に、

“わたしの性格は過激と猥褻という二点に固執していると言え、いまわたしが企画している官僚政治討伐は、大正維新建設の民本主義の宣伝が妨害され窮迫を受けたからは、自然の成行きとして性の研究と神秘の漏洩に傾かざるを得ない。これが本書発行の理由であり、また即ちわが天職の発揮である。”云々。」

著者は明言しないけれども、彼の性情は明らかに時代に対する一種の反動であり、専制政治及び偽道学の教育に対する反動である。わたしは政治はわからないから、その方面には何も言うことがない。だが偽道学の教育への反抗という面では十二分に同感する。外骨氏の著書は、たとえば浮世絵、川柳および筆禍、賭博、私刑など風俗研究の各種に関して、いずれもとても興味を覚える。ただ最もわたしを佩服させるのは彼のいわゆる猥褻趣味、つまり礼教に対する反抗的態度である。ふつう猥褻な事物に対しては三種の態度がある。一つは芸術的に自然であること。二つは科学的に冷静であること。三つは道徳的に清浄であること。この三つはいずれも正しい。だが偽道学の社会ではわれわれ科学および芸術家でない凡人が取りうる態度は第三種でしかない、（実際には前二者を依拠とするのだが、）自分で清浄に見て、清浄でない眼を持つ人々に対しては白眼視し、嘲弄し、そして譴責するに至る。

わたしはヨーロッパの文芸復興時代の文人が最も好きである。彼らは非礼法主義を芸術の中に顕現させたからで、イタリアのボッカチオ(Boccaccio)とフランスのラブレー(Rabelais)を代表とすることができる。ボッカチオは芸術家であり、ラブレーは芸術家にして科学者を兼ねるが、同じくみな道徳家（モラリスト）で、『十日物語』には現世的空気が充満しており、『大渇王』（Pantagruel）の物語はさらに猛烈に政治宗教の聖殿を攻撃し、一方では理想のドロマ寺を建てた。ラブレーが“風化を傷（やぶ）る”ばかりか、“名教に罪を得る”嫌疑を受けた所以で、ボッカチオよりももっと危険であった。彼は狂信的な殉教者ではなく、冷酷な清教徒ともちがう。笑いながら、さわぎながら、猥褻の着物をかぶりながら、礼法の陣に出入し、結局は傷つくことがなかったのは、実に彼の本領である。彼はかつて象徴的に言ったことがある。“わたしは生まれてより十分口が渇く目にあって来た、これ以上火で炙られる必要はない。”と。彼は又自分の主張に固執しようとして、あやうく荼毘に付されるところまで行ったとも言う。この点でわれわれをとても佩服させる、われわれが三十余度の禁止を食らった外骨氏に佩服するのと同じように。

中国はいま偽道学の空気が極めて濃厚であり、官僚と老人は言うまでもなく、青年までもがそうであり、たとえば心琴画会の展覧を批評して、“一幅の裸体画も絶無なのは、さらにその人品の高さが表れている”だと！中国のまだ呆けてない人々はどこにいるのだろう。なぜまだ“十字

架”を手にして反抗に起ちあがらないのか。われわれは芸術、科学、とりわけ道徳の見地から、清浄に見ること〔浄観〕を提唱し、この偽道学の教育に、あやうく火炙りになるところまで反抗すべきである。　（民国十四年二月）

※初出：1925 年 2 月 23 日『語絲』第 15 期

友人に与えて性道徳を論ずる書

雨村兄：

ながらく通信してませんが、実はあまりにも慣れ慣れしくなるからです。ましてお互い好事の徒ですし、一月のうち何篇か文章が新聞に載りますから、読めば世間話をしているのと変りありません。だから別に八行の書〔手紙のこと〕に書く必要はないわけです。しかし少しばかり、『婦人雑誌』について、前からあなたに話そうとしていたことがあります。これはたぶん怠けたせいで、今まで延び延びになって筆を執らずに来たのですが、今日又想い出したので、この手紙を書いてあなたにお送りします。

わたしがもしあなたを称賛しようとして、君の『婦人雑誌』はなかなかよくやっていると言うならば、たといほんとうのことであっても後ろで喝采している嫌疑がかかりますから、それはわたしの言いたいことではありません。いまのは別に少し不満に近い意見ですから、言ってもかまわないでしょう。君の恋愛至上の主張は、理解でき且つ賛同できるようではありますが、君の『婦人雑誌』はうまくやれてないように思います。――というのはこういう雑誌はあのような思想を載せるものではないからです。『婦人雑誌』はわたしは知っていますが営業的性質のもので、営業と思想――しかも又恋愛と来ている、どれだけかけ離れていることか。われわれが思想を語ろうとするなら、四五人が自費でもとを取らないで発表するならよろしいが、営業的性質の刊行物で、ましてや又 The LADY'S Journal と来ては……それはどの号だってよくないと思います。われわれは、営業と真理、職務と主張はいずれも断乎として混同してはならないことを知らねばなりません。ところがあなたはくそまじめに“他人の酒杯を借りて自分の不満を澆ぎ流そう”としたのです。忠実な婦人問題の研究者たるに恥じませんが、優れた編集者とはいいかねます。だからわたしはいまあなたにちょっと忠告しようと思います。どうかそういう“過激な”“不道徳な”両性倫理の主張は自分の刊行物に載せる準備をし、別に改めて営業精神に則って公の雑誌をやり、決してもう LADIES and gentlemen が喜ばない恋愛は語ってはいけません。最もよいのはせいぜいカステラ・プディング・杏仁茶などの類の作り方、それに刺繍・裁縫・髪型・ブラジャーの秘訣を載せ――あるいは纏足法を調査して後日の需要に備えてしかるべき時に掲載すれば特によいと思います。『白話叢書』の中の『女誡注釈』は、いまでも採用転録してよいし、将来読経の潮流が北から南に行った時には自ずとあらためて『女兒経』を載せるべきです。そういう時代が来るのはきっとそう遅いことではありません。未だ雨ふらざるに綢繆す〔大雨の前にそれへの備えをする〕、いまは正にその時です、間違ってはなりません。こうした雑誌を青年男女が愛読するかどうかは敢えて予言しませんが、きっと権威ある旦那方の気に入って、何冊も買って孫娘たちに読ませるでしょうから、販路が狭いと心配するには及びません。たとい販路のことは言わないとしても、聖賢と大衆にくっついてさえいればまちがいがおこるはずはありません。たとい世道人心に功績があって褒章にあずかるとは言えないにしても。要するにわたしはあなたが境界をはっきりさせ、気力はひとに売り、思考は自分に取っておくことを希望します。これは世間に酬いる取っておきの妙計です。もし応用できるなら、災いは消え福来たり、効験は『波羅蜜

多心呪』のように顕かでしょう。

しかしながらわたしはやはりあなたがあまりに熱心にあなたの主張を発揮することに賛成できません。たとい自前の刊行物であっても。わたしは実際嘆かわしいのですが、“熱狂”に欠けた人間です。わたしの言論には多少ともみな遊戯の態度があります。わたしもちょっと過激な思想をいじくるのは好きで、草を抜いて蛇を尋すように道学者に言いがかりをつけたりしますが、しかしフランスのラブレーのようにただ“あやうく火炙りになる”までで、殉道の決心があるとは限りません。まるで子どもの蹴まりのようなもので、とても愉快な事とは思いますが、本もと何かを蹴り出そうなどと期待してませんから、蹴り厭きたらお終いで、そのまま脚を折るほど蹴るつもりはありません、――脚を折るほど蹴ったところで残るのはまり一つじゃありませんか。われわれが両性倫理についての意見を発表しても自分が言いたいからというに過ぎません。まさか最近のあるいは最遠の将来に何か効力を発揮することができると期待しているわけじゃないでしょう。イエス・孔丘・釈迦・ソクラテスの言葉は、いったい世間にどれだけの影響があったのか、わたしには確かなことは言えませんが、その結果は恐らく自分がそう言って満足だったというに過ぎないでしょう。後人が読んで満足したり――あるいは満足しなかったり、ただそれだけのことです。わたしは絶対に進歩の説を信じないのではありません。だが急速にしてかつ完全に進歩できるとは信じません。世界がどんな様子に変ろうと、闘争・殺傷・私通・離婚といった事は要するに後を絶つことはないと思います。われわれの高遠な理想郷は結局われわれの心中の独自の楽しみの影にすぎません。そうした理想のために、わたしも力を出したいですが、だがいまはまだ命をかけようとは思いません。わたしはいまだ志士のように犠牲を高唱し、最後まで奮闘せよと勧めようと思ったことはありませんが、ほんとうを言うと志士でないことを慚愧し、自分のできないことをひとに勧めるのは具合が悪いですから、わたしがあなたに勧められるのはただあまり熱心になって、道学者たちに火炙りにされるようなことになるなということだけです。最もよいのは白炉子*を眺めながら用心していることで、しばらくは近よってはいけません。もちろん改めて白炉子党に入るなどは駄目です、――白炉子の煙が少し薄くなった時には相変らず自分の仕事を続け、決して決して一気に、翠鳥印のタバコのように“炙”られてはなりません。わたしも自分から頭の皮を差し出して、真直ぐ白炉子の口にもぐりこもうという人があることは知っています。あるいはそれをひっくりかえすこともできるかもしれません。でも、わたしは重ねて言います。自分はまだ懸命にはならない、太子椅子に坐ってむやみにわめくのは具合が悪いので、この点はどうか勘弁願わなければなりません。

先週の土曜日の晩にここまで書いたのですが、夜中にわたしたちの下の娘が突然急病にかかって、まるまる三日慌てました。いまは医者が危険は去ったと声明しましたけれど、まだ十分慎重に看護する必要があります。だからわたしもまだ執筆の時間がないのです。だがこの手紙はどうしても出さなければなりませんから、締めくくりの一句がなくてはかないません。要するに、わたしは中国では時期尚早の性道徳論をやらないように勧めます。理由は上に述べた通りです。青年や黄年の誤解あるいは利用はすべて問題になりません。この点については述べている暇がありませんので、ただ陳仲甫先生が一九二一年にされた話（『新青年』隋感録一一七）を一部分後に

抄録します。

青年の誤解

“教える者がもし酔っぱらいを扶けるなら、東を助けたと思ったら西が倒れる。”現代の青年の誤解も、酔っぱらいと同じだ。……婚姻は自由でなければならぬと言うと、彼はもっぱらラヴ・レターを書いて異性のだちを探すことを日常の重要な勉強だとする。……家庭の圧制から離脱せねばと言うと、彼は年老いて寄る辺のない母を棄てる。社会主義共産主義を提唱すると、彼は敢然としてみんなや友人は彼を養うべきだと考える。青年は自尊の精神を持たねばならぬと言うと、彼は目に一切なく、妄りに尊大になり、善言を受け入れない。……

ごらんなさい、これには、放っておくより他にどんな手がありますか。でなければたといカステラの作り方だけ話しても、おそらく彼等はやはり誤解して、カステラを食べると胃病になると言うでしょう。草々にて多く書けません。日を改めてまたにしましょう。

民国十四年四月十七日、署名。

※初出：1925 年 5 月 11 日『語絲』第 26 期

---

*白炉子　　白い土製のコンロだが、ここは白色に意味があって、右翼の道学者たちの勢力を言うのであろうか。

友人に与えて懐郷を論ずる書

廃然兄：

蕭君の文章のは当然、ただ理想化された江南でしかありません。凡そ懐郷・懐国および懐古は、懐う対象がすべて空想の中の情景でないものはありません。もし事実を言うなら一様に何の愛すべきものもありません。なにかの本（『恋愛と心理分析』だったか）で次のような一節を読んだことがあります。某甲の妻はとてもじゃじゃ馬だったが、彼女の死後某甲は懐しがってほとんど病気になりそうで、人に向っては彼女の賢さを称めました。彼は生前の妻のじゃじゃ馬ぶりを忘れてしまい、ただごくごくわずかな長所だけを覚えていて、それがしだいに大きくなって心の全部を占めてしまったからです。われわれは面前にない事柄について恋慕に耐えない時、往々にしてこのようになってしまっても、深く怪しまないようですが、これはむろん事実と信ずることはできません。

わたし個人はひょっとしてみんなとは少しばかりちがうかもしれません。事実に照して言いますと、浙東はわたしの第一の故郷で、浙西が第二の故郷、南京が第三、東京が第四、北京が第五です。だがわたしは必ずしも浙江が好きではありません。中国ではやはり北京が最も愉快で、住んでいられます。あの春夏の風塵がやや厭うべきほかは。以上の五カ所の中でわたしがいつも懐しく思うのは日本の東京及び九州関西一帯の地方です。外国に居ると現実社会とは較や疎隔され、美しい印象が保存されやすいからでしょう、あるいはまだ別の理由があるかもしれません。いま中国の如きは自然の美しさが人事の醜悪に打破され、幻想でさえもなかなか成立たず、それで史跡でとても盛名を負った於越〔越の国、紹興一帯を言う〕もわたしの心の中ではただ毛宗の筍・楊梅それに老酒を連想し、まずまず楽しめるかと思うだけで、その他はただ人民の鄙陋薄情、天候の湿っぽさと酷暑などなど、不快な追憶を引起すだけです。わたしは海辺の水郷で生長しました。いまでは水に対しては完全によしみがないとは言えませんけれども、別に恋しいというほどではありません、什刹海の池に向っては呆然とするばかりですが。紹興の応天塔、南京の北極閣はいずれもわたしが極めてよく識っているなじみの地ですが、回想してみても何の感動もありません。反って東京浅草の十二階の方がより一層親密感があります――前年の大地震で倒壊したのは、とても残念で、まるで親友の家が火事になったニュースを聴いたかのようです。雷峰塔の倒壊はただ古物が一つ失くなったと感じただけです。わたしのこういう感想はあるいはあまり合理的でないかもしれませんが、人にはそれぞれ独自の経験があり、感情は往々にしてその影響を受けて変化するのは、実際しかたがない事です。

事実の面では、あなたの仰る努力して人力によって自然と人生の美を発展させ、それを愛すべき世界にするというのは、正しいしまた肝腎のことです。われわれは理性から国を愛すべきだと言いますが、ただ本国を好くしないとわれわれ個人も自由に生存できないから、これは利害の上でもそうならざるを得ないのです。決して本当に感情から来て利害関係を離れた愛ではありません。もしわれわれが真心からこの国あるいは郷土を愛するようにしようとするなら、まずそれを愛すべき物にしあげなければなりません。ここで述べた問題はあるいはかなり弁論の余地がある

かもしれません。（現今のように愛国教の盛行する時には、）わたしもこの演武台の攻略の準備はしていませんので、ただお手紙に述べられたことを見て、しばらく自分の意見を述べ、賛同の意を表したまでです。

一九二五年五月七日。

※初出：1925 年 5 月 18 日『語絲』第 27 期

友人に与えて国民文学を論ずる書

木天兄：

あなたと伯奇兄が国民文学を論じられたお手紙を拝見し、あなた方の意見については十分理解できると思いました。伝道者は言いました。“日の光の下に決して新しい事はない。”と。これはもともととても自然でとてもふつうの道理で、民族主義思想が意識的に文学に発現したものにすぎないと思います。この主張の理由は火を見るよりも明らかで、一国の文学がもし国民のものでないならば、どうすべきか。まさか殖民のもの遺老のものであってよいわけはないでしょう。幸であれ不幸であれ、われわれは中国人として生まれついた以上、自分の意志にかかわらず漢族の長所短所とその運命を共有します。われわれは第一に自らアジア人（“Asiatics”！）の中の漢人であることを自ら認めねばなりません。懸命に前進して、人類の中で漢族の受けるべき幸福を勝ち取り、やれる仕事を成就するのです。――もしわれわれが自らを軽蔑せず、自らを公共の奴隷と認めないのであるならばです。ただ残念なことに中国人の中に外国人が多すぎます。西洋人の小使いと家付奴隷の気が重すぎ、国民としての自覚があまりにもありません。だから政治的に独立を失っているうえに、学術・文芸でも影響を受け、新しい気象がありません。国民文学の呼声はこうした堕落した民族への一本のカンフル剤と言えましょう。効果がどうかは予知できませんが、要するに適切な方法ではあります。

しかしわたしは一言付け加えねばなりません。国民文学を提唱すると同時に必ず個人主義を提唱しなければなりません。国家主義を鼓吹する人が個人主義について極力反対するのを見ると、国家主義がその根拠を失うばかりか、彼らの主張に宗教的気味をもたらし、たやすく狂信に変ってしまいます。その結果はおよそ本国のものなら必ずよく、およそ他国のものなら必ず悪いとなって、自分の国土が世界の中心で、自分の戦いが天下の正義、しかもなおそれを“自尊心”だと言うのです。われわれはひとの侮辱に反抗しますが、決してわれわれがひとを侮辱してよいと言うのではありません。われわれはひとがわれわれの長所を抹殺することを願いませんが、決してわれわれが自分の短所を守るべきだと言うのではありません。われわれが要するのは一切の正義です。正義によってわれわれは自主と自由を要求し、また正義によってわれわれは自己譴責、自己鞭撻をしなければなりません。われわれはいまこのように侮辱されています。一半はもちろん他人の強要によりますが、一半――少なくとも少なくとも一半は――やはり自分の堕落によります。われわれは他人に反対する前にあるいは同時に、力を尽して自分の悪根性を発き削除するべきで、そうしてはじめて民族再生の希望が持てるのです。 でなければただの拳匪思想の復活です。拳匪の排外思想をわたしは決して絶対にまちがいだとは思いませんが、その本国は必ずよくて外国は必ず悪いという偏見、“国粋”を用って新法に反抗してよいとする迷信は、結局は拳匪の行いであって、わたしが絶対に反対するものです。国家主義を信奉するなら古文でなければ書かず、古詩でなければ歌わずと信ずる人がいますが、これはとても憂慮させます。恐らく真当な国家主義は劣化するでしょう。われわれが国民文学を提唱するにはこの点に十分注意し、そうした流弊を生じさせてはなりません。だからあなたの言い方に倣ってもう何句かを付け足さなけれ

ばなりません。つまり積極的に民族思想を鼓吹するほかに、いくつかの仕事があります。

われわれは民族の卑怯という中風に一針を打たねばならぬ、
われわれは民族の淫猥という淋毒を消去せねばならぬ、
われわれは民族の愚昧という瘍を切開せねばならぬ、
われわれは民族の自大という狂気を去勢しなければならぬ。

以上は三月一日にわたしがあなたに返した手紙で、かつて『京報副刊』第八十号に載りました。今ここに再録したのは、いまのわたしの意見がまだこうでしかないからです。わたしはなぜだか遺伝学説に圧迫されていて、よいにしろ悪いにしろ、中国人はどう転んでも中国人だと思います。だから国粋の保存など正に不必要なのです。どうせ国民性は消えてなくなるはずがありませんから、欧化の提唱も虚しいのです。天下に、どうやって化したところで二粒の豆のように似た民族などありえませんから。いま肝要なのは個人と国民の自覚を喚起することで、できるだけ古今の文化を研究・紹介して、自由に浸み通らせ、民族精神の滋養剤とすれば、それによって自動的に新しい漢族の文明を生み出す望みがあります。これはわたしの勝手な夢想であり、またわたしが国民文学の提唱に賛成する理由でもあります。しかし、時には又こうした夢想もふわふわしたもので、当てにはならないように思います。ル・ボン（Gustave Le Bon）の言うように、人間世界の事はすべて幽鬼が主体であります。その結果ほとんど人間は幽冥世界の裁判官――あるいは毗騫(ひけん)国王の手にある賃借帳を信じてしまいます。中国人は運命として決っている奴隷なのです。こうですから又わたしは一切の提唱に対してどうしてもいささか冷淡になってしまうのです。わたしの小さな願いは、いまはただせいぜい一分でも理解できればということにあり、一厘でも成功できるということにはありません。だからこれもまたかまわんかまわんなのです。草々。

民国十四年六月一日。

※初出：1925 年 7 月 6 日『語絲』第 34 期

教訓の無用

エリスは「道徳の芸術」という文章で言う。「ある社会のある時期ある土地における道徳は、別の社会とはもちろん――そして同じ社会でも別の時期、別の土地における道徳とは決して同じではない。ただしその間には錯綜した条件があって、道徳に違いを生じさせるから、故意にそれを造ろうとしても無用の事である。ある人がひとに彼は一冊の“道徳的な”本を書いたと言われても、彼は理由のない喜びを必要としない以上、彼の本は“不道徳だ”と言われたとしても、また理由もない落胆も必要としない。この二つの形容詞の意味はいずれもとても限定的である。群衆の密集した大多数の行進には、甲種の本であれあるいは乙種の本であれいずれも何の重大な影響も留めることはできない。」*

スペンサーもかつて人に手紙を書いて、道徳的教訓の無効を語った。彼は“愛の宗教を宣伝して二千年近くの後、憎しみの宗教がまだ勢力を占めている。ヨーロッパには二億の外道が住んでおり、キリスト教徒を装っていて、もし誰かが彼らに彼らの教旨に従って物事を行うよう希望すれば、逆に彼らに辱罵されるだろう”と言った。

これは実際すべて真実である。ギリシアにはソクラテスがいたし、インドには釈迦がいたし、中国には孔・老がいた。彼らはみな聖人と尊ばれた。しかし現今の本国の人民の中では彼らは“かつていたことがない”というに等しいと言える。わたしはこれはもともと当然であり、まさしく代わりに謂われのない慨嘆をする必要はないと思う。これらの偉人たちがもしほんとうに存在しなかったら、我々は今なぜだか分からないがもっと寂寞であるだろうが、今言行が流伝しているからには、芸術趣味のある人の鑑賞に供するに足りるのだから、それだけで十分によいことである。彼らの教訓の実現を期待するのは、枕元によい夢を探るようなもので、痴人に近くなってしまい、罵倒されても当然である。

世間の“不道徳な”文人については、我々は聖人と同じように彼を尊敬する。彼の“教訓”は群衆の中では誰も聴かない。人によっては彼に石を投げたり、あるいは彼の本を袖に入れていたりするかもしれないけれども、――しかし我々が彼が自分の物語を話すのを聴くのはかまわない。（民国十三年二月）

※初出：1924 年 2 月 26 日『晨報副刊』

---

* “The Dance of Life. ” Houghton Mifflin Co. 1923, ch. Ⅴ;the art of moral, p. 246. 後のスペンサーの言葉もその注に見える。

fact, cannot fail to be rather unprofitable. That, it would seem, is what the writers thought — at all events about those the others had written — or else they would not have considered it necessary for themselves to add to the number. It was not only an unprofitable task, it was also — except in so far as an objectively scientific attitude has been assumed — aimless. For, although the morals of a community at one time and place is never the same as that of another or even the same community at another time and place, it is a complex web of conditions that produces the difference, and it must have been evident that to attempt to affect it was idle.[1] There is no occasion for any one who is told that he has written a "moral" book to be unduly elated, or when he is told that his book is "immoral" to be unduly cast down. The significance of these adjectives is strictly limited. Neither the one book nor the other can have more than the faintest effect on the march of the great compact majority of the social army.

Yet, while all this is so, there is still some interest in the question of morals. For, after all, there is the small body of individuals ahead, alertly eager to find the road, with a sensitive flair for all the possibilities the future may hold. When the compact majority, blind

[1] Herbert Spencer, writing to a correspondent, once well expressed the harmlessness — if we choose so to regard it — of moral teaching: "After nearly two thousand years' preaching of the religion of amity, the religion of enmity remains predominant, and Europe is peopled by two hundred million pagans, masquerading as Christians, who revile those who wish them to act on the principles they profess."

いわれなき感慨

正午に暇をひねり出して東単牌楼の本屋を見に行って、何冊か日本語の本を買った。月末になって欠給を取り戻したのは、まるでタダで持って行かれたような癪の種だったけれども、今はとても愉快である。その中に一冊、安倍能成の『山中雑記』[i]があり、五十一篇の論文集である。人物を記述したものは、正岡子規、夏目漱石、数藤、Köebel などの諸文は、皆面白く読んだが、旅行および山村の記述は最も興味を覚え、さらにいくつかの感慨を引き起こした。

みんなは旅行はとても愉快な事だと言い、人の紀行を読んでも確かにそう思われる。だがわれわれ中国にいる人間にとっては、そういう幸福は極めて少ないようである。わたしの以前の旅はみな避難逃亡のようで、（いわゆる実用主義の眼光で見れば、やはり一種の有益な訓練なのかもしれない）船上車上では盗難傷害を防がなければならないばかりか、旅館の中でさえ一刻として、心身の疲労を休めるゆったりとした落ち着きがない。新式の新旅館から高粱杆のベッド黄河の小船宿に至るまで、わたしが泊まった所は一つとしてそうでないものはなかった。茶房（ボーイ）や伙計（てんいん）に至ってはたいていが菜園子（ちゃいえんばん）張青〔『水滸伝』の英雄の一人〕の徒弟のたぐいで、特に付き合いにくい。例えばでこぼこ泥まみれの道など、（だいたいが通州への国道のようだと思えばよい）金があって自動車に乗ろうが、金がなくてテクテク歩こうが、結果は同じように不愉快で、同じように旅行の情趣というものがない。日本はそこは大ちがいで、安倍の文章を読むとまったく彼の幸福が羨ましくなる。だが実はそれも当然の事であり、中国にはないだけのことなのである。

三年前西山で数ヵ月療養したことがある。これはわたしが過ごした唯一の山居生活である。街中と比べると、確かにずっと愉快であるが、何も特別な懐かしさがない所である。何株かの古い樹木以外には。中国のどこに住んでいても、第一に気に食わないのは食物がめちゃくちゃなことである。粥にしろ、豆腐青菜にしろ、清潔に作ってあれば、何でも食べられるのだが、中国では要するに何とも見た目が良くないし、それにどうしてもコックの気[ii]が抜けないのはとても嫌らしい。こせこせしたのは山村の特色ではなく、清淡閑静のはずなのだが。中国では一方で古いこせつきを留めながら、もう一方では新しいものを添加する――糞土の牆と赤い煉瓦塀とである。みなさんご自分でご選択あれ。安倍は「山中雑記」の最後で言う。

「私はこの山が山上では今尚厳に肉食と妻帯とを禁じて居ることをせめて嬉しく思ふのである。私はこの山に来る者が、世間と同じく肉味を求め、軽暖を欲することなく、精進を守り、静寂を喜ばんこと、さうしてこの山の人々が山上に一個の修道院を作り、上り来る者に対して世間と別なる空気に触れしめんことを望む者である。日本の現在の趨勢は様々なる意味に於いて次第に静かなる世界を破壊しつつある。我等の如き貧生かかる世界の次第に求め難くなることを嘆きつつある。私は山の当事者が宿院を以て営利事業と為すことなく、長く静寂と黙想とを愛する者の為に、恰当の場所を供せられんことを望むに堪へない。」

わたしはこの言葉に対して十分に同意する。――だが中国にはもともとどんな静寂な世界もないのだから、これも無駄話でしかない。

最後に、『山中雑記』を閉じた後、又第三の感慨が起きた。（わたしもこれが亡国の音である

ことは認める。）こうした文章を、われわれは書くことができない。才力に限られだけではなく、実は時勢にも迫られていて、こうした余裕がないのである。可哀想に、われわれはまだ華林、柳翼謀、曹慕管といった諸公の妙論を批評するのに懸命にならざるを得ず、まだここで恥も外聞もなく“二五が十”を力説しているのだから、どこに風月を談ずる暇があろう。われわれがよい文章を書けないのは、人であり、亦た天である、ああ。　民国十三年十二月十日。

※初出：1924 年 12 月 16 日『京報副刊』第 12 號

---

[i] 『山中雑記』　安倍能成著　岩波書店大正十三年八月　342～343 頁。

[ii] コックの気　コックの気が具体的にどういう様態を言うのか未詳。

わたしの復古の経験

たいてい人はその少年時代に一つか二つはおかしな事をやるものだ。あるものはロマンティックな恋愛だったり、あるものは革命のまたは復古の運動だったりである。 いま思い出してみると、とてもおかしな所があったと思われるのだが、当時にあってはとても真面目にやっていた。実を言うと、それは少年時代にはもともと当然なことなのだ。ただ孵化しないままにミイラになりさえしなければ、よいのである。

わたしは“国学者”ではないが、十年ほどにわたり一度かなり復古したことがある。 最初は厳幾道、林琴南の訳書を読み、こうした諸子の文で夷人の言葉を訳す方法はとても真っ当だと思い、極力それを真似した。“義法”の奥義が解らなかったので、もちろん学びは様にならなかったけれども、自分ではそれほど移訳の正統に背いているとは思わなかった。それから太炎先生の教えを聴いて、さらに一歩進歩し、改めて“載（すなわ）ち飛び載ち鳴く”という調子を改め、たくさんの古字（たとえば蹏を蹄に改め、耶を邪と書くなどの類）に換え、――そうした努力のお蔭で、『域外小説集』の原版は二十部しか売れなかった。これがわたしの復古の第一段である。

『新約』は中国では文言と官話の二種の訳本があり、官話本はもちろん軽蔑したが、文言本についても不満であった。文章にまだ古さが欠けており、周秦の諸子や仏経の古雅には比べようがなかったからである。わたしはそこで、板前でもないのに、“まな板を越えて”改訳しようと決意し、三年はたっぷりかけてその仕事の準備をした。ギリシア語を読み、まず「四福音書」および『イソップ寓話』を訳す予定を立てた。そのころ林琴南君のイソップ訳本にも古さが欠けているのを嫌ったからである！――後になって、聖書の白話本はそれでもうなかなかよい、文言もいじるに及ばないだろう、むろん改訳の必要はないと思ったが、それは後の話である。以上がわたしの復古の第二段である。

以前わたしは古文を作り、みな一句一圏点の句読法を用いた。後からギリシアの古人はみな全体を連写して、句読段落を分けず、文字も分けないことに気づき、とても古樸で手本になると思った。中国の文章の書写法もまさにそうだったから、謀らずして合致し、圏点を使うのは特に古雅に欠けると思われた。中国の文字がたとい難題であっても、生まれて中国国民となった以上、この難題の文字を学ばねばならない義務があり、様々な方法を利用して、私的な便宜を謀ることはできない。したがってわたしは圏点の方法を取り消し、一篇の文章は必ず全体を最後まで連写しなければならないと主張した。（もちろん題目はあっても、徹底して古法に循うことはできなかったけれども、）本県の『教育会月刊』にまだわたしのこうした成績が残っている。これがわたしの復古の第三段である。

こうした復古精神は、わたし個人だけが持っていたものではなく、たいてい同時代の同職業の人にはこうした傾向が多かった。わたしの友人銭玄同は当時民報社で太炎先生と徹夜で文字復古の方法を談論し、最後に太炎先生が小篆の方法を提案して、 この問題は決着ということになった。この事は、一部の楷書体篆書の『小学答問』が世間に流伝していることが証拠となる。それは玄同の手筆なのである。その後彼は“深衣”〔古代の士大夫の常服〕を着て役所に出たが、そ

れはちょうどわたしが圏点をやめた時だった。こんな事は、話せばもっと多くいまは細かく言う必要もないだろう。ただわれわれがかつてとてもおかしな復古運動をやったことがある事を表明しさえすれば十分であろう。

　われわれのこうした復古は、少なからぬ時間と精力を消耗したが、又それによって極めて大きな利益をも得た。つまり“この道通ぜず”という教訓である。玄同は楷書体篆書を書いて、漢字の根本的な破産を確信したので、徹底的に悟り、かの「霹靂一声国学者の大狼狽」という漢字廃止の主張があるのである。*わたしは心得がなかったけれども、やはりそれによって古文の決して用うべからざるを知ったのである。このように見ると、古も復せないわけではないが、ただ徹底して復し、言行一致的にやろうとすれば、悪い所がないばかりか、逆にそれによって新しい道を探し当てることができる。これは確信できる。だから現在の青年の復古思想について、わたしは何も訝る必要はないと思う。なぜならこれは当然であり、いつか壁にぶち当たれば、自然と目が醒めるものであるから。恐いのはあの言行不一致の復古家たちで、口では賑やかに言うが、実行を試そうとはしない。深衣は着ないし、小篆も書かない。甚だしきは古文さえ通ずるようには書けない。そんなことでは永遠に目が醒める日は来ず、まるで袋小路の入り口に立ってこの道は国道だと言い張るくせに、自分では突き当たりまで行って見てみようとはせず、一生そこで立ち尽くすしかないようなものである。（民国十一年十一月）

※初出：1922 年 11 月 1 日『晨報副刊』

＊「中国今後の文字問題」（1918 年 4 月『新青年』第 4 巻第 4 号）等を指す。

一年の進歩

最近の五週間のうちに、続けて二年が過ぎた。これでようやくほんとうに年を越し、民国十三年歳次は甲子の年になった。“猪の年”を思い返せば、国内では少なからぬ重要な変化が起きたけれども、わたし個人にとっては一歳バカになった他には、実に話せるような良さは乏しい。だがよく考えてみるとまるきり進歩がないとは言えない。これがわたしがまだなんとか慰めになると思う所である。この一年でのわたしの唯一の進歩は、自分に知る所がないのを知ったことである。以前わたしも自分から知る所はある、古今の賢哲の中に一人師匠を見つけ、それを典拠として、主観を形成し、一切を評量できるだろう、これは簡便な方法であると考えた。しかしそのような師匠は後になるとだんだん見つけにくいように思われ、そこで思わず狼狽し、盲人が杖を失ったようになった。他人の出来合いの話は聞こうとしないし、自分でも又意見を考え出せない、帰結するところは真面目に白状するしかない。モンテーニュ(Montaigne) の言葉を借りて“わたしは何を知っているか？”と。わたしは毎日新聞を読むが、実はどうも気持ちがぼんやりしているのだ。政治・外交上の様々な確執については往々にして誰が是で誰が非なのか理解できない。両方の話がどちらもそれもそうだと思うし、又どちらも当てにならないと思う。わたしは常々、まさか自分には“良知”というものがないのではないかと疑っているのだ。“どうもそのようだ”と答えざるを得ないように思うのだ。わたしはその言葉がきっと王学を提唱する友人をとても不愉快にするに違いないと知ってはいるのだけれども。 ほんとうに、わたしの心は確かに空っぽで、まるで古い宮殿のあの椅子のように、――だがこれもなかなかさっぱりした事だ。わたしがもし一つの“単純な信仰”、あるいは一つの固執した偏見を見つけることができたなら、わたしは考えを持ったことになり、自ずと満足してかつ快活になれるだろう。しかし偏見を持ったものがそれを取り除こうとしてももちろん容易でないし、持たないのに探してこようとするのもいささか困ったことである。たぶんわたしの知る所がないのは今日に始まったことではなく、以前は自分で知っていると思っていたに過ぎないのであろう。いま突然覚悟したのは、ほんとに好い事で、特に補救の方法を探す必要がなくて済む。現れた馬脚こそほんとうの足であって、自ら知る所なきを知ったのはわたしの第一の真知であるからである。

わたしはうれしい、この機会に、以前新聞雑誌の原稿をわたしに読むようにと寄せられた各位に声明できるのは、わたしは“批評を乞う”という文字が押されたさまざまな文章を受け取ると、どうしても懸命にお相手をしたいとは思うのだが、上に述べたようにするに如かずで、実際批評はできないし、敢えてする気もないのである。もし無理やりわたしに好し悪しを言わせようとするなら、主任試験官に倣って脚で一蹴りするしかない、――だがこれは当然当てにするには全くもって足りない。わたしもかつて世の中にはアーノルドのような大批評家がいるとは聞いたことがあるが、アーノルドならよいが、わたしではダメである。わたしはただできるだけ多くの大批評家の言論を読み、自分の見識を広めようと思うだけで、朱筆を執って他人の文章に点を入れようなどと言う考えはない。だから“批評を乞う”という要求に対しては、常に“御下命にはお応えできません”*で、一切ご諒察賜わらば幸いである。（民国十三年二月）

※初出：1924 年 2 月 13 日『晨報副刊』

---

*原文は”有方尊命”、カッコがついているので尺牘の常套句なのか。周作人の松枝氏宛の解説では、方を違背と解すとあり、命に従ってやることはできないと言う意味とある。”尊命に方(たが)うあり”と訓む。

元旦の試筆

以前遠い親戚で大叔父の代の人がいて、彼は孝廉公で『太上感応篇』を奉持した人で、毎年年末になるといつも一枚黄紙の上奏文を書いて、焼いて玉皇大帝に呈し、彼が年内にどれだけの善行を積んだかを報告し、“地仙”の欠員補充の資格を買うために登記してもらう便宜とした。いまは民国十三年もすでに過ぎ、今日は元旦で、家に迎えてともに“屠蘇”を飲んだ友達も去った後、狼毫の筆を執って書き初めをしようとした。去年の生活を回想してどんな事が記録するに値するか、あれこれ考えてみたが結局何もない。ただ次のちょっとした感想だけが過去の経験の結果ということになろうか。書き留めてわたしの“上奏”の材料としよう。

古人は“四十にして惑わず”と言った。これは古人が道を学んで得る所があったということである。われわれはそうはいかない。わたし個人について言えば、三十にして立ち、（これは何かの主張を立ち上げることである。）四十にして惑い、五十にして学に志すといった所だろう。以前わたしはまだ自分には“自分の畑”があると思っていた。が去年あたり少し疑わしくなり、今では明々白々そんな畑などないことがわかった。わたしは当初たぶん人の畑を借りて少しばかりの痩せた大根や苦菜を作り、いい加減にごまかしてきただけなのだ。ところが“いま現在”になってみて突如として自分がもともと“遊民”であって、肩に一丁鍬を担いだだけで、農繁期には雑用をする以外は、実は何もやれる仕事がないということに気がついたのだ。自分の畑を失くしたのは何の惜しいこともない。もし、世間の良い習慣が規定するように、ゴロツキと同じように気楽に日を過ごすことができるならば。ただどうしても少しの無聊は免れないだろう。だからよくよく二三年考えれば、あるいはまた発憤して開墾し、二畝ばかりの田畑を拓くかもしれない。目下はやはり真面目に素人を自認し、“文学者”の看板はしまうことにしよう。

わたしの思想は今年になって又民族主義に戻った。当初は銭玄同先生と同じく、最も早くは尊王攘夷の思想であって、拳匪が決起した時に田舎で一人の“洋鬼子（ようきじ）”が“破脚骨（ごろつき）”に銅盆帽（どうのヘルメット）を打ち落とされたと聞いて、 甚だ愉快で、日記に書き込んだ。　後になって『新民叢報』『民報』『革命軍』『新広東』の類を読んで、一変して排満（および復古）となり、民族主義を堅持すること十年の長きに及んだが、民国元年になってようやく軟化した。五四の時代わたしはまさに世界主義を夢見ていて、多くの迂遠な話をしたが、去年の春に範囲を縮小して、改めてアジア主義とした。清室が廃号退出するに及んで、遺老や遺少及び日英帝国の浪人が風浪を起して、詭計陰謀は今になっても已まない。わたしはそこで又自分の迂闊さを悟り、民国の基礎がまだ固まっていない、現在は実事求是でなければならず、民族主義からやるのがよかろうと思った。わたしはかの宗教的愛国者たちが提唱するように、国家だから愛すべきだとは信じない。だが個人の生存のために民族主義を主張するのは正当であり、しかももっと“高尚な”別の主義*とも衝突しない。だがこれは個人の傾向に過ぎず、決して青年に宣伝しようとは思わない。民族革命思想の浸潤を受け、そして光復と復辟の時の恐怖の圧迫を経験したことがない者は、我々のこうした心情について大抵は理解できないか、あるいはあまりにも古臭くあまりにも非紳士的な態度だと思うかもしれない。だがそれらはいずれも何の関係もない。わたしはただわたしの思想

の反動を表明するだけである。それが過激であろうが頑固であろうが関係なく。ただひとがわたしのことを世界主義の人などとおべんちゃらを言わないように願うだけである。

　ことわざに、“元旦に紅紙に書けば、万事うまく行く”と云う。理屈としては何かめでたい言葉や滑稽な言葉を言うべきで、それでこそ元旦の試筆という名に適うわけだ。しかしどうしても何も出て来ず、ただありのままにいくらか言いたいことを書いたまでで、その他のことはまた後で補うしかない。民国十四年一月。

※初出：1925 年 1 月 12 日『語絲』第 9 期

＊「もっと“高尚な”別の主義」　未詳。

沈黙

林玉堂〔林語堂〕先生は、フランスのある演説家がひとに緘黙を勧めておきながら、三十巻もの本を書いて、物笑いになったとおっしゃる。だからわたしはいま沈黙についての文章を書くのだが、極力節約に努め、原稿用紙三枚を限度とする。

沈黙の提唱は宗教面から言えば、たぶん材料はとても多い。神秘主義では沈黙をとても重く見る。メーテルリンクに一篇絶妙の文章がある。しかしわたしはそういう風に書こうとは思わない。宗教を擁護する嫌疑がかかるのを恐れるばかりでなく、実際そんな知識も才力もないからである。今はただ世故人情に着眼して述べてみよう。

沈黙の長所は第一に力の節約である。中国人は、話が多いと気を損ない、書き物が多いと神を傷なうと言う。話をせずものを書かないのがたぶん長生きの基なのだろうが、ふつうの人間にはなかなかできないことである。それでは一時の沈黙でもよいとしたら、われわれには大いに裨益になる。三十時間に一篇の大文を書き上げるとすれば、睡眠の時間さえなく、三日目には必ず頭痛がする。演説家が演壇で二時間も呼号すれば、口が乾き喉が痛くなってしまう。ともにやる甲斐もないこと甚だしい。沈黙するなら、そんなご苦労はしなくて済む。――もっとも名声は得られないけれども。

沈黙の第二の長所は手間が省けることである。古人は言った、「口は禍の門」と。門を閉じ、封をすれば、禍は発生しようがない。（“門を閉じて家に坐っていても、禍は天から降ってくる”。それは“空気伝染”ということであって、話は又別である。）これは利の一である。自分で人を説得しようとしたり、あるいは何か弁解しようとしても、例によって何の影響もなく、しかも言えば言うほどいよいよ掴み所がなくなり、早いうちに沈黙するには及ばない。そのために説得あるいは弁明はできなくなるけれども、少なくとも誤解を増やすことはない。又あるいは他人が縷々述べるところがあっても、そんな場合も例によってあまりよく理解できず、なかなか容易には答えられない。そんな時沈黙は適当な方法の一つである。古人は物言わぬは最大の理解といったが、この言葉には深奥な道理があるのかもしれない。わたしの考えでは、わたしにとって少なくとも理解しないということを隠しておける、そして相手の方でも理解されたと勘違いする自由を持つことができる。沈黙の長所の長所は、これがその二である。

善良な読者諸君よ、わたしのことをあまりにも玩世的(Cynical) だと思わないでもらいたい。実を言うと、わたしは人間の相互理解は至難と思う。――たとい不可能な事ではないにしても、自分の真実の感情や思想を表現するのもやはり同様に難しいと思う。われわれは話をし文を書き、他人の話を聞き、他人の文を読み、互いに理解できたと考える。これはいささか自ら楽しみ意のままになる好い夢であって、自分で醒めたと分かった時でもまだすぐには認めようとせず、夢だと知ってもまだ夢の境地に一刻でも長く居続けようと思う。しかしわれわれがそのように話をし文を書くのもすべてただそうしたい、そのようにいささか楽しみたいと思うからに過ぎず、もしそれが何の楽しめるものもないと思うなら、できるだけあっさり止めてしまう。 門外の芝生の上で何度かトンボを切り、向かいの高楼の上の美人が見ていると想像するのは、（明らかに

彼女が見ているとは限らないと分かっていても）とても愉快である、というのは一つの方法である。どうせ彼女が見るはずもないなら、トンボは切らずに、芝生に寝転んで雲でも見よう、というのも一つの方法である。両者はどちらも正しい。わたしが今回やるのは二番目のプログラムなのだ。

わたしはトンボを切るのが好きな人間である。自分でうまく切れないことは知っているけれども。だがこれもただ巧みでないというだけであって何か害があって、世道人心の心配になるほどではない。だが自分の評語はどうしてもあまり当てにはならないから、多くの知識階級の道学者から見れば、わたしのトンボ返りはみな切り方がいささか不道徳なので、その姿勢が風俗を壊乱するほどではないならば、その主旨は治安妨害に近い、ということになる。こうした情況は中国では意表の内の事だと言え、われわれも決してそのために態度を変えようとは思わないが、民間でのこうした傾向がある一定の程度に達するなら、トンボを切る人間は少なくとも力を節約することを考える時になったのである。

三枚の原稿用紙はそろそろ一杯になろうとしている。この文は終わるべきである。わたしは三枚の原稿用紙を使って沈黙を提唱した。これが現在の中国に適当な方法だからである。――しかしながらこれはもともと二つの方法の一にすぎず、時にはもう一つの方法、嬉しい時には少々トリックを弄し、“金を借りて憂さ晴らし”を選択することもできる。いつか他所で何かの機縁があれば、また騒ぐかもしれない。　　一九二四年七月二十日。

※初出：1924 年 7 月 23 日『晨報副刊』

＊次の附記は『晨報副刊』に掲載されたもので、文集には入れていない。

附記

わたしは以前多くの別号を用い、読者にご質問の労をおかけし、常に不安を覚えていた。今特に総括して声明する。仲密・子厳・式芬・槐寿・荊生・陶然・開明は、皆わたしが用いた別号である。開明以外は、以後すべて廃止するつもりである。“朴念仁”〔『晨報副刊』でこの文章の署名に使った〕もそのうちに入る。一九二四年七月二十日、入伏の日なり。

済南道中

伏園兄：

あなたはまだ夜航船の趣味を覚えているでしょう。この趣味にはあまり優雅でない非趣味も含まれていますが、すべての過去の記憶と同様、わたしの覚えているものはたいてい時間の熔化を経て変形したものでしかありませんから、思い出すとやはりまだ好い趣味なのです。平素紹興から杭州に行くにはいつも城内から出発します。（これは二十余年前の話です、）一度何人かの友だちと田舎から船で、この九十里一駅の道をまるまる半日一夜をかけて行きました。午後に出航して、夕方にようやく西郭門外に着き、そこで停泊して、みんなは上陸して酒飯を取りました。これはとても牧歌的な趣味で、田園画家の描写に値します。二日目の朝には西興に到着、埠頭の宿の主人がとても慇懃に客を引き止め、うなづいて“ご飯を食べて行きなさい”と言うので、中に入って奥の（文人は当然カウンターのあたりで“短衣の連中”と並んで坐ったりはしません。）ぼろテーブルに坐ると、蝦の炒め物やアヒルの塩漬け卵など“家常便飯”〔普通の家庭料理〕を出すのが、やはり一種特別の風味がありました。残念ながらわたしは長らく長らく食べたことがありません。

今日は特急列車に乗って北京から済南に来ました。思わずふと昔の事を思い出しました。汽車の中で食べたのは西洋料理で、駅の物売りも皆柵外に締め出され、土地の食品を買って食べるのは容易ではありません。以前はこうではなく、一九〇六年わたしたちが京漢線で北京に行って（その頃の大臣は水竹村人〔徐世昌〕でした）練兵処の試験を受けた時には、まだ車窓からいろんな物、例えば一個銅貨一枚の大きな洋梨や一羽銅貨十五枚の焼鶏の類などが買えて食べられたものでした。後でどこかの駅で兎の肉を買いましたが、同学に実はこれは猫だと言う者がいて、みんなは気持ち悪がって食べようとせず、窓から捨ててしまいました。日本の旅行では、新式の整った清潔さの中に、（いま日本の事については“ごくあっさりと”一言半句並べるしかなく、でないと鄧先生の覆轍を踏む恐れがあります）、変わらず旧日の長閑な風趣を留めています。わたしは東海道で一箱“日本一の吉備団子”を買いました。桃太郎の遺風だとは証明できませんけれど、味はほんとうに悪くなかったのですが、残念ながらみんな子どもたちに分捕られてしまい、わたしは一つか二つ口にしただけで、しかも又憎らしいほど小さいのでした。またふつうの“弁当”もあり、形も中身も要するに美術的で、味もよかった。肥魚大肉を食べ慣れた大人先生方の口には自ずと合わないでしょうが。少し“文明”的なのには“アイスクリン”があり、麦粉で作ったカップの中に入っていて、最後にはいっしょに食べてしまいます。――わたしは鉄製の急行に乗っていて、お腹が少し空いたので、何かおやつ、マンデスの物語の中の王子が食べたようなのを食べたいと思いましたが、現実には実際方法がなく、食堂車に行き西洋料理を食べるよりほかありませんでした。

わたしは決して西洋料理が嫌いなわけではありません。でも食べはしますが、もし強迫的に食べねばならなくなった時には、嬉しくはなくなるでしょう。もう一つ、中国を旅行する西洋人は確かにあまりも礼儀がなさすぎます。たとい何か暴行するのではなくても、要するに気ままで嫌

われ者です。例えばわたしのコンパートメントの怡利洋行の老板は、子犬を一匹連れていて、天津で四十円も出して買ったということですが、彼は列車に乗るや高いびきで、子犬が部屋で小便をし、ボーイに三度も床板を拭かせました。又餌をやらず、あっちに行ったりこっちに来たりして、ワンワン鳴き叫ぶままです。わたしは動物虐待者ではありませんが、人が動物を溺愛し、犬猫を抱いて列車や船に乗り、他人の邪魔をするのを見ると、やはり嫌悪を催します。そうした溺愛は、まさに虐待と同じくいささか獣性的だと思います。西洋人の中にも当然真の文明人はいます。だが商人はたいていダメで、中国の商人と同じです。中国には近ごろ新しく“鬼をやっつける”――つまり“玄学鬼”[ii]や“直脚鬼（せいようじん）”をやっつける――傾向が出てきましたが、わたしは大体において賛成します。ただ彼らの態度にはいささか附和し兼ねます。われわれは一切の鬼や神をすっかりやっつけようとしますが、それは不可能な事です。さらに彼らが位牌を拝もうが、魔除けの呪文を念じようが、当然何の効き目もなく、ただ中国人には法術士の気が満ちているか、あるいは一点の悪因を残すことを表明するに十分であります。われわれにでき、しなければならないのは、如何にして玄学鬼あるいは直脚鬼に害をさせないかということです。わたしはあらゆる鬼はすべて害をなす者だと信じています。もしそのまま放って置くならば、たとえわれわれ自身の“曲脚鬼（あじあじん）”にしたところで、どうしてそうでないことがありましょう。……ひとは言います。よもやま話をして最後になると、きっと下卑た話になると。いまわたしは逆にこんなクソ真面目な大道理を語ることになって、あまり定式に合わないようですので、もう続けて書かなくともよいでしょう。

民国十三年五月三十一日、津浦線の車中にて。

※初出：1924 年 6 月 5 日『晨報副刊』

---

[i] 鄧先生の覆轍　未詳。

[ii] 玄学鬼　未詳。

済南道中の二

　徳州を過ぎると、一雨降り、天気はとみに爽涼を覚え、天色も暗くなりました。室内に電灯が点り、窓外を一望すると、別に明るい光が樹木や地上を照らし、奇異な感じを覚えました。同乗の寧波の人が教えてくれ、それは後ろの護送の軍用車の電光だというのです。頭を出してみると果たして最後の一両の屋根に、両側にそれぞれ一つの灯（これはわたしの推測です。というのはわたしが見たのは片側だけですから）が光を発しておりました。ちょうど北京城内の自動車の二つの大きな眼玉のように。当初わたしは軍用車の探照灯であるからには、きっととても大きなものにちがいないと思ったのですが、まさしく意料の外に出て、その光は車傍わずか二三丈を照らすだけで、決して林の中の賊影を直に照らすことはできないのでした。そのブローカーの言うところでは、これは去年孫美瑤団長が臨城でかの“何の大事でもないこと”をやってから新たに増やしたもので、すこぶる効果を発揮しているようで、この二本の神光はほんとうに沿線のコソ泥を怯えさせたそうです。というのはそれ以後確かに事件は起きていないし、しかもわたしは昨夜も安全に済南に到着しましたから。だがどうしてもおかしく思われるのは、この二つの光が汽車のしっぽを照らすと、まるで夏の夜の蛍のようで、はなはだ詼諧の趣に富んでいることです。車中に坐っていて、窓外の明るい光が地面から麦の上に移り、麦から木の葉に移るのを見ながら、一種奇妙な感覚にとらわれました。危険なようでいて危険でない、平安なようでいて平安でない、現実のようであって又芝居をしているようでもあり、まるで程咬金〔唐初の名将で、『隋唐演義』『説唐全伝』などの小説で活躍する。重い手斧を振り回すのが特技〕が腰に二本の張りぼての大板斧を挿し舞台をのし歩くのをこの目で見ているかのようでした。われわれはふだんよく言います、しょっちゅう口にするが実験してみることは滅多にないと。いまそれを応用すれば、どんぴしゃり、――これこそいわゆるロマンティックな世界です。

　十時に済南駅に着いた後、洋車に乗って城内に入り、道々多くの店舗が皆すでに店を閉めているのを見ました、――軒並み“戸板”で、浙東に似ています。わたしは故郷を愛する人間のうちには入りませんが、このような街を見て、とても喜びを感じました。ある年の夏、わたしは家から杭州に行きましたが、河水が干上がって、船は牛屎浜までしか行けず、早朝三時か四時ごろに轎に分乗して出発し、蕭山県城を通過しました。その時見た情景が、どうも今回と似ています。だが実は紹興と南京の夜景もそうでなかったことはありません。ただ徒歩で歩いた印象は車上で見るのとはいささか違います。それで連想が繋がらなかったのです。城内はかなりのところがやはりすでにガラスのウィンドウになっていて、北京と同じです。これは今日の午後出かけて見てきたものです。戸板の方がガラス窓よりよいとは言えません。実際ガラス窓は当然戸板よりずっと便利です。 でも傍観者的に見ますと、どうも旧式の店構えの方が風情があります。ガラス窓も自ずとその美しさはあるはずですが、惜しいことに今はまだ多くがそこまで配慮が届かず、新しいものがすべてそうであるように、たいていが粗悪大雑把です。古い建物の粗雑さは、まだそれなりに全体の調和が取れていますが、新式のものはただ軽率乱雑という点が目につくばかりです。

今日の午後友だち四人と大明湖に遊び、鵲華橋で船に乗りました。それは“出坂船”のような長方形の船で、戸口や窓がとても凝っていて、舳先には“逸興豪情”という扁額がかけてあります。――舳先と言ったのは、ただその形式が舳先に似ているだけで、動き出してみると、艫に変わっていて、水夫がそこに立って竿を差していました。彼が使う道具は天然木の竿一本で、なんという木か知りませんが、皮を剥いで、とてもすべすべしていますが、樹身それ自体はくねくね曲がっていて決して真っ直ぐではありません。彼はそれを手にして、大きな船を進退旋回と意のままに操り、しかも小さな衝突一つしないのです。船を遣るのに櫂や櫓を使うことしか知らないわたしのような人間はそれを見て思わず心から驚嘆しました。大明湖は『老残遊記』*の中に一段の描写があり、わたしはそれ以上の文章は書けないと思います。それにあなたは以前教育改進社の年次会の時に行ったことがありますから、わたしがくだくだ言わなくてよいでしょう。わたしも老残と同様、歴下亭、鉄公祠など各所に行きましたが、残念ながら明湖居で白妞が梨花大鼓をやるのは聴けませんでした。わたしたちは又“大帥張少軒”が寄付して修理した曾子固の祠堂、それに張公祠も見に行きました。祠には一幅彼の“門下子婿”の長いひげの写真がかかっていて、“聖朝の柱石”などといった孫公徳政碑がありました。その後で又北極祠にも行ってみました。例によって例の塑像、正殿の右側には大鬼。片手に小さな化け物を提げ、もう一方の手でもう一つ化け物を握り潰し、表情はとても生き生きして、右足は一人の女子を踏みつけていますが、その足はちょうど腰のあたりに着けて、彼女は目を白黒させて口を開け、息もつけないような有様、いったいどんな罪を犯したのでしょう。大明湖の印象はまるで南京の玄武湖のようですが、この湖は城内にあり、なかなか別の趣があります。清人の鉄保の一聯に“四面の荷花三面の柳、一城の山色半城の湖”とありますが、実にうまく湖の好さを言っています。（老残の言うところではこれは鉄公祠の表門の楹聯だそうで、今ではもう取り外されて、享堂内の壁に立てかけてあります。）しかしながらわたしたちは今回荷花は見られませんでしたし、湖辺もしだいに埋められて平地となり、湖面も前ほどは大きくなく、水路も狭まり、両側は私有地となって、一区画ずつ葦の土手で囲まれ、みな養魚池となっていますので、『老残遊記』の記す千仏山の倒影湖に入るといった景色はすでに見るすべがなく、“一声の漁唱”に至ってはまったく聴けません。しかし済南城内に湖があるということは、たといもう以前には及ばなくとも、要するによい事です。これは実に一大公園の代わりとなりますし、公園よりもずっと面白く、青年にとっても有益です。わたしはたくさんの船で学生が湖中を往来するのに会いました。〔北京の〕中央公園で学生たちが路傍に立って髪の毛を鳥の巣のようにした女性を見ようと待ち構えているのよりはずっとよろしい。――わたしは必ずしも人が女性を見るのに反対ではありません。でもああした見方はひとがみても厭になります。この日の湖は散歩にとても快適で、船中には王君の三歳になる子どももいましたので、さらにわたしたちを喜ばせました。彼は宋君の手から干し葡萄をもらって食べていたのですが、何粒かもらうたびに一つ歌を歌ってダンスをしなければならないのでした。彼は五六粒の干し葡萄と交換に、手を舞わせ足を踏んで“一二三四”と歌って聞かせてくれるのですが、後になると面倒になったのでしょう、要求を出しました。“歌わないでも頂戴”と。彼は活発で可愛い子どもで、しかも完全な済南弁です。わたしは彼の口から初めて“俺（アン）”と

いう言葉が言語の中で生きているのを聞きました。そういう口調は北大の徐君の口からとっくに聴き慣れていたのでしたが。

六月一日、“家家泉水、戸戸垂柳”の済南城内にて。

※初出：1924 年 6 月 9 日『晨報副刊』

---

*『老残遊記』　劉鶚のこの書の第二回から第四回にかけて済南の描写がある。「荷花大鼓」などもそこに出る。

済南道中の三

六月二日の午前、工業学校に行って金線泉を見ました。この日はちょうど雨が降っていて、わたしたちはしばらく雨がやんだ隙に、湿り切った青草を踏んで、石池の傍まで行き、老残の様子を真似て頭を傾げてよくよく水面を見ましたが、結局金線は見えず、ただたくさんの水疱が、一連一連真珠のように繋がって、あるいは水銀の蒸気と言った方がよいかもしれませんが、石の隙間から真っ直ぐに上がってきて、まるで地下に幾つも丹炉があって、そこで丹薬を煉っているかのようでした。池の底にはたくさんの植物が生えていて、竹や柏や、名の知らぬ花木、それに一株のバラで、咲いてしまった花萼をつけたままのがありました。こうした植物が水底に生えていて、枝葉は青く、陸上のと同じようでしたが、いったいどういう事なのか分かりません。金線泉の近辺には、陳遵が客を留めるために轄を投げた井戸〔陳遵は漢代の人、人を集めて酒を飲むのが大好きで、客の車の轄を外して井戸に投げ込み帰れないようにしたという逸話が『漢書』にある。〕がありますが、今はただ六尺ほどの四角い池で、轄は投げられますが、投げてもすぐに取り出せます。次いで趵突泉に行き、大池の真中に三本の泉水が上に噴出していました。『老残遊記』によると水面から二三尺の高さに飛び出すということですが、わたしたちが見たのは一尺ほどにすぎません。池の水は雨後でとても濁っていて、“汩汩（べきべき）として声あり”のようには流れず、加えて周囲の石橋石路それに茶館の類が、どこか故郷の脂溝滙に似ているように思います。――伝説では越王の宮女が脂粉の水を流したのが、ここに集まったということですが、いまは俗称“猪狗滙”で、郷村の航船の集合地となっています。それからわたしたちは商埠に行って公園に遊びましたが、門を入るなり又雨が土砂降りで、茶亭に長らく坐り、晴れるのを待ってまた遊覧しました。公園には他に客がなく、わたしたち三人が全園を独占できたのも、とても面白い事でした。公園はもともとそれほど大きくはなかったので、すぐに遊びも終わりで、園内には別に名勝古跡もなく、全てが人工の新設でしたが、一つ大きな建物があり、入り口に扁額がかかっていて、“暢趣游情、馬良撰幷て書”と大書してあって、わたしは長らく瞻仰しました。以前は馬良将軍はただなんとか拳が上手いだけの人だと思っていたのですが、いまはじめてとても風雅の趣味がある人だと分かって、わたしの当初の粗忽を詫びざるを得なくなったのです。

このほか他所には遊覧に行ったことはありませんが、済南という所はもう十分わたしの気に入りました。北京もよいと思いますが、ただあまりに風と塵土が多すぎます。済南にはそれがありません。済南はとても江南の風味がありますが、わたしの嫌いなあの東南の気象はないようです。（あるいはいささか速断に近いかもしれません、）だからすこぶる愉快な所なのです。しかしながら端午が近づいていますので、急いで北京に帰らざるを得ません。そこで五日の午前二時についに急行列車に乗り済南を発ちました。

わたしは済南に四日いて、講演を八度やりました。範囲も題目もみな自分が決めたもので、もともとそれだけでも極めて自由でしたが、いろいろ考えてみてもどうしても何も言うことがないと思いまして、無理やりいくつか題目をこさえましたが、どれも十分な目論見があったわけでなく、話したこととなっては、句々確実であるわけには行かず、句々ほんとうの気持ちを表現でき

ているかは、むろん言うまでもありません。ふだんの談話でさえ、いつも自分の言うことは虚しいもので、心情とぴったり呼応していないと思い、言った途端にそれが分かって、まるで石鹸を噛んだような、気持ちの悪い寂寞を感じます。石川啄木の歌の一つに次のようなのがあります。

何となく
自分を嘘のかたまりの如く思ひて、
目をばつぶれる。〔『悲しき玩具』〕

こうした感覚は、実に何度も経験しました。この八つの題目のうち、ただ最後の“神話の趣味”だけはまだ比較的よいと思います。これは神話についてさらに心得があったというのではなく、ただ世間がこの問題に対して誤解が多いからに他なりません。公刊された文章から見れば、ほとんどまだ相当の理解を持った人がいませんから、わたしは自分の意見に対してまだ疑問は持っていませんし、少しばかり話してもよいかと思ったのです。神話の運命はとても夢と似たところがあると思います。野蛮人は夢をほんとうだと思い、半開化人は夢を兆しだと考え、“文明人”は夢を幻だと考えますが、現代の学者の手の中では、全人格的な非意識の顕現ということになります。神話も宗教的な、“哲学的な”および“科学的な”解釈を経たのち、人類学者によって救出され、その原始人の文学という本来の地位に還原されました。中国ではいまも鬼神が夢に託し魂魄が夢に入ることを信じる人、夢を求めて夢を占う人、夢は妖妄だと言う人がいますが、夢からその人の感情あるいは感覚の分子を探り出し、もし“満願の夢”ならば、さらにその隠れた動機を求め、学術的な研究をしようとする者はいません。神話に言及すると、信じて受容するのでなければ排斥で、その態度はまさしく一致しています。わたしの見るところでは多くの神話に反対する人は科学を標榜しながら、その実その考えは神話は、もし力を尽くして抵抗するのでなければ、確かに信じて受容する可能性ありと思っているのです。これはまさに性意識の頑強な道学者が色情を戒めることを提唱するのと同じで、実際は両極が遇っているのです。ほんとうの科学者は自身が軽々しく信じないうえに、また専ら攻撃を用いる必要もなく、ただ冷静に研究すればよいので、だから懐疑と寛容は必要な精神なのです。でなければ狂信者の態度になります。イエスを非とする者はやはり一種の教徒ですし、孔子を非とする者もやはり一種の儒者で、類例はとても多いのです。例えば近ごろのタゴールに反対する運動もそうです。彼らは自分で科学思想と西洋化は是だと思っていますが、懐疑と寛容の精神を欠いていますから、実際は相変わらず東洋式の異端攻撃なのです。もし東方文化の中に最大の害毒があるとすれば、こうした専制の狂信が必ずその一つです。思わず話がまた外れてしまい、済南とはもうなんの関係もないので、ここで筆を置きます。神話の問題については、話し出すとまたくどくなるので、後日改めてということにしましょう。六月十日、北京にて書す。

※初出：1924 年 6 月 20 日『晨報副刊』

サイレンの物語

サイレン（Seiren）はふつうラテン語に従ってSirenと書く、ギリシア神話では人首鳥身の女怪物で、海辺の岩の上で歌を歌い、航海者を惑乱溺死させる。最も有名な物語はギリシア史詩の『オデッセイア』（Odusseia）[i]の中の、第十二巻で神女キルケー（Kirke ラテン語では Circeと書く）がオディシウスの航海の危難を予告して、

“第一にあなたはサイレンに会うはずです。彼女は遇った全ての人間たちを蠱惑します。もし誰かが不注意に彼女たちに近づき、サイレンの歌声を聞いたなら、もう家に帰ってその妻や子どもに会うことはできません。彼らも彼が帰ってくるのを見ることはありません。サイレンは彼を蠱惑するのに、彼女らの澄み切った歌声を使います。草野の間にうずくまって、周囲は死人の白骨の山です。骨の傍に皮がまさに朽ちつつあります。

“あなたは船を走らせて通り過ぎるのに、蜜を揉んだ蝋で、仲間の耳を塞ぎ、歌声を聞かせないようにしなさい。ただあなたが聞こうと思うならば、彼らにあなたを帆柱に括り付け、縄で強く縛り付けさせれば、あなたは愉快にサイレンの歌を聴くことができるでしょう。もしあなたが仲間に縛りを解くよう求めたら、もっと何重にも縛るようにさせなさい。

“我々の船は（以下オディシウスの自述）まもなくサイレン二人の島に着こうとしていた。一陣の和らいだ風が船を走らせていたからである。突如その風が止んだ。そして無風の静寂となり、神が波浪を眠らせたのだ。……船は陸地に近づき、呼び声が聞こえるようになった時、我々は急いで逃げた。サイレンたちはすでに前から来た船を見つけて、澄み切った歌を歌い始めた。

“‘さあ、有名なオディシウス、さあ、あなたはギリシアの光栄、ここに来て船を泊め、わたしたち二人の歌声をお聴きなさい。凡そ黒船に乗ってここへ来た人は、誰一人としてわたしたちの口から蜜のような甘く美しい声を聴かなかった者はありませんよ。歓び楽しみを享受して、たくさん智慧を手にして帰るのです。わたしたちは全てを知っていますから、すべては神意がトロヤで産んだ苦痛によって、わたしたちは豊かな大地に来たるべき事柄を知るのです。’

“彼女たちは美しい声でそう言う。わしは心で聴きたく思い、仲間に命じてわしの縛りを解くように言い、わしは眉にしわを寄せて頷いて合図したが、彼らは力の限り櫂を漕ぎ、前に向かって進んだ……”

こうして、彼らはこの危難を逃れた。後代の陶器画に描かれたところでは、一人のサイレンは失敗したために海に身を投げて死んでいる。ある人は彼女たちは水神アケロース（Acheloos）と文芸の女神美音（Kalliope）の娘で、もともとやはり神女であり、後に地母（Demeter 新説によれば穀物神と解すべし）が、彼女たちが冥王にさらわれた自分の娘を探そうとしないので、彼女らを鳥身に変えたのだと言う。又一説では彼女たちは地母の娘を哀悼して、どこにでも彼女を探しに行けるように、天に羽を生やしてくれと祈ったのだとも言う。

これはサイレンに関するふつうの伝説である。しかし彼女の来源がどのようなものか、われわれは少し検討を加えることができる。ハリスン女史（J.Harrison）の研究によって、古代美術および宗教思想に基づいて考察するなら、サイレンはスフィンクス（Sphinx）などと同じで、もと

は一種の妖怪（Ker）であったのである。最初はただ死人の魂であったのが、想像で人首鳥身となる。しかし神人同形の傾向が勢力を占めると、魂も化して人形（ひとがた）となり、ただ残った一揃いの翼が旧時の痕跡を示すことになり、鳥身の女人がかくて変じて死の凶鬼、魂を収め命を早める使者となったのがすなわちサイレンである。本来はこうした地下の妖怪はすべて生きた人間を攫い、未来を予知できるといった特色を持っている。肉攫鬼女（Harpuiai 英語ではふつう Harpy と書く）はとても明瞭で言うまでもない。スフィンクスは未来の予知に重点があるけれども、やはり“生肉を食う者”で、サイレンも人を攫うが、ただ蠱惑を用いるだけである。“ホーマー”は彼女たちの蠱惑の力を智慧の餌の面に移し、決して感覚だけを専らにするのではない。これも詩人の改修で、実際には皆が皆そうではない。石刻の残片に郷人の午睡が描かれており、鳥足有翼の女がその身体の上に坐って、彼にさまざまな妖夢を見させているが、これこそサイレンの本相である。史詩では航海者が、“無風の静寂”の中でサイレンに遇うと言っているのは、極めてよい傍証である。ギリシアのような所では、日中の太陽はとても恐ろしく、午睡はとても危険で、放蕩の妖夢のみならず、日射病さえ起こすかもしれない。これはみなサイレンの悪戯である。だから彼女たちは実に災害死滅の主宰者なのであり、多く色情による誘惑を用いる。史詩においては彼女をさらに美化し、又彼女をエーゲ海の島に移した。後世彼女たちは水神と文芸の女神が生んだものとするのは、つまりここから進化してできたものである。ユーリピデス（Euripides）は悲劇『ヘレネ』（Helene）でヘレネは悲痛と苦しみの中でサイレンたちを呼び、次のように呼びかける。

“翼を持つ女たち、処女たち、大地の娘たちよ！”

彼女の本原が地下の妖怪であり、魂の変相であったことが分かる。しかしサイレンと海の関係はここからもっと密接になり、ギリシアの六世紀後の伝説では、“サイレンは海女であり、彼女たちの美色と艶なる歌によって航海者を誘惑する。頭から臍までは人形で、少女のようだが、以下は魚尾で鱗がある”と云う。すでに彼女たちを人魚と混同しており、今のギリシアの郷民はまだそう信じているという。サイレンは恐るべき怪物で、古人は怪物の形象を画に刻んで魔除けのお守りとし、竈の焚き口の上部に“泰山石敢当”のようなゴルゴン（Gorgon）の首を型押ししたり、墓の上にサイレンあるいはスフィンクスを並べて邪鬼を避けたりした。後人は墳墓と唱歌の連想から、次第にサイレンを挽歌を唱う哭き女として、墓碑に彼女たちが髪を摘み哭き吟う様子を刻んだ。そうして彼女たちの色情と危険な分子は皆失われ、ローマの詩人がサイレンは地母の娘が攫われたのを哀悼したために鳥身になったのだと言うのは、おそらくここから生まれた伝説だろう。現代の西欧では、サイレンという言葉は借用されて蠱惑的な女性を指す。それは彼女の最も新しい生命となった。

本篇の材料は、各神話集のほか、ハリスン女史の『ギリシア宗教研究導言』およびロースンの『現代ギリシアの民俗と古宗教』[ii]を主とした。　民国十三年九月二十八日。

※初出：1924 年 10 月 5 日『晨報・文學旬刊』

[i] 『オデュッセイア』　岩波文庫松平千秋訳参照。

[ii] ロースンの『現代ギリシアの民俗と古宗教』 J.C.Lawson: Modern Greek Folklore and Ancient Greek Religion. A Study in Survivals.1910.

『二本足』序

『二本足』[i]は一篇の童話である。文学的童話はデンマークのアンデルセン（Hans Christian Andersen）に至ってすでに絶頂に達し、もう彼に及ぶことのできる者はいない。彼は永遠の子どもであり、詩人の筆でもって児童の思想を書いたから、その作品は文芸の創作であり、しかもまたほんとうの童話である。エワルド（Carl Ewald）[ii]は彼の同郷であるけれども、かのご老体と座を争おうとしても、当然あまり希望はない。天下のどこに第二の七十歳の子どもがいるだろう。だが『二本足』は一篇の優れた文学の童話たるに恥じない。それ自身の特色を持っているからである。

自然の童話の妙は何か意味がなくても構わないところにあるが、文学の童話はたいていの場合意味が趣味より多い。アンデルセンにしても多くがそうであって、ワイルド（Oscar Wilde）などを持ち出すまでもない。いわゆる意味とは二種に分けられる。一つは智慧であり、一つは知識である。第一種は教訓に重きを置き、主観的であり、勧戒の寄託から人生観の表現に至るまでがなかに入る。種類もすこぶる多く、数量も少なくない。古来文学の童話はほとんど十中九までがこれに属する。第二種はすなわち科学の物語で、客観的である。科学の発達はもともと近百年来のことにすぎない。それら無味乾燥な事実を目新しく美味しい物語に語りなすのは決して生易しい仕事ではない。だからそうしたものは非常に少なく、ほとんど科目はあっても書物がなく、上のものとはまさに正反対である。『二本足』はこの科学の童話の中の佳作であって、うまく語られたばかりか、材料もとても戯曲の趣味と教育的価値が豊かである。

『二本足』は人類の生活の変遷を語る童話である。文化人類学の知識の教育上における価値はいくら見積もっても多すぎることはない。もし誰かが児童の心得るべき基本常識は何かと問うならば、生理以外にはわたしはこれを挙げる。中国人の小学教育は、両極端が忠孝節義を語ること、あるいは借用書・始末書はどう書くかを教えることであり、言うまでもなく、中間が彼らに人生の知識を与えることということになろう。しかし天文地理を何年もやって、結果自分がどのように生きているのかという事実さえ相変わらず分からない。こうしたやり方、教育者が彼らの瓢箪から売り出すのがどんな薬かは、我々素人には知りようがない。だがもし生徒の父兄の資格で一言いうことが許されるならば、わたしは子どもらが高等小学校で勉強するとき、国文・数学など以外に、人体及び人類の歴史に関するそれなりの常識を身につけなければならないと願う。だが現在の学校はたいていが職業と教訓を中心とし、あまりこうした小事を顧みる暇がない。動植物学の知識は多くが中立を守り、人間の生理とあまりつながらず、人体生理の教科書もまた一章を欠いている。中学になっても人間はまだ泌尿をしない。人類文化史に至っては講話の類のものでさえ課程にない。だからこうした知識は学校外の読み物に求めるしかない。わたしにはいま二人の娘がいるが、十二年来わたしはいつも、性教育の話の書を一冊用意して彼女らに読ませたいと焦ってき、いまは“尻に火がついて”いるのだが、ついに一冊として良い書物が見つからないし、また教師や医者がこの啓蒙の責任を代わりに担ってくれるところがどこにもない（わたしは自分でも実際あまり父たるの模範である資格がないと思っている）のは、まことに辛

いことである。文化の変遷を語る書物はまだ一二あり、たとえばすでに訳された『人間と自然』などは有益な本であるが、それは記録の文章であって、高等小学校の生徒には適するが、もっと幼いのには物語の方がふさわしい。『二本足』はそうした科学の童話の一つだと言える。

『二本足』はほんとうの意味での動物物語である。ふつうの動物物語はたいていが獣を人格化しているが、彼らの原有の特性を保存しているので、読めば人類社会の喜劇に似ており、もっぱら生物界の生活現象を表すことに重きを置いていない。『二本足』が動物物語と言われるのには別の意味がある。すなわちそれは主人公の二本足先生を一匹の動物として書いており、けっして彼を我々自身あるいは我々の祖先として、無意識であれ意識的であれ自己中心の粉飾を加えていないからである。それは二本足を十分利己的で強毅聡明な一人の人間として書いており、心の持ち方は従兄の猩々以下であるが、智力は様々なものを超えていると言う。良かれ悪しかれこれが要するに人類の実際の情況である。『二本足』は人類の生活を書き、人間を百獣の一つとして見ることができた。これは科学の精神に符合するばかりか、この物語をさらに面白くしている。

この科学の童話『二本足』はいま李小峰君によって中国語に訳された。子どもたちは感謝すべきである。拠ったのはマットス（A. Teixeira de Mattos）[iii]の英訳本で、もとに挿絵数幅があり、また雨の情景の一枚はデンマークの画家の原本で、特に面白く、読者の興味を引く助けになるだろうと思ったので、李君に頼んで全部入れてもらった。

民国十四年二月九日、北京にて記す。

※初出：1925 年 3 月『語絲』第 17 期

---

[i] 『両條腿』　李小峯訳　北京北新書局 1925 年 5 月初版

[ii] Carl Ewald(1856-1908)　デンマークのジャーナリスト、童話作家。進化論をもとに自然史をおとぎ話に仕立てた『Tales』(1882-1906) 14 巻がある。『二本足』もその中の一つであろう。

[iii] マットス　A. Teixeira de Mattos(1865-1921)　アレクサンドル・テイシエラ・ド・マットス。オランダのジャーナリスト、翻訳家として有名。エワルドの作品を『Two-Legs』(1906)をはじめ相当数訳している。1906 年の Scribner 版の初版には挿絵がなく、1921 年版には Johan Briede と Helen Jacobs の挿絵がついている。周作人が雨の情景というのは多分 Briede の次の絵であろう。『雨の日の書』に因むものかもしれない。

ONE DAY THE RAIN CAME

【附録】十五年前の回憶　汪仲賢

『晨報副刊』で仲密先生が江南水師学堂の事を語っておられるのを読み、思わず十五年前の学校生活を思い出した。

仲密先生の話は、だいたい今から二十年前になる。彼はわたしの先輩で、会ったことのない同窓である。わたしが彼と違うのは、彼が“機関科”にいたのに対し、わたしは“航海科”にいたことである。

われわれは狭い校舎の上海の私立学堂での勉強に慣れていたので、水師学堂に入ったばかりの頃は多くのことが気に入らなかった。われわれより上の学生は、各人が大きな部屋を独占し、内には多くの単幅の書画が掛けてあり、卓上には花瓶や置き時計などが並べてあった。われわれ上海から行った学生はみな彼らを“新婚式の部屋”と呼んだ。

上海の私立学校で勉強していた時には、学生と教師の間は、何の身分差もなく、学生に意見があれば何でも教師に言うことができた。ところが豈知らんやそんな気楽さに慣れていたので、官立学校に入ってついに大きなペテンにかかった。われわれのクラスの学生は上海で編入試験を受けて入ったので、入学試験では数学の分数計算などの問題も出た。ところが学堂に入って、最初の日の授業に出ると、その教員はなんとわれわれに１２３４と十のアラビア数字を教えるのだ。立て続けに三日経ってもまだ終わらない。わたしは我慢しきれず、その教員に一言言った。“わたしたちはとっくにこんなものは習っています。どうして又時間を潰す必要があるのですか。”これがその教師の怒りを買い、たちまち仏頂面でわたしを怒鳴りつけ、そして言った。“お前がこんなに楯突くなら、明日校長に申し上げ、退学させる！”わたしは彼がほんとうに退学させるのかと恐れて、すぐに部屋に戻り布団を丸めて上海に逃げ帰った。二ヵ月のち、同級生が手紙で、あの教員はもう馘になったと教えてくれたので、わたしはようやく勉強に戻った。

もう一人漢文を教える老先生がわれわれに教えてくれた。“地球は二つあり、一つは自動で、一つは被動、一つは東半球と言い、一つは西半球と言う”と。その時わたしは除籍を恐れてもう彼には抗弁はしなかった。われわれが住んでいた部屋の入り口の敷居はみな踏み潰されて筆置きのような山形になり、床板にはあばたのような焦げ跡があった。ともに先輩たちが学堂に残した生活の痕跡であった。

構内では機関科と航海科の学生の間の隔たりはとてもひどく、ふだんはほとんど往来しない。わたしは学校に四年あまりいたが、機関科に行ったのは十回に満たない。水師学堂の歴史に詳しい人の言うところでは、以前両科の学生は互いに敵視しあい、しょっちゅう決闘が起こった。一度など最大の械斗があり、雨天体操場とマストの網あたりを戦場とし、双方に多くの負傷者が出た。学堂の校長も阻止の方法がなく、学生に向かってため息をつくばかりだったということである。仲密先生が学堂におられた頃には、こうした事件を経験されたのであろうか。

われわれ航海科の長方形の中庭には、四つの煉瓦を畳んだ花台があり、それぞれに蝋梅が一株植えてあった。蝋梅の花が咲くのを見ては、学年試験の準備をしなければならないのを知るの

だった。試験が終わって家に帰るのは、蝋梅の真っ盛りの頃で、明くる年学校で授業が始まっても、まだ何日かは残香を嗅ぐことができた。この四株の蝋梅の色香は、航海科の学生だけが独り占めでき、機関科にいる同学は享受の権利がなかった。

学堂では毎日午前と午後にそれぞれ二教課で、午前十時に十分の休憩があるだけだった。朝大椀で二三杯のお粥を食べ、十時に授業が終わると、往々にしてお腹がぐーぐーなる。小使に学堂の入り口まで行って銅貨二枚の山東焼餅、銅貨一枚のごま油のラー油と酢を買わせ、焼餅につけて食べると、香ばしく辛く酸っぱくそして飢えを充せて、ほんとうに山海の珍味よりもまだ旨い。

仲密先生が言う老夜回りには、わたしも会ったことがある。彼は相変わらず健康で、相変わらず人に長毛の話をするのが好きだった。深夜彼が関帝廟に出入りして時を告げるので、何人か小さい学生は、とても彼の肝っ玉が太いのに敬服して、よく彼に訊いた。“幽鬼に遇ったことある？”彼は生涯に一度だけ食堂のそばで黒い影を見たことがあると言った。又怪を見てみても怪となさざれば、その怪自から退く。だから夜回りしても幽鬼など怖くはないのだとも言った。わたしがいた部屋は航海科の東９号で、窓の外に廊下はなく、彼もいつもは航海科に入ってこなかったので、毎日彼に会ったわけではなく、彼に対する感情も仲密先生ほどには深くはない。

幼い頃から都会で育ったので、南京に来て学校の後ろ一帯が小山なのをみて、ずいぶん喜んだ。生活に厭きが来た時には、口実を設けて休みを取り、独り小山に散歩に行った。機嫌のよい時には、山を越え嶺を越えてそのまま清涼山まで行って戻って来ることができた。ある時やはり自分一人だったが、小山の天辺の栗の樹の林までかけて行ってたっぷり午睡をし、醒めて下山して、ある白壁に一枚“通行人に警告す”という貼紙があるのを見つけた。当山内に最近一頭大きな狼が出て、常時白昼出てきて人を傷つく……と言うのである。わたしはそれを見て全身冷や汗が出、以後は独りでは山によう入らなくなった。

われわれが学堂を出る前になった頃、魚雷堂に行って三週間の講義をノートしたことがある。われわれの傍にはいくつかの本物の魚雷が並べてあり、手のひらにたくさん Torpedo という字句を書いた。しかし教師も学生も一言も物を言わなかったので、手のひらに書かれたものと座席のそばに並べてあるのが結局どんな関係にあるのか、実を言うとわたしには今もって少しも分からないのである。仲密先生が今でも“白頭魚雷”などの名詞を覚えておられるのは、先輩方がわれわれよりもずっと聡明だったことが分かる。わたしはずっと白頭魚雷がどんなものか知らないのだから。

“君は海軍の出身だろう、黄浦江に跳び込んだって溺れ死するはずはないだろう。”こういう質問に会うのは、いちばん頭が痛い。仕方がないので、次の二つの話で彼らに答えるしかない。新聞社の飯を食う人は誰もが文選（ぶんせん）ができるとは限らない。芝居で飯を食う梅蘭芳が必ずしも真剣真銃が打てるとは限らない。“南京水師”出身の学生が泳げないのは、おそらくプールで溺れ死んだ小さな先輩の影響を受けたのだろう、と。

（『時事新報』「青光」欄を録す）

若子の死　　（北新書局版『雨の日の書』増補）

若子、字は霓蓀（げいそん）、中華民国四年十月二十三日午後十時に生れ、民国十八年十一月二十日午前二時を以て死亡、年十五歳。

十六日若子は学校より帰り、晩に嘔吐腹痛し、自ら盲腸なるを知れり。然るに医師誤診して胃病と為す。次の日復た診て初めて盲腸炎と認む。十八日送りて徳国病院にて手術をするも、已に腹膜炎を併発して、遂に起たず。手術の後、苦痛少しく已むも、熱は降らず、十九日午後益すます煩躁を覚え、晩に至りて忽として啼きて曰く、“死んでしまうよお”と。継いで昏囈す。樟脳油を注射するに、旋ち清醒して常の如し。迭（つ）いで兄姉弟妹の名を呼び、悉く招びよす。唯兄の豊一は東京に留学して相見ゆるを得ず。その友人亦至る者有りて、若子は一一招びよせ、唯医師を痛恨して置かず、常に両腕を以て力（つよ）く母の頸を抱き低く語りて曰く、“かあさん、わたし死にたくない”と。　然かれども終に死せり。ああ、傷しいかな。

若子の遺体は二十六日西直門外広通寺内に置き、明春西郊に地を購いて安葬せんと擬す。

わたし自身はとっくに不惑を過ぎた人間であるし、妻は代々禅宗の教を奉ずる者で、はなはだ深い迷妄を減ずることはできるはずである。しかし物を見て人を思うのは、人情の免れざる所で 、ましてや臨終にも神経明晰であってみれば、すべての言動がありありと心に残り、折りにふれ一たび思い及べば、まるで腫れ物に触れたようで、時には不思議に思われる。こうした情景は、思い返すさえ堪えがたく、ほんとうに当時どうして我慢できたのか分らない。今ようやく初七日を終え、筆を執って若子の死の前後を記そうとしたのだが、やはり不可能な事である。あるいは結局は永久に不可能な事であるかも知れない。わたしは以前「若子の病気」を書いたが、今日は「若子の死」を書かざるを得ないのだが、これはどうしても書けない。この篇は結局題だけで中身の文がないのであろうか。ただ若子の生卒年月のみを記して記念とする。十一月二十六日葬送より帰った夜に、豈明附記す。

『雨の日の書』初版に載せた写真は五年前のものであったので、今は撤去して改めて若子の今年撮った遺影を載せる。これは八月十七日北平で撮ったもので、死の三ヵ月前である。又記す。

※初出：1929 年 12 月 4 日『華北日報』副刊第 218 號

二〇一九年九月三〇日発行　第一版

周作人文集翻訳叢刊
『雨の日の書』（雨天的書）

訳　者　　中島長文©

発行所　　雙楡書屋